

督教の防護説となしたり、然り而して、*ジョン・スチュアルト・ミル*が嚴しく之を批難したるは當然の事なりとす、其言に曰く、右の如き宗教主義に據るときは、吾人が禮拜の目的物の道德的屬性は不可知なるものにして、且つ普通に道德性と呼做す者とは非常に異なるものたらん、此くの如き者を禮拜するを以て吾人の義務なりと云ふが如きは、實に不道德的の極と見做なきを以て得ずと、氏又曰く、人あり予に教へて曰く、至高なる人間の心意が概念し得べき一切の美德、優質を吾人の概念し得ざる程度まで具有する所の實在者存在すと云へる、嘉音は信すべきものにあらず、世界を支配する實在者の屬性は無限なれども、其屬性の本質は吾人之を悟ると能はず、此實在者の政治の原則は吾人之を知るとを得ず、唯知るとを得るとしては、吾人が概念し得べき至高なる人間の徳性の制可する所にあらずと云ふことのみなりと、請ふ論者余をして此言に承服せしむるとを爲せ、さらば予は堪へ得る丈け、余が命運に堪ゆ可きなり、然れども人若し余に先ちて、余は之を信仰せざる可からざると同時に、至高なる人間の徳性を表明するの名稱を以て此實在者を喚ぶる可からざると云へば、則ち余は遠慮なく、之を爲ざるべしと言はん、予は又言はん、予は此か

る實在者を禮拜せざるべしと、假令此實在者にして如何程の權力を余の上の有するとするも、此一事は決して予に強ゆると能はざるべしと、*ハミルトン・マンセル*の兩氏が、人間は來世に在ては神を知るを得可しと論定したるは又矛盾に陥りたるものなり、*ハ*氏は曰く、制限なくしてと、*マ*氏は曰く、今人靈の動搖定りなき水面より出で、隱見出沒の閃光となりて輝ける光は、いつか靜止して、澄清なる表面に照映する神の顔面の沈恒なる像となるに至る可きなりと、然るに兩氏の哲學の基因する所の臆説を見るに、有限者は其有限なるの故を以て、無限者若くは無碍者の性質如何を知るに由しなきものなりといふものなり、果して然らば神にして無限に、人にして有限なる以上は、今も未來も、何時までも、神は不可知的なる者たらざるを得ず、然るに此に兩氏の説より一層深遠なる道理は、兩氏の鋭敏なる言語の爭論の上に其明光を放射して、之か爲め兩氏は識らず、自己の抱持せる哲學と相矛盾し、絕對は有限の心意を以て知るべからざる者に非らずして、心意の進歩的發達と共に次第に知らるべきなりとの、意味を含める理論を主唱するに至れり、蓋し絕對者の性質は死後の生活に於ても、有限の心意を以て全く之を

知るを得るが如きとは到底永へに出来得べからざるとなれども、雨氏は實に之を出来得べしとまで主張するものゝ如し、

フイスク氏は其著「宇宙哲論」中に絶對に就て論じて曰く、如何にしても時間と空間の爲めに制限せらるゝと思惟すべからざるの一勢力存在するあり、吾人の意識に表現せる一切の現象の如きも、亦た之が表彰たるに過ぎず、然り而して吾人の此勢力を知ることを得るは、只だ是等の表彰を媒して初めて知るなりと、氏は自ら此説を呼て「宇宙有神論」と稱したり、近頃世に公にせし一書の中には氏曰く、不可知的と云へる語をば、余は注意して之を用ゆることを避けたりと、而して氏は絶對に關する自己の見解を顯はすときに當りて謂て云ふ、之を物質的勢力なりと思惟するは是れ充分にあらず、吾人は之を心靈的勢力なりと認めざるべからず、又云ふ、神人同形的要素は缺くべからざる者なり、又曰く、神人同形思想を神に關する觀念中より全く驅除し出すは、之れ此觀念其物を廢滅するなり、又云ふ、宇宙には結局主義を容るゝの地あることを承認せざるべからず、又曰く、有機的進化の傾向しつゝある所の榮光ある終點は、至高至完なる心靈的生命の産出することなり、又曰く、吾人若

し其使用する言語なるものが表號的のものたることを心意に注むるときは、吾人は能く神は靈なりと云ふことを得るなりと、

スペンセル氏は特に強く絶對は不可知的なり、其性質如何に關するの疑問をば到底答解すべからざることと斷言したり、ハリソン氏の所謂「常恒に存在して、永遠解くべからざるべき謎語」とは是れなり、然るにス氏は上に云へる所とは全く矛盾して、常に不可知的なる絶對を以て、遍在力にして宇宙一切の現象中に自己を表現する所の者となしたり、近頃氏がハリソン氏の批評に答辨する爲に著せし論文中には、重ねて最も明白に氏の持論を告白したりき、氏は此に其「ハミルトン」及「マンセル」に反對して自ら唱道したりし數節を其既出の著書中より援引して曰く、絶對に關する吾人の意識は、消極的に非らずして積極的なり、而して一切の時、一切の境遇に永存して、意識の停止するときに至る迄停止する事能はざる意識の一不可壞的要素なりと、氏は又其「コント」の實驗説の取るに足らざる事を論述せし數節を引用して曰く、最も強く此く智力的自殺を行ふ事を辭したりと、又曰く、余は常に彼輩の如く、現象に超絶する所の者を以て、皆無なりと思考せざるのみならず、却て之を、全

有と思惟するなり」と、又氏は不可知者は、萬物の因て生ずる無限、永遠の勢力なり」と云へる定義を辯護して曰く、余は原と、萬物の因て造られ、因て保たるゝ所の無限、永遠の勢力なり」と書し置きしかども、訂正紙を校閲するとき、誤解を避けんが爲に、文首の句を上如く變改したり、然れども、是等の語と雖ども、亦た余が意見以外の意味を有せしものにはあざりしなり」と、スベンセル氏亦曰く、原始時代の人民よりして今日に至る迄間斷なく思考し來りし終局の成果は、物質的として區別される宇宙間に表現する勢力と、吾人の内に意識の形狀にて湧出する所の勢力と同一の者なりとのことなり……吾人は内界勢力の狀形を以て外界勢力を思考せざるを得ざる必然の勢に支配せらるゝが故に、吾人は自ら宇宙を以て、物質的容態を有するものと思惟するよりも、寧ろ靈的容態を具ふるものと思惟せざるを得ず」と。

スベンセル氏は明言して曰く、余は絕對者に關する積極的知識を有す、曰く、余は絕對者を實在者と知る、曰く、絕對者が萬有と意識の形骸との兩者の中に在て、宇宙に永存、永現する勢力たるを知ると、此の如く論し來るときは、則ち氏は尙ほ正式の論

理に循ふて一層其推論を進むるを得ん、而して正當の論式にて斯くなし行くときは、則ち氏は必ず不可識論者たるよりは寧ろ有神論者となるならん、夫れ作用と結果との中に顯はるゝ原因若くは勢力なるものは不可知なるものにあらず、吾人假令之れが性質に對して知らざるところ間々ありと雖も、吾人は尠くとも其作用と結果との中に顯はるゝ所のことをば知らざるべからず、若し夫れ絕對にして果して宇宙に其勢力を顯はす所の永存實在者ならば、則ち其生出せし結果に適應するの原因ならざる可からず、隨て斷ゆる間なく其性質を顯はしつゝ、あざざるべからず、さればスベンセル氏にして一層精密なる論法を以て進みたりしならんには、氏は不可識説に止まることなくして有神論者と聲を齊ふし、以て、諸の天は神の榮光を顯はし蒼穹は其御手の工を示すと敬虔なる驚嘆を發すべきなり、

有神論者は人の絕對者に關する知識の常に不充分なることを信ず、然れども彼は萬有の本性及び進路と、人類の本性及び歴史とを攻究するとき、則ち絕對者の絕對靈及び智慧と愛の神として顯現し居るを發見するなり、此方法に據るときは、彼の意識と反省とによりて絕對を認識、概念し、之に關係、差異及び複合を歸し得べしと

云へるクーザンの持論中にすら、多少の眞理を發見することを得可し、再言せば、絶對は關係によりて思想の中に認知され得べく、差異によりて宇宙より區別せられ、且つ複合によりて宇宙と相合一して知られ得べく、而して宇宙を動力的、合理的、及道義的系統に組織し得べし、

右に論したる所のものより生出すべき結論は明白なり、即ち絶對者は不可知的なるものにあらず、されは人間は絶對者の存在するを知り、又眞實に其性質を知り、而して此知識は永遠に進歩すれども、亦た永遠に不完全ならざるべからざる者なりと云ふとの外、又他に不可識説に對する合理的論據あらざるなり、然るに此事をば有神説は常に承認して、基督教の聖經の如きは最も嚴肅に之を言明したり、絶對靈にして智慧と愛の圓滿する神と知る可き者なり、然れども常に人に超絶せるものなり、雲と暗とは其周環に在り、義と公平とは其寶座の基なり、愛憐と眞實とは聖顔の前に顯はれ行く愛憐と眞實と共に逢ひ、義と平和と迭に接吻せり(詩九十七〇二、全八十九〇二、五〇八、十)

第三、凡神説——凡神説も亦諸種の無神説と同く、神の存在に就ての積極的證據

を擧ぐるときは、則ち直ちに破壊すべし、然れども此證據は吾人後章に至て考究する所あるべし、廣漠たる凡神説の全軀を此短章に充分講明せんとは、決して出來可きの事に非らず、且つ吾人は之を爲さんとも欲せざるなり、

(一) 凡神説は絶對は唯一の實體にして、決して移動的原因となりて結果を創起する者にあらず、却て自體中に在て流轉し、且つ流轉せらるゝ者にて、意識若くは有心性を有せずと論するの説なり、

凡神説に在ては、絶對と云ふ意味を有せる種々の名稱を、其所謂本體を言明する爲めに代用したりしが、之が爲め凡神説には諸種異様の形態あり、然れども凡神説の何の派に於ても、其肝要の原理と論證に於ては皆な同一ならざるなし、

スピノザの確認する所に據れば、唯一の實體サブスタンスなる者ありて宇宙の根基を爲す、是ぞ即ち唯一の本體にして、有ゆる現象に通じて同一なるものなり、而して思想と延長と之れが屬性にして、一切有限實在者は即ち此獨一本體が存在し、且つ表現する方法たるのみ、之を宇宙の實在を組織する所の者とす、

凡神説に在ては、移動的原因の存在するとを許さざるなり、而して彼論者が主張す

る所の一實在は、到底自己の外に何の結果をも生出せしむる能はず、されば何物も創作せられたることなく、又生起せられたることなし、宇宙の作用は只是れ此絶對的本體が、其諸種の存在法に永遠展開するに過ぎずして、自己の他に何の勢力をも顯はさず、又何の結果をも生出せず、即ち是れ永遠絶對の展開若くは推移なり、然れども其本體の成遂する所は恒に自己の内に限りて、此より彼に移動する者には非らざるなり、

故にスピノザは論して曰く、展開し、又展開せられ、而して其同一性を失はざる宇宙は即ち神なりと、スピノザの言ふ所に據れば、宇宙と神とは分離すべからざるものなり、恰も資性が其所屬の實體を離るゝときは、則ち其資性たる所以を喪失する如く、宇宙も亦其本體たる絶對者より離るゝときは、則ち無に歸すべし、宇宙間の萬物に就て云ふも亦然り、スピノザ曰く、箇々の物は、神の屬性の運用若くは神の屬性が或一定せる有様にて顯はるゝ方法たるに外ならずと、蓋し有限なる物は眞の實在にあらずして、只だ是れ絶對が展開し、及び暫く實在となりて表現する方法たるのみ、されば若し絶對にして他の方法に展開し行かんか、則ち有限の人若くは物は

忽ち其存在を止めんこと、宛も物影の其主たる物體の消滅と共に消滅し去るが如くならん、之に反して若し絶對にして宇宙に於ける其表現より離去せんか、則ち資性を離したる實體の如く、全く不定なるものとなりて、純無と成り了せん、故に神は只た宇宙内に、若くは宇宙を通して存在し得べきのみ、

是を以て見れば、凡神論者が各物即神なりと説く者なりと稱せらるゝ、あるを聞て、自己を認ゆるものと爲すは至當の事なり、夫れ凡神論に於ては、各物各事及び現象的宇宙其物にても、展開しつゝある所の唯一の本體より離るゝときは、則ち是れ神にあらざるなり、何物にもあらざるなり、此二者を合せる者にして初めて神たるなり、唯一の實在たるなり、されば印度の婆羅門教は論じて云へりき、恒河は以て船を浮ぶべしと雖も、盤中にある恒河の水は以て船を行るべからずと、

此世界的運用、此唯一本體の種々の方法に展開することは、是れ素より有心性なく、知識なくして行はるゝ所なり、スピノザは此獨一の本體に思想と延長なる二種の屬性あることを説けり、然れども氏は意を注ぎ、力を盡して、神の思想則ち智能の人間の智能と同一ならざるは、天上の星宿なる狼星の地上に吼吠する狼と同一なら

ざる有様よりも、尙ほ一層甚しきものありて、事實を明白にせんことを勉めたり、されば此展開全軀中には自覺の智能も、意志もあらず、固より此の運用に對して絕對に歸するに智能を以てするを得べきは、猶ほ環若くは蒸氣機關に智能を歸するを得るが如し、則ち此物は以て智能を證明すべしと雖ども、然れども其物自體は決して智能ある者にあらざるなり、世界的運用中に於て、絕對は人類に至て初めて自覺的智能を得るなり、さればシェーリンク曰く、萬有は植物に在ては睡眠し、禽獸に在ては夢想し、人類に在ては醒覺すと、此に由りて之を觀るときは、則ち凡神說に在て唱道する所の絕對は、人間の思想に對しては全く不定的に、且つ空無なる本體にして、永遠自己の内に旋轉し、宇宙となりて展開し、意識なく、意匠なく、目的なく、自由なく、原因なく、又移動力なし、

(三)元來凡神說は道理に合する根據の上に安置せられたるものにあらずして、之を辯護する證論の如きも亦た確實ならざるものなり、先づ凡神說の頼て以て根據となせる知識說は全く虚偽なるものなり、凡神說の自定する所によれば、大凡そ知識の始初は普通に關するの知識にして、特別に關する

の知識にあらざるものたるなり、而して凡神說によれば、絕對者は唯一の實在なりと論ずるが故に、勢ひ有限なる人間と物類との實在するをば拒否するに至る、今人類の知識の始は、意識に表現し、同一なる心意作用に由りて知らるゝ所の自己及外物の知識にして、其元初に在て既に實在者に對する知識なりとは動かす可からざる事實なり、然るに凡神說は之と矛盾する者なり、此點に於て凡神說は又有ゆる人間の意識と矛盾す、夫れ具體的、限定的、個存的なる實在者は、有ゆる思想の究竟原一にして、有らゆる知識中に存在し、思想一切の法則、理性一切の觀念中に含蓄せられ、以て一切實體に於ける缺く可からざる要素となるなり、抑も此實在たる、人が自己を知るによりて直接に知られ、而して原子、分子、若くは其他何れの名稱を以てするも、物體の究竟原一に關する知識に缺く可からざるものなりとす、

右の如き理由なるが故に、凡神說は理學に反するものなり、何となれば理學は彼の特別なる者を觀察して、其實際的關係と統一とを知るを以て始となし、進て動力的若くは合理的關係をなして相統一せる實在の具體系として普通一般なる者に至るものなればなり、之に反して凡神說は普通一般なる者に就て研究を始め、絕對

唯一なる者の中に萬物の統一を認め、有限實在を以て唯た此絕對者の存在する方法たるに過ぎずとなし、其宇宙の統一を發見する方法の如きは、只だ絕對と有限を一樣にし、一切と獨一とを一樣にするの粗拙なる一法あるのみ、されば人が道義系の中に在る靈性的實在たるを認め、若くは物質系中に原ね或は物質の究竟原一あるを許し、若くは動力的及び合理的關係を成して相統一せる系統中に許多の存在者あるを發見する凡ての學術は、是れ皆諸種の凡神説の根葉を切斷し去るものたらざらばあらず、

凡神説より生出すべき必然の論理的推論は、則ち眞實の知識は人間の到底得る能はざる所の者なりと云ふに至るべし、夫れ實在に關する知識は、其始め外部の實體を知覺するに有りて、自己に關する知識を得るに生ず、然り、知識の始めや既に此の如くなるが故に、其運用、進歩に於ても亦た常に實在に關する知識に非ざるはなし、然れども若し凡神説の言ふ所の如く、知識の初發なる自己及び外物に關する知識、果して非實にして幻想なりとせば、則ち知識なるものは其運用、進歩に於て常に非實、幻想なる可くして、之が必然の結果は、普般懷疑説に陥るの外あらざるなり、

右に述ふる所に由て觀るときは、凡神説が以て根據となせる所の人間知識論は全く虛妄なる者にして、形而下學と、該學の根據たる自然實體説とに直接に反對し、又人間知識の眞實なることを説明、制可し、且つ一切の完全なる哲學の基礎となれる合理的實體説にも反對するものなり、極端と極端とは端なくも常に相遭逢す、即ち一見するときには實驗説及び現象説とは最も遠く離隔せるが如く見ゆる凡神の説も、其固有の誤謬の爲めに論理必然の法に由て順環し、遂に是等實驗説及び現象説と同一なる者となるに至れり、

凡神説に就て第二の非難すべき點は、其絕對の性質に關して純然たる先天的觀念を持し、而して其論ずる所は、只た觀念中に含有せる所のものを分解するのみ、即ち其中に含めるものより推論し出すのみなるに在り、夫れ絕對者が宇宙の究竟基礎として存在し、以て宇宙に顯現すると云ふ事は、是れ自明、究竟の思想法たるなり、而して絕對の何者たるやに至ては、只宇宙に自啓せる有様を研究し、而して後知らる可き也、然るに凡神論者は絕對の性質に就て先天的に一觀念を形成したり、而して其千言萬語を費して證明論辨する所も、亦た只た彼論者が初め此觀念中に包含せ

しめたりし所の意義を取り出し來るに過ぎず、抑も凡神説は其種類形状の異なるに隨て、其絕對に關する觀念も亦た異なり、然れども何れの派と雖ども、吾人が上に述べたる第二の批難を受くべからざる者はあらず、

例せば、スピノザは自定して思へらく、絕對者は是れ唯一本體なりと、氏の言に曰く、「余の所謂本體なるものは、自存して、獨立に概念せらるゝもの、即ち之を思念する爲に、之に先行せる他物の思念を要せざる者なり」と、此定義に據て考ふるときは、氏は本體を以て絕對者となす者なり、而して氏が論證する所を見るに、應説論辨の過に陥れり、即ち氏は先づ本體を解説して絕對者なりとし、是より一步を進めて、絕對者は即ち唯一本體なりと論したり、

凡神説の言ふ所によれば、絕對は獨一實在者にして、此外に又實在なる者あると能はずと云ふ、然れども此論は人間一切の意識と全く反對せる者にして、又人間の理性の決して是認せざる所なり、抑も一實在者の存立は他實在者の存立と相撞着するものにあらず、然るに凡神論者は何の理由に基きて、一實在者現存する以上は、又他の實在者現存する能はずと論定するか、蓋し凡神論者は其一實在に關する定義

中に自存と云ふとを隠括して、以て其定義に推論の形状を與へ、而して唯一の實在者のみ存在するを得れども、其他に實在者の存在するあると能はずと論定し、尙ほ一層議論の歩武を進めて云ふ、實在者は唯一たる可し、何となれば若し二箇の共存の實在者ありとせば、則ち彼等は互に活動する能はずして、各自其別個の實在中に割據し、以て他の者の上に作用を及ぼす能はず、又何等の方法にても迭に交通する能はざればなりと、論じて此に至るときは、則ち又凡神説は人間の通常意識及び一切の學術と矛盾するものなりと謂はざるべからず、何となれば此兩者は皆共に共存、交渉せる實在者に關する知識を肯定すればなり、夫れ凡神論者が此の如き矛盾の境に沈淪したる所以のものは、只だ其始め實在の定義に於て、一步を誤るとありたるが爲めなりとす、

元來スピノザは大凡そ事物は其間に共通す可き者を有せざるときは、則ち一の事物他の事物の上に原因的勢力を及ぼす能はずと云へる格言よりして其議論を續出し來りたりしなり、されば氏は此格言より推論して曰く、絕對即ち無限者と有限者との間には二者に共通すべき者一もあらざるが故に、自他迭に其作用を及ぼす能

はざるなりと、抑此格言たる、若し其の適用にして果して當を得ば、則ち真理にして頗る緊要なる者に相違なし、然れども原因に在て起動力たる者は、結果に在ても亦た起動力ならざるべからず、起動力は決して思想に變形せらるゝこと能はざるべし、而して又た思想は物を扛げ、又權衡を以て計量さるゝこと能はず、且つ合理的交通をなすに就て合理的本性の類同あの必要なるは言ふ迄もなし、然るに此かる場合なるものは、其不同の點積極的勢力と資性との上に在りて、數量の不同に非らざるときに限ることなり、若し夫れ無限者と有限者の間に於ける不同點に至ては、寧ろ數量の不平等に在て、積極的資性又は勢力の不同にあらざるなり、何となれば人は神に屬する者にして、空間と時間の制限を受くるが爲に、神に劣り、又智能と能力との數量若くは程度に於ても亦た神に劣るものなりと雖も、合理的にして自由なる道義的實在者として、其積極的能力と資性とに於て神と同類なればなり、然るに神と人との間には全く關係なし、類同の點あらずと云ふの推論は、只た絕對者に関する先天的にして虚偽なる觀念より來るものたらざんばならず、

凡神説に關する第三の批難は、凡神論者が其絕對に關する先天的觀念より推釋せ

る所の議論は、大概實在の代はりに論理的概念を用ゐ、宇宙の動力的勢力と整頓せる運用との代はりに、思想に存する論理的運用を用ゆるが爲めに、毀壞せらるゝに至ること是なり、夫れ凡神論者は右の如く論ずるが故に、推理自然の勢として、遂に凡て定義と限定とは限局するものなりとの確言を生せざるを得ず、蓋し此格言は數學的總數及び論理的概念に適用するときは、則ち素より不可なきとは吾人の既に觀得せし所なれども、然れども實在者に就て言ふときは、則ち其當を得ざるなり、何となれば實在にして益々増加せる能力と益々錯綜せる本性との爲めに益々限定せられればせらるゝ程、其實在者は彌よ高等の實在者たる地位を占む可ければなり、されば限定することは決して實在者を限局する者に非ずして、却て之をして益々大ならしむるものなりとす、

時として絕對に關する凡神論的觀念は萬物の數理的總計の觀念たるとあり、然れども絕對を以て最大なる論理的普通總念と爲し、隨て之を不限定なる者と爲すの凡神説に至りては、其數更に多し、

其例を舉ぐれば、ハルトマンの思想の如きは現に此謬妄に陥られる者なり、氏の言

に曰、神の各箇物と同一ならざるは、恰も是れ各箇の羊が羊群と同からざるが如し、然れども宇宙全躰は即ち是れ神なり、而して各箇の羊なきときは則ち共に羊群あらざるが如く、世界なきときは則ち神なきなり、要言すれば、羊群に關する觀念が各箇の羊に對して有すると同様の關係を、神は世界に對して有するなりと、其他の或論者は神の世界に對する關係を述べて曰く、樹木と云へる普通總念は、總念其者に就て言ふときは何の意味もなく、唯た各箇の樹木あるが爲に初めて實躰の意味を得るが如く、神は世界ありて初めて實在なる者となり、世界存して後初めて存するなりと、此論の言ふ所に據れば、則ち神の世界に對するは、只是れ論理的普通總念の其中に含有せる各箇物に對するが如きのみと云ふに在り、扱凡神論者は其議論を證せんとして、人の心意は必ず萬物の統一を求むと云へる事實に訴へ、而して彼等は此事實を例證する爲に、人は同一の名稱の下に普通總念を形づくり、以て其中に各個物を包括する論理的概括を爲すの傾向を有すとの事實を以てせり、彼等論して曰、人間は一切の思想に對し、最も普遍的なる念觀にして一切の事物を含有せる最高の統一を發見するに非らざれば、決して心に満足する能はざる者なりと、彼等

又右の如く普通觀念を成して統一に歴階し至れる思想を以て尖塔に比し、一切の各箇物を統一含有せる共通觀念を以て其絶頂に譬へたり、而して此究竟的普通總念によりて統一を爲せる一切とは、獨一なる一切即ち絕對者なり、ヘーゲルの所謂普通者も亦た之と類を全ふするものなり、然れども此の如きは是れ理性の究竟的問題を解説して満足の地に達し、以て思想の休憩所を得たる者にあらずして、却て思想が一層進みて深遠なる概括をなす能はざるが爲めに、忽然停止したるものなりとす、されば宇宙の實躰と統一に關する理性上必要の問題は依然として解説せらるゝとなく、思想は満足するよりも寧ろ頓挫の姿となり、事物の結局的解説を發見する能はずして、何の得る所もなきに、絶へず擾々たるに過ぎず、之に反して一旦宇宙を觀察するの方向を變し、之を以て神即ち絕對理性に屬從し、次第に進んで眞理法理想及び神の完全なる智慧と愛の目的を現實する一個の具躰的系統と見做し、此系統の中に宇宙の統一を發見するものとするときは、則ち理性必至の問題は茲に釋然として氷解せられずんばあらず、固より人の思想は絕對理性の上に出て、之を理會する能はず、然れども絕對理性の光明に照らすときは、則ち人間の理

性は容易に其究竟緊要なる問題を解釋して、以て神及び神と關係せる宇宙に關する知識を絶へず増加するを得べし、蓋し神は秘奥中の最大秘奥なりと雖とも、然れども是れ實に一切の秘奥を解説すべきものなり、神の四邊に凝集せる暗黒と雲霧は、皆な宇宙の表面より飛び來れり、之が爲めに宇宙は忽ち青天白日の快域となり、若し人の思想中に神の痕跡を喪ふに至るときは、則ち折角神の四邊に凝集したりし秘奥の雲霧は、悉く散して萬物の上を覆ひ、宇宙は再び混沌の境に沈み、黑暗は淵の表面を覆ふに至るべし、

右の如き次第なるが故に、凡神論の推理たる、只だ其既に形成せる普通總念中に含蓄せるものを分拆、配布するに過ぎずされば、彼の時一切哲學的推理法に適用せらるゝ嘲笑の語は、恰も此推理法に適用するを得べきものなりとす、曰く、是れ只た其の最初投入したものを取出し來るに過ぎずと、且つや此推理法は時に、普通が特別を創生し、類が種を出し、種が各箇を生すとの意を含蓄するあるが故に、世の學者にして凡神説を不可とせる者、或は言を爲して曰く、普通は特別の原因たる能はず、何となれば種なる者の特性は類なる者の中に含まれざればなりと、然れども余

の考ふる所を以てすれば、是等の學者は、凡神説に於ける眞の誤點は、神の代はり理論的普通總念を用ゆるに在て存するをば全く覺知せざるものゝ如し、

(三) 凡神説には矛盾多し、先づ其絕對の性質に關して自定せる觀念中には、往々にして矛盾存するなり、即ち彼れ凡神論者は絕對者を以て思考者なきの思想とし、意識若くは有心性なきの本我、理性若くは靈となし、無と同一なる者となし、活動する實在なきの純粹作用となす、是れ大なる矛盾にあらずや、

其格言に於ても亦た矛盾存す、何となれば絕對は屬性の主格となると能はず、若し之に附するに資性若くは勢力を以てするときは、則ち之を制限するの道理なればなり、而して又事物の原因となると能はず、何となれば若し之を以て原因と爲すときは、則ち之を結果と區別せざる可からざればなり、又有限の實在を創造して以て物界及び靈界なる眞實在の有限宇宙に自己を啓示する能はず、何となれば斯くなるときは、則ち自躰以外なる實在の爲に制限せらるべければなり、然れども凡神論者は、斯くも熱心に絕對を辨護するが爲に、却て之を制限するものなりとす、何となれば絕對を其自躰中に閉鎖して、自躰外には何の結果をも生ずる能はざらしむれ

ばなり、若し夫れ絕對にして少しにても自体外に結果を生じ、一粒の砂石若くは一合理的有心者に實在を與へんか、則ち忽ち其絕對性を破毀して以て自滅を招くべければなり、

凡神説に於ける尙一個の矛盾は、一の實在にして同時に絕對的となり、有限的となり、無碍的となり、有碍的となるを定言するに在りて存す、夫れ此の如き事は吾人の到底思考する能はざる所のものなり、情ら之が實際の結果を考ふるに、凡神論者は此兩者を以て實際一なりと論すれども、彼は此の二者の何れが果して一なるかを決定せざるべからざる譯なり、或は絕對を以て凡有たる獨一者なりと考ふることを得べく、又は宇宙を以て獨一者たる凡有なりとなすことを得べし、果して後者を採るとせんか、彼のハイメニデス及びエリヤチツク派の所謂獨一者、即ち一切變化の中に在て一定不變なる者は、端なくもヘラクリタスの所謂不休の流轉と成畢すべきなり、即ち永遠なる一物存立すと云へる説は萬物皆流轉すと云へる説と化或す可きなり、或る凡神論者の如きは絕對轉化説を抱持するにさへ至れり、然れども、絕對轉化説とは是れヘラクタリスの不休流轉説と同様なるものにして、此説に

於ては何物も永存せず、故に何物も存立せざるなり、抑も絕對轉化説によりて絕對を考ふるときは、絕對其物は永遠なる實在にあらずして、只た永遠に亘りて轉變的に且つ現象的なる者なりとなさざるべからず、是れ到底思考す可からざるの妄論なり、

又一の矛盾の生ずる所あり、即ち凡神論に隨て絕對が展開して宇宙となる運用を思考せんとするとき、若し絕對にして果して完全ならば、則ち其宇宙に展開するは是れ完全なる者が不完全なる者に展開するなり、スピノザの凡神説に従ふて、絕對を以て唯一の本體となすときは、則ち本體として此絕對は全く不限定的なるものなり、然るに此絕對にして展開して有限なる者となるときは、則ち限定的なる者となるべく、隨て不完全なる者とならざるべからず、彼の時に或は稱して、絕對の墮落と云ふは即ち是れなり、之に反して若し限定性にして完全性たり、而して遂に自覺的智能及び自由に到達する所の展開にして、一層高妙に一層善良なるの境域に漸次に達するとなりとなさば、則ち此原始本體は不完全なりしものにして、次第に發達して完全の境に至らんとするものなりと謂はざるべからず、此の如き説

は獨逸に流行せる凡神論の説く所なり、蓋し此論に言ふ所の神は、展開の當初にあらざりて却て其末に在るなり、絕對は人類に至るに及て初めて意識ある者となり、人類は即ち宇宙に在て至高の實在者たるなり、是に於てか、凡神説を説述するの哲學者は意識、智能を具ふる者なれども、絕對者は決して然らず、此に由て之を云ふときは、有限なるものは、絕對よりも一層高等の地に位して、一層完全の境に接近するものと謂はざるを得ず、

スピノザ曰く、屬性なきの絕對は全く無限定なるべしと、是に於てか、氏は絕對に附するに延長及び思想の二屬性を以てしたり、然れども是れ只だ新に矛盾を顯はすに過ぎず、氏は定言して曰く、延長は神の屬性なり、然れども神は有智的實在に非ず、合理的自由靈に非らずと、且つ延長なる者は物體を離れては、素より少しも意義なきものたるにも拘はらず、氏は物體を以て延長の方法と爲せり、且つ氏の云ふ所によれば、思想は神の屬性なれども、此に所謂神の思想は、吾人が思想として知れる所の者とは毫も肖る所あらず、故に是れ只だ虛無たるに過ぎざるのみ、斯く考へ來るときは、則ち神の二屬性は、空間中に神を制限し去る所の延長と虛無とに過ぎず

して、吾人が神に關して知ることを得るは、只た其空間に延長するの一事なるに至る、

右に論ずる所を以て見るに、凡神説は其歸着する所に至れば、則ち純然たる不可識論となる可く、吾人一たび此煙波漂渺の邊に向て纜を解くときは、

「暗濤朦朧として萬里際涯なく、長、廣、高及時間、空間も滅没し去るところの大海」

“A dark Illimitable ocean, without bound, Without dimension, where length, breadth and height, And time and place are lost.”

の波の上を、浮きつ沈みつ漂流せざるを得ざるに至るべし、

(四)抑も一箇の宇宙論として見るときは、凡神説は宇宙を解説し、若くは宇宙攷究の途上に横はれる理性必要の幾多の問題を充分に解釋するを得ざる者なりとす、凡神説は絕對に就て先天的觀念を自定するのみならず、此く自定せる觀念は、是れ虚偽の概念なり、即ち其所謂絕對とは、原因力と合理的有心性との兩者を無視せる本體のみなるか、然らざれば、實體なく、原因力なく、合理的有心性なく、思想より出づる無意識の抽象たる觀念のみなりとす、

世には宇宙創造の事を思念するに就て起る可き哲理的困難を逃れんとして、凡神説の援助を求むるものあり、然れども真正の哲學は、有限の心意が到底神が物を創造する方法を曉會する能はざる事を許認す、抑も物を創造するの業は、是れ獨り神の特權に屬するものにして、有限の實在者は決して經驗上之を知ること能はず、有神論に於ては人智に此限域あるを認め、且つ宇宙の存在するを得るは、宇宙に超越して而かも亦た常に宇宙の内に自己を啓示する所の絶對者に常に倚賴するに よることを許すなり、有神論は又許容すらく、宇宙創造の方法は有限の心意を以て窺知する能はずと雖ども、絶對の宇宙に超越し、又其中に遍滿する事は充分理性の 確認し得べき事實たるなりと、

凡神説は上に述べし如き困難なる諸問題を解釋することをせず、只た擅に創世の 事實と、移動的原因の眞實とを拒否し、而して絶對と宇宙とは同一物なりと論斷し て、以て絶對の宇宙に超越し、又其中に遍滿するとも拒否す、蓋し凡神説は宇宙問 題を解説せず、只た擅に絶對宇宙同一なりとのことを定言して、以て之を度外に附 す、然して縦し此く爲すにもせよ、其困難問題は之か爲に毫末の解釋を得ずして却

て之に加ふるに新困難と新矛盾とを生出し來るは、吾人の既に知得せし所なり、 今若し凡神説を以て現存する宇宙に關するの理論なりと見做すときは、吾人は之 を以て全く不十全なる者と爲さざるを得ず、蓋し本體なる單純の觀念のみにては、 到底心意をして奮て大初に溯り、事物の原始に關する問題を研究するに至らしむ るの功力なし、今夫れルクレチウスの思惟せし如く、夫の固く純一の性を有する一 の原子其物に就て考ふるときは、如何に千思萬考するとも、之に原始若くは變化あ るべしとの思想を起すとなく、又其原因を要求するとなし、又之に就ての觀念の中 には、其永遠に存在すると能はざりしとの道理をも示すものなし、故に凡神論者は其 所謂獨一無二の本體を確く把持し、之を以て宇宙の問題を解釋して、而して宇宙の 起元と原因とに關する諸問題を永へに制止したりと考ふ、然れども凡神論者に して若し眼を己の抽象論の範圍外に放ちて、實際の宇宙を窺ふときは、則ち直に宇 宙は人をして其原始を尋ね、原因を求むるの念慮を起さしむるとなきが如き單純 の本體に非ざるとの、頑然不動の事實を看出すべし、宇宙内に存在する總ての實在は 激烈なる活動をなしつゝありて、之を觀察するときは則ち物として一も吾人の心意

を喚醒して、其原因と理由とを追求せしめざるものならず、今や原子其物は決して固く純一の性を有するものにわらずして、激烈に活動するもの、恐くは復雜なる系統なるべしと思考せらる、されば凡神説は實際存在せる宇宙を解釋する能はず、若し凡神論者に向て宇宙の存在を如何様に解説するやと問はし、則ち凡神説は只々前言を重複して云はん、曰く、宇宙は存在するなりと、又若し宇宙は其雄大なる原因力、秩序、理法を有し、其復雜せる系統、學術的本性、合理性、智惠、愛及び宗教を有して、以て其現に存在する如くに存在するは何故ぞやと問はし、則ち凡神説は不分明なる答辨をなして曰く、宇宙は唯一の本體なりと、若し又此不休の活動をば如何様に説明すべきやと問はし、則ち凡神論は答て曰はん、是れ獨一本體の絶對、無碍なる轉化なりと、凡神説は宇宙の智能的指導を解釋する能はず、宇宙に貫通せる秩序と理法を解説する能はず、又は動力的若くは合理的關係を有せる無數の實在者を統一し、以て之れを穩括するを得べき學術的系統を爲して宇宙が存在するを解説する能はず、又人が其智力の中に宇宙の實體の反映を有して、以て之を理會するを得るの何故なるやを説明する能はず、又上の如く、理會されたるべきとき、之を以て學術を

組成するを得るの何故なるかを説明する能はず、又萬人均しく、宇宙の全部は皆領會せらるべきものにして、理性の形骸を以て之を思考し、合理的及び學術的思想を以て之を説述するを得ると自定するは何故なるか、是亦た説明する能はざるなり、されば凡神論は其思辨の密室を出で、實際の宇宙に來るときは、則ち全く無用なるものと化すべきのみ、

夫れ宇宙は合理的にして學術的に之を知るとを得べき系統なりとの事實と相和合し、且つ何が故に宇宙は斯の如き者ならざる可からざるやを充分に説明する唯一の宇宙説は、唯だ有神論あるのみなり、ジョン・フラスク氏の言は實に眞なり、其語に曰く、人間の理性は必ず事物の本性中に道理の存すべきことを信ず、……如何程巧妙なる議論を爲すと雖ども、無限なる宇宙の支持者が、永遠に人智を紛亂の境に置くべきことを信ぜしむると能はざるべし、……吾人が所謂五官の證據なる者を信認するは誠に強し、然れども彼の秩序整然たる事物の終始、因縁の中には、唯た一層廣大なる心意の能く測知するを得べき意義ありとの信仰は、更に之よりも強しと、然るに宇宙を説明し、之を以て合理的にして學術的に識得すべき系統なり

となすとは、一切の凡神説の決して爲す能はざる所なり、抑も絶對的獨一者は許多の物と共存するとを得べきや否やと云へる疑問は、夙に希臘哲學中に顯はれたりしが、エレアチック派は絶對的獨一なる者の存在することを確信して、其許多の他の存在と共存する能はざることを主張せり、プラトンは、パルメニデス中に此問題を考究して、絶對的獨一者と有限なる許多の物とは兩ながら實在なるとを説て、以て、エレヤチック派の教系中に如何なる真理あるやを指示せんと務めたり、氏は説を爲して曰く、現象世界の背後に觀念世界ありと、プラトンの見解に依れば、是等の觀念こそ一切有限實在者の眞實性と合知性とを合むなりとす、後世プラトニ派の人々は謂へらく、是れ等の觀念は神の儀型的思想なりと、プルタークの言に曰く、觀念なる者は無形物にして、自己獨立に存在すること能はず、然れども能く定形なき物체에形態を與へて、以て之が顯現の原因となるなり、ソクラテス及びプラトニは是等の觀念を以て、物質より分離せる本質にして、神の理性と想像力、即ち心意若くは理性によりて其存在を得るものと爲すと、アレキサンドリアの新プラトニ派は此説を一層充分に擴張したり、後年基督教の爭論一度起るに及て、

當時の熱心なる哲學的考究中に在りて、基督教神學の哲理的基本を得んが爲め、且つ非基督教哲學の攻撃を防がんが爲めに、基督教中の思想家は此プラトニ派哲學を採りて其論の一本據と爲すに至りき、プラトニ云へるあり、曰く、宇宙は是れ眞實なる全の有限的肖像なりと、此言に據りて之を推考せば、則ち宇宙の展開は次第に此全に造るものならざる可からず、又永遠理性に於ける完全儀型の次第に表明、啓示せらるゝ者ならざる可からず、蓋し此宇宙説に在ては、眞正の實體説と眞正の唯心説と相合せる者なり、彼の純然實體的にして、宇宙の合理性を自定して以て基礎とせる、今代の學術の哲理的基礎は實に此點に在て存するなり、而て此合理的實體主義を基礎と爲すが故に、學術は能く有神説と相調和す、蓋し有神説は單に宇宙の實體と合理性を確認するのみならずして、宇宙は何故に斯くの如くなるやと云へる道理をも明白にすればなり、凡神論者は有神論と近世の學術とが確認せる此合理的實體主義に反して、今尙ほ彼の獨一の實在存在し、而して有限の有心者及び物は是れ眞の實在に非らずして、只々絶對的獨一なる者の存在する方法に過ぎずて、ふ古昔の認説を主持し居れり、

夫れ「エレフチック」派の哲學は其初め明白なる實體説たりしが、漸次に變遷し去りて、彌よ益々抽象の境、空言の域に迫りて、遂に「ゼノ」に至りて其當然の結果に到達し、以て論理的抽象と異ならざる者となり、宇宙の運用と論理學の運用とを相混するに至れり、今日の凡神説の傾向も亦「ゼノ」と異なるとあらず、夫れ只た本體のみなるの絕對も、又只た本體と原因とのみなるの絕對も、以て宇宙を説明、解釋すること能はざるは明かなり、若し充分に宇宙を解釋せんと欲せば、則ち本體たり、原因たると同時に、又理性たるの絕對を以て爲さざるべからず、宇宙は只た三者一躰なる絕對者と相關係して後初めて解説するを得べく、又曉知するを得べし、所謂三者とは何そや、曰く本體、即ち單一、同様の有様にて永存せる實在なり、曰く原因、即ち勢力を稟有し、活動して以て物に結果を生せしむる實在たる第一原因なり、曰く理性、即ち合理的智能と自由とに由て活動するの實在是れなり、是を以て見れば、有神説に於て理論上に設定せるが、如く宇宙は各箇物の多數と限定的實在とが、其實在と能力とを保持せんか爲に、共に神に屬從して以て結合せる所の合理系にして、又其本性と展開とに於て、神の儀型的觀念と、絕對なる理性と、神の

智慧と愛の目的の進歩とを表明する所の合理系たらざるを得ず、
五、凡神説は自由意志、道義的責務及び宗教と兩立する能はず、
固よりスピノザ氏は自由てふ語をば使用したるに相違なし、氏之が定義を下して曰く、自體の必然性に由りてのみ存在し、獨り自ら決定して以て作用するを稱して自由と云ふ、若し夫れ他の爲に一定の有様にて存在及び活動する様に決定せらるゝとは、之を稱して必然的若くは寧ろ強迫的と云ふと、夫れ此の如く釋定せるの自由は、獨自存的實在の資性と爲し得べきのみ、而して之を以て絕對實在の資性とせず、畢竟是れ絕對實在が合理的自由撰舉に頼らずして、自己の必然性に從ふて作用するを定言するに過ぎず、彼の理性の光明に照らして勢力の運用と方向とを一定す可きの自由の如き、真正の意義に於ける意志の自由をば、氏は斷然拒否して、以て神人共に斯の如きの自由を有する者にあらずと云へり、氏は其自家の定義に言明せし意味を以て、獨り神のみ自由なるの原因なりと謂ふの傍ら、言を爲て曰く、意志は自由原因と稱するを得ず、又神は決して意志の自由に由て活動せず、又、心意中には無碍にして自由なる意志の如きものあるとなし、只た心意は他の原因の

爲めに決定せられたる原因の爲めに、此く々々なさんと欲する様に限定せられ、此の如くにして進て無限に至ると、蓋し是れ有限者は眞の實在を有せずして、只た絶對の方法たるのみと云へる凡神論的思想よりして生出すべき必然の結果たるなり、其説に従ふときは、人は有心者に非ず、其心意は只是れ「觀念の集合のみ」、意志と悟性とは、特別なる觀念と決意とに外ならず、故にスピノザ氏は心を用ゐて自由意志に關する普通の信仰の妄想に過ぎざる事を説明せんと力めたり、其言に曰く、人の自ら自由なりと信する所以のものは、其己の決意と志向の有様を自覺して、其自ら願望し、作爲せんと欲する所以の原因を知らざればなり」と、氏の説く所によれば、人の眞正に自由なるときは、只た二と二が四なりと云へるが如き自明眞確なる事物を定言するときのみならず、人心を組織せる觀念と決意の連鎖は、無覺、必然の展開をなす、絶對力の爲に決定せられて如何ともすべからざると、宛も遊星の回轉するが如く、河水の奔流するが如し、スピノザ氏曰く、余は、一定せる理法の支配を受けて活動する靈魂を以て、一種靈的自動子と思惟するなりと、夫れ斯の如く心意を以て意識の状態の連鎖なりとなすの思想は、即ち是れ實在の知識は絶對の

知識に始まると説くの凡神説にして、スペンセル、ミル、及びコントと同く、現象説と普般懷疑説とを含む所の説を唱道するものたるに外ならず、右に陳する所に據て考ふるときは、凡神説の神人二者に自由意志あるとを許さざるや明白なり、然りと雖ども若し果して宇宙に合理的自由撰擇あるとなしとせば、則ち理性の光明に照して勢力の運用と方向とを決するの能力なきに至る可く、隨て宇宙に道義的本分、律法及び品性の基礎なきに至りて、此かる文字は悉皆意味なき者と化すべし、夫のスピノザは倫理學に關する書を著はし、且つ自ら謹嚴に道義法を遵守したり、然れども是れ如何なる哲學者と雖ども決して看過する能はざる人の徳性を實際に認めたるまでのものなり、然るに怪むべし、氏か哲學に在ては、明晰なる倫理的觀念の基礎となる可きもの毫も之れあらざるなり、既に凡神説には道義的觀念の基礎となる可き者なし、安んぞ道義的作用を容るゝの餘地あらんや、基督教は箇人的有心性及び人權の神聖なるとを説きて、以て人類の眞價を顯はしたり、即ち人類を以て神に肖たる有心的靈となし、天父の兒子となし、神の律法の臣民となし、人の罪を犯すや、則ち以て神の救贖的愛の目的物となし、

悔改し、信賴して以て甘んじて神に還歸するときは、則ち神に受納せられ、共に交通して以て永遠の榮光に入るを得可しとなせり、然るに凡神説は總て之を棄捐したり、故に其説に従ふときは、則ち人類は最早や有心的靈に非らず、神子に非らず、只た宇宙の無意識なる本體が一時の實在となりて存在する所の暫時の方法たるに過ぎず、且つ此の本體は決して人を知るとあらず、何となれば本體は自體に就ての知識ども有せざれば也、是を以て凡神説に在りては、有心靈不滅の理を斥く、其舊時の比喩は今日に至るも尙ほ適當なる價値を表はす、曰く、人類は大海中の水徳利の如し、水は海水より分離して暫く徳利中に留るなれども、徳利の破壊せるときは即ち又た大海に還歸するなりと、スピノザは幾分か靈魂不滅説を信認せしとは間違なし、然れども凡神説に謂ふ所の靈魂は只是れ觀念の集合なるが故に、其不滅説も亦た只た此觀念が眞理として經綫存在するを云ふに過ぎずして、決して有心的靈の意識を有して存在するを云ふにはあらざるなり、

且つや凡神説は、社會の改良進歩するは全く人の行爲に由るとの事實を承認するに對して基礎を供せざるものなり、該説は克己、獻身の男女の祈禱と勞働とより生

すべき神の國なるものを知らず、謂へらく、世界は現世の有様より善美に赴く能はず、何となれば世界は絕對者の必然的開展なればなり、よし又世界は漸次善美の境域に展開しつゝあるとするも、人は絕對者の性質に由て必然的なる一定の進路を運轉する所の此展開を助長する能はずと、斯の如く論じ來れば、凡神論は又進化の事に關して、當今の不可知説と唯物説の思辨と相契合するものなるを見る、

凡神説は人類の宗教心を満足せしむる能はず、何となれば此説に在ては自由、靈智の神を無視し、人類を看護する天父を示さず、以て交通すべく、以て禮拜するに足るの神あるを信ぜざればなり、抑も宗教なる者は人をして一心不亂に萬有の不明、頑硬なる勢力を崇拜する野蠻の状態より、智愛圓滿の神に信賴するの意識に達せる文明の状態に至らしめんと目的に對して必要缺く可からざるものなり、然るに凡神論は此必要を感じずるの人をして失望に陥らしむるものなり、何となれば神を以て宇宙の不明、頑硬なる器械中に人類を放棄して顧みざる、宇宙の無覺的本體たるに過ぎずとなせばなり、

凡神説に於ては又神に對する罪惡を無視するなり、其説く所に從へば、世人が稱し

て罪惡と云ふ者は、只だ人の本性より發生する必然的の行爲に過ぎず、何となれば絶對的本體は人の内に展開して、人力の如何ともすべき者ならざればなり、スピノザ氏は此見解に基きて、一の神義説を設定して曰く、此必然的本體は展開して有ゆる實在とならざるべからず、故に誤謬、痛苦、悲哀の如きも、亦た徳性、真理、幸福等と同く存在の方法なれば、宇宙は是等一切の物を包含せざる可からず、事物の根原の元氣には善惡を産出するの力を有し、及び成せるだけの事を成すものなるが故に、宇宙には善惡の兩者あらざる可からずと、

凡神説に在ては、特更に道義法、義務及び品性、若くは宗教に對して基礎を供せざるが故に、人生の指針として、自然に従へてふ原則に依頼せざるを得ず、抑も此原則たる、其意味の少く變化する所あるも、即ち是れ古昔のストイック教の格言たりしものに外ならず、蓋しストイック教の原形は凡神説にてありしなり、そは兎まれ角まれ、右の如き格言は凡神説より生出する自然の結果たらざるを得ず、宇宙間なる一切の作用は、皆な一の絶對なる本體が其性質の儘に進化する必至的の展開にして、彼は一切の有限者は此必至的の展開、運行の顯現する方法に過ぎずとせば、各實在者は皆な

其性のまゝに活動せざるべからず、彼の或道義法に服従して以て罪惡を脱避せんと欲するが如きは、是れ迂愚の至りなり、何となれば何人も其本性外に超脱する能はざればなり、ゲーテ嘗て此意を述べ、カーライルは嘆賞して之を引用せり、曰く、

What wilt thou teach me the foremost thing?

Wilt teach me from off my own shadow to spring?

ねがわくは我にいとすぐれたるを教へよ、

とびて我が影よりはなるゝとをわれにおしへよ

ラルフ、ウォールド、エマールソンは其生涯中一たび凡神説風の情念を抱懷せしものゝ如く、往々右の如き道義論を唱へたり、曰く、自然は聖徒にあらざ、基督教徒の生活も、仙人の生涯も、將た「グンツ」者流、「グレナム」者流の習風も、自然は之に對して毫も寵顧の情を有するものにあらず、自然は生れて食ひ、飲み、且つ罪を犯せり、自然の寵兒たる大人、勇者、佳人は、吾人の律法の子にあらざ、日曜學校より出づるものにあらず、其食物を計量するにもあらざ、將た醜態として誠命を循守するにもあらざ、吾人若し自然の力を受けて強健ならんと欲せば、かゝる良心に従ふべきにあらず、况ん

や異域人の良心より借り來りたる良心をや、吾人は過去若くは未來に於ける神怒の訛言に惑ふとなく、務めて現在の念慮に隨ふとを爲さざるべからずと、彼は其著「自信論」中に曰く、予が友は云へり、此かる衝動は下より出づるべきものにして、上より來るべきせのにあらざると、予は答へたり、此等の衝動たる、予に取りては爾か思れず、且つ若し余にして悪魔の見たりとせば、予は悪魔の爲に生活すべし、予が本性の法に勝りて神聖なる法あるべき筈なし、善惡とは只た彼此轉用すべきの名稱たるに過ぎずと、夫れ善とは唯其性に從ふとを云ひ、惡とは之に反するとを云ふ、……：……我が生涯は懺悔にあらざして生命なり、生涯其物の爲に存するものにして、虚飾の爲に在るものにあらず、假令下等の生涯にても、予は夫の虚浮、不確の生涯よりも、寧ろ其天真爛漫にして和平なるを愛す、……：……予を以てするときには世人が偉大秀美と思惟する行爲を行ふも、行はさるも、何の關係もあるとなし、予は自ら天稟の權利を有す、故に他の特權の爲に腰を屈する能はさるなりと、其名目論者及び實験論者と稱する書に彼は論して曰く、彼の宇宙に唯一個の物あり、即ち此老たる兩面者、創造者兼被造物者、心意兼物質、善兼惡、是れなり、吾人は之に就て自由に肯定否

定するを得可しと、

此哲學は右と同様の道理を以て、一切人間の歴史をも亦た自然の必然的發達なりとなせり、彼の宗教裁判の慘忍、羅馬帝國の腐敗、宗教の興亡、皆是れ人類の歴史に於て自然が必至的に發達したるの成果なり、ヘヤのステルリソング傳に其主人公の語を記したり曰く、諸の人間の信仰は一定の理法に從へり、而して其時代々々の信仰と事情、境遇と相遭逢するも、此理法の作用に由れり、其興り、進み、亡び、變するも亦た一に此理法に由らざんばならずと、エマソンは其代表的人物と稱する著に於て論して曰く、猶太教、基督教、佛教、馬哈瑪土教など云へる巨大の神學は、皆人心の必至、本然の作用より生ぜるなりと、凡神説は實際に之を適用するに際し、大に人をして之に心酔せしむるものなきにあらず、何となれば、自然に從へると云へる格言中には、彼の正當なる生活を爲すとて、一概に律法と本分とのみを重んじ、隨て情を矯めて法に從ひ、且つ抑へ、且つ糺し、以て沈鬱なる禪道に入るもの、全く看過する眞理の一面を有すればなり、基督教に至ては凡神説の大なる片面主義と缺乏とを補足し、又充分此缺乏點を足すものなり、されば基督教は人類の靈性的能力と感受性とを

成育し、其信仰と愛の生活に於て有らゆる自發力を進歩せしむるとは、單に自然の衝動によりて活動する生命一切の力の遠く及ぶる所なり、且つ基督教は是等の者を正し、潔め、其正則の活動に發達せしめ、之を統制、指導して正義に向はしめ、以て基督教的信仰と愛との生活に於て、一切能力の自然、圓滿、調和せる作用を現實せしむるなり、

美術的の嗜好道義的の觀念を駕御し、律法の誠命に對して自ら厭惡の情を有する所の人々に取りては、神が宇宙の全運行中に表現し、其高美の性徳を煥發して、以て自己を啓示すと云ふ、凡神説の教は、大に其人々の心を奪ふ者あり、然れども此情たる、唯た夫の神に關する自然神教的の思想よりして生ずるものに外ならず、何となれば自然神教に於ては神は第一原因にして、殆ど無限に悠久なる萬有の全進路の事件の爲めに迥に隔離せるが故に、實際上神は宇宙外に驅逐せらるゝものなればなり、然れども正則なる有神論は、矢張り凡神説と同じく、神を以て宇宙一切の運行中に自己を啓示するものとなすなり、然り而して有神論に在ては神を説くの正確なると、固より凡神論に優る幾倍す、何となれば、有神論に於ては神の啓示を以て無意

識、無限定なる本體、若くは純粹なる實在、若くは無意識なる絶對の啓示となさずして、圓滿の知慧と愛にて活動する絶對の理性なる活ける神衆見たる人類の信賴し、愛し、從ふ可く、共に與に義と善の國を此全地上に建設する爲に勞す可き天の父の啓示となせばなり、フオイエルベツハは有神説を嘲笑して曰く、神を富まさんが爲には人は却て貧くならざるを得ず、神を一切と爲さんには、則ち人は皆無とならざる可からずと、此言たる正に以て凡神説を評すべきもののみ、若し有神論を評せんと欲せば、此言と正に相反するの語を以てせざるべからず、何となれば神の偉大なるとは、適ま以て神の道德政治と父親的慈愛とを被りて、神を知り、神と交り、以て神に事ふるを得べき人類の偉大なるを顯はすに足ればなり、

(六)元來凡神論は其種類極めて許多なるが、其斯く分岐するもの、中、絶對の性質に關する觀念を以て最となす、然るに余は此短簡なる講究に在て思想の一定ならんとを欲するが爲に、重にスピノザの唱道せる凡神論を根據とは爲しぬ、思ふに是れ諸種の凡神説中最も曉會し易く、且つ最も充分齊一に該説を論述したるものなればなり、今絶對に關する其他の諸説を擧げんに、或派に於ては、本我を以て、本元、獨一

の本體にして、一切の偶事、一切の實在は皆な此中に始めより含蓄すと自定し、或派にては、活動する道義的順序は即ち神なり、此外に神の必要もなく、又他の神を理會するとも出來すとせず、他の説に在りては、絕對者なるものを以て主觀客觀の合一せる者と爲し、此絕對的主客觀念なる者を以て、スピノザの所謂獨一唯一の本體と同一物と爲す、其他の派に至りては又時に或は論して曰く、絕對は即ち全然不限定にして、虛無と同一なる純粹の實在なり、思想の運用なり、宇宙に遍滿する無限の否定なりと、蓋し此派にては思想と實在とを同一にし、宇宙の運用と論理の運用とを同一とするものなり、而して此派に於ては絕對の論理的順序たるとは、猶ほ他の派に於て其道義的順序たるが如し、故に之が終結は即ち純然たる唯心論となるなり、又一派あり絕對者を稱して無意識者となし、其性質を論して有心性なく、意識なく、又自由なくして存在する道理なりと言へり、且つ彼の敬神の念炎々たる靈魂は自ら寂滅するに至り、遂に自體と萬物とを併せて神の中に埋没し去るの神秘教も、亦た此凡神的絕對の顯はれたるものなり、然るに上に列舉せる凡神論の諸派は、スピノザ説の新規の形態を占むれども、其至要の原理未だ曾て毫も變更せしとあらず、

故に此スピノザ説を排斥する爲に用ひたるの論説は、左迄變更するなくして直に以て凡神説の諸派の攻撃に適用するを得べし、凡神説の論者にして間々凡神論てふ名稱を甘受するを屑しとせざるの徒ありと雖ども、是は猶ほ兒子の病疾に罹れるとき其氏名を變易するときは、病魔は其人を見出すに由なくして直ちに離去すべしと妄想せる野蠻人の思想の如きのみ、蓋し是等諸派の唱ふる所は素より千種萬別なりと雖ども、要するに皆な下の如き意義を含まざるはなし、曰く宇宙と其究竟基本とは獨一にして同様なり、曰く有限の實在者は只た絕對の存在する方法たるに過ぎずして、自ら眞に實在たる者にあらず、曰く宇宙の統一は原因結果の理によるにあらず、曰く宇宙の運行は移動的原因の作用に由るにあらずして、只だ絕對實在が其存在の種々の方法に向て絶間なく轉化しつゝ、展開しつゝあるに由る、曰く此展開は智能なく、又自由なく、只た無意識、必至の有様にて行はるゝなり、曰く、絕對者は進化して人間に至り、始めて意識を得るなり、曰く、箇人的靈魂不滅なる者ありとなし、曰く、神人共に自由力なる者を有することあらずと、而して之より生出す可き當然の推論は、乃ち道德的責任及び律法に對する基礎にあらずとのと即ち是

れなり、要するに是等諸派皆な絕對を以て無覺、非有心的なる者となし、人類は之を信仰すればとて、萬有の必至にして抗拒す可からざる勢力に有意識的に從屬するにより脱する能はずとなし、木屑若くは石片と同しく信賴し、禮拜し、交通し、愛敬するに適せざる者となし、然り而して其想像に由りて神とせらるゝものなると、尙ほ偶像か手を以て製作せらるゝか如しと爲し、而して其一旦意識を有するに及びては、宛も夫のホルレスの田神の木像の如く、自己が腰架に作られずして神と像られたるを見て、呆然たるものと爲すなり、

(七)然れども右に述べし如き凡神論の深遠なる思辨は、之れを無用にして且つ價値なき者と見做して棄却すべきに非ざる也、抑も是等の思想は、夫の獨斷教に陥り、唯理説に入り、自然神教的に傾くよりして埋没せられたる真理の面目を明示し來り、而して此真理たる基督教有神論の決して看過して、不問に置く能はざる者なりとす、

扱此等真理の諸點中特に此に記すべきの條は、萬有の中に神の遍滿すると、及び其人靈と共に存し、且つ其上に活動を及ぼすと云ふと、絕對を以て宇宙に活動し、其儼型的思想を表現し、而して本性的要素と緊要なる原理とに於ては、人類の理性と相調和せる無上、普遍の理性とすの觀念、人の本性には暗に神なる念ありて、隨て人は自己に關するの意識を展開するとき、則ち其分離す可からざるの關係をなして神に關するの意識と相混するを見る可きこと、世界の運用は繼續連綿たること、及び物質と靈の間に關係、調和の存すること、人は靈的及超物的の境に跨るが故に、此かる世界を以て怪むべきものと思はず、且つ神の面前に存在して神と共に在る者たることを發見すること、是れなり、然るに若し基督教の教師にして不注意にも、凡神論者が主張する是等の真理は至要にして、凡神論と分離すべからざる者なりと思惟し、自説を支持せん爲に其中に凡神的一元論の特色なる要素を加へ、基督教有神論をして充分に發達せしめ、完全に之を證明せんとするには是非凡神説の補助を仰くを要すと論ずるが如きことあらば、則ち是れ至大の誤解たらざんばならず、夫れ神は永遠なる有心的靈にして、天の父、基督に在りて恩惠ある救主なりとなす、基督教の教義は其中素より右の諸真理を含まものなり、且つ基督教主義の此真理を表發するや、明白、完備、且つ威力ありて、凡神論などの決して企及すべからざる所

なり、然り而して此事を切實に表示するの事業は、是れ今日の基督教神學者が當さに爲すべきの要務なりとす、夫れ苟も神を以て自覺的有心者となし、自由に由りて活動する絕對の理性若くは靈となし、人は神に肖て合理、自由の靈的實在なりと信する者は、決して凡神論者には非らざるなり、

唯心的凡神論は殊更に主張して云ふ、此説に在ては有神論に優りて神を以て萬有中に遍滿する者となすが故に、人は絶へず神の現存することを意識するを要すてふ宗教上の需要を満足せしむるなりと

何人と雖どもヘーゲルの書を読むときは則ち神の現存の甚だ直接なるを驚くならん何となればヘーゲルの言ふ所によれば萬有中に活動する所の一切の力は即ち人類の眼前身上及び心中に活動する所の神の直接なる勢力なればなり故に若し神を信する者にして實際上自然神教的思想の中に陷没し神を以て只た宇宙なる機械の外部に在るもの及び事物の原始なる遙遠の過去に離隔し去れるものと考ふるに至るときは則ち實際上凡神説は此の如き人々の思念を引戻して存在する萬物の中に神の直接なる現存ありとの思想に返らしむるともあるべし然れ

ども少しく精神を凝らして熟考するときは則ち右の如く凡神説が人事の上に及ぶの實際の大勢力も凡神説其の物とは全く相兩立すべからざる者たることを知らん何となれば神は近きに在りとの思想も神を以て獨一の實在となし人間は唯此實在が存在する方法たるに過ぎざる者なりと考ふるときは則ち忽地雲散霧消すべければなり夫れ此論に據るときは絕對は既に人間の共に交通すべき有心的實在に非らず而して人間も亦た絕對と交通すべき有心者にあらず斯くの如く看來るときは則ち一見したる所にて左しも宏大雄偉の觀を呈せし概念も忽地奈落の底に沈みて神は唯一單獨の本體若くは無覺無感の有様にて存在する所の萬物に必至的展開する純粹不限定の實在なりとの不都合なる概念と成り畢り而して又人類に就ては之を理性、自由意志、有心者としての義務及び責任ある有心的箇存者なりとなすとあらずして單に絕對が盲突に展開し行く途中に於て一時實在となりて顯はるゝの一方方法たるに過ぎざるの妄説に達するに至る彼の神を以て宇宙に填充して總て其内の勢力を智慧と愛の目的に導き以て宇宙運行中に自己を啓示する永遠の靈となし又人を以て神の連続せる啓示を收接して神に對する責

任と義務あるを自覺し神の恩恵を受けて以て其面前に生存し即ち其靈と神の靈と相對して相見る所の神の肖像たる有心的靈なりと説くは是れ凡神論にはあらずして有神論にてあるなり

第四唯物説——唯物説の教義に曰く物質は其中に至要至切離るべからざるものとして力なるものを具へ以て永遠に存するものなり總て宇宙の實體は只た物質と物力とが諸種の形狀にて存在する者に過ぎざるなりと此説に於ては神も人も皆な靈自由超物的の性ある者にあらずと論ず

唯物説は其宇宙の絕對なる根據と宇宙其物とは同一なりと論ずる上よりして云ふときは即ち一元論たるなり又ヘーゲルの言へる如く唯物説は物質形骸及び物力の三者は分離すべからざるの關係を有すと自定す……苟も知識の領域内に於て何の處にても眞實の形而上學存するを認許せず只だ獨り形而下學の存在するを認許するのみ、唯物説は公言して曰く物質的萬有は全骸なり此外に事物あることなしと

然れども嚴密に言ふときは唯物説は一元論にあらず何となれば永遠の實在者即

ち元子なるものを信すればなり抑も唯物説に所謂物質なる者は只だ是れ無量の箇存物を總稱せる言辭のみ其所謂單一なる者は凡神的一元論に謂ふ所の單一の如く唯一獨一なる實在の單一に非らずして只一定せる原因法の下に在りて不變同一に活動し以て一系統中に許多の者が動勢的統一をなせるものに過ぎず至嚴なる意味にて言ふときは一元論とは只だ絕對は唯一獨一の實在なりと爲す凡神教に附す可きの名稱たるのみ然るに彼の原子的宇宙論はデモクリタス及びレナチウスの時代より今日に至までも尙ほ唯物説に附着して離れざるものとす夫れ其實際の成果に在ては假令凡神説と其趣を同くするとありとも此兩者は元來徹頭徹尾二箇の相反對せる知識論と思想の形骸とを有するものなり凡神説の基本とする所のものは普遍にして總て別個的なる者は皆只た之か表現たるに過ぎずして自ら箇々別々の實在を有するものに非らず然るに唯物説の基本とするところは全く箇々別々のものに在り是等箇々別々なる者は皆具體的實在にして動勢的關係を有し又一定の理法の下に在て科學的に知るとを得べき一系統を爲せるものと爲し以て之が統一を發見す且つや此兩者は又其論式に在ても亦た相

異れり前者は先天的論法によりて絕對者に關する觀念を以て其首點とし之よりして絕對者の必有性と絕對者の因て以て顯表せざるを得ざる所の宇宙の必有性と演繹し且つ此論式に由りて單に絕對者の性質を演繹するのみならず又絕對者が展開して有限者となり展開の極得る所ありて再び其自體に還歸する運用を續釋し及び世界歴史の進路が必す云々ならざる可からざるをも決定するなり故に凡神説に在ては其所謂神なる者の存在如何に關する證據の有無を問はず人をして此事に就て攷究せしむるを肯せざるなりされば凡神論者が神の存在に關する證據を以て達議の士に對して功なしと嘲笑し其中の一人の如きは之を以て、虚弱なる小女に與ふべき糖水に過ぎずと爲せしは毫も怪異すべきの事に非らざるなり之に反して唯物説の辨護者は一般に論ずらく總ての知識は特別各個なる者を視察し一般の理法を歸納し出すに由りて次第に増進するものなりと物質學が思想の此兩種中の後者に屬すべきは明白なり而して唯物説の此原理と論式とを善く導奉したりしが爲に物質學に非常偉大の進歩を來せしとも亦た明白なり而して彼の有神論の如きも亦た此種の思想に屬するなり何となれば有神

論も亦た各箇より一般に至り數多なる者より一切の統一に至ればなり蓋し此種の思想に在て成立し得べき唯一の統一は數多なる者が科學的系統に於て到達したる統一諸種の實在が合理的原理法則の下に在て合理的理想と目的の方に傾向せる動勢的關係に於て達する所の統一たるや明白なり且つ夫れ此種の思想に在て思念せられ得可き唯一終局の統一は彼の宇宙の究竟根據にして其中に其備型的思想を顯はし以て次第に智慧と愛の目的を達する所の完全なる理性に基くとも亦た明白なりとす

夫の殊更學的ならんとを主張する唯物論者にして其説に被らしむるに一元論てふ凡神的名稱を以てし以て自ら全く異なる種類の思想に屬せる「大先天路」に出てんと欲するは是れ甚だ怪異すべきとに非らずや夫れ然り豈其れ然らんや若し物質學及び有神論を構成するに特別なる者箇々別々なる者に就て研究を始め漸次上進して普通なる者一般なる者に至るときは則ち出來得べき唯一なる萬物の統一は理法の下に在て相于係活動する合理的系統ならざるを得ず而して此の如き統一は絕對理性なる神の存在せるとを確認して後に初めて得べきのみされば若

し學術家にして神の存在するを拒否する如きとあらば則ち學術の原理と論式とを放棄して以て虚偽の形而上學と凡神説の使用する論式とに従ふものなりとす夫れ斯の如く觀察し來るときは則ち凡神説と唯物説との二教系は其原理根本を異にして到底相兩立す可からざる者たると明白なり學術及其論式は如何程之を應用するとあるも決して萬物の統一は獨一唯一の實在者に在りとの凡神的一元に歸着する能はず蓋し眞正の知識論と學術的研究の原理と論式とに準據して之を言ふときは則ち凡神説は到底成立す可からずして且つ唯物説も立脚の地なきに至らん何となれば神の存在するてふ事は理性の問題を解説し又合理的系統の中に許多なる者を統一するに最も必要なるものなればなり、然れども唯物説は凡神説に比すれば能く有神説と契合する所あり何となれば唯物説に於ては其論するや特別なる實在の知識に始まり各箇より一般に進み、有限より無限に至り且つ其論の必至の結果として獨一實體及び獨一實在の統一にあらざして合理的系統に於ける許多の實在の統一を提出すればなり之に反して其實際上眞實の絕對を看過し人類をして有限以外に出づる能はざらしむる點に於

ては其有神説と相契合せざる逆も凡神説の比にあらざとす是に至りて又唯物説に關する批難生出すべし即ち唯物説の絕對者と稱するものは絕對に非らざると是なり夫れ物質は決して絕對若くは獨立の實在たる能はず其本質上他に從屬するもの又制限せらるべきものなり其定義に據るに物質なるものは空間中に包含せられて之を占有するものなり部分より成立するものなり分解性を有するものなり其部分は絶へず運動變化しつゝあるものなり且つ唯物説の自定する所に曰く物質と物力とは定量ありて増減するとなく且つ容積に於て何立方哩重量に於ては何噸一方に於ては何呎封度と之を計量して概念するを得べしと博士クラーク、マクスウェル原子に就て論じて曰くよし年代の経過中に在て諸種の災害天に於て起り斯くて昔時の系統散解して其中よりして新しき系統進化し出づるが如きとありと雖ども是等の系統を形成せるの分子即ち物質的宇宙の礎石たる者は破壊せらるゝなく削減せらるゝなく永遠に存するなりと然れども今日學術が思考する如く原子其物に就て一層精密の觀察を下すときは則ち是れ決して究竟なる者に非らず是等の物の背面萬有の進路以外には必ずや

一原因存在せざるなきを得ず且つや唯物説は物質と勢力とを有の儘に爲し置くものと云ひ得可し此を以て見れば唯物説は明かに眞の絶対即ち獨在者を説明せざるものにして又眞正の一元論をも説かざるものとす苟も宇宙の究竟基本及び統一を見んと欲せば物質を超へ又其裏面に進まざる可からず故にハックスレイ氏曰く哲學的講究と學術的研究の兩分領の境界線の所在を遺忘し唯物説中に含有せる道理と物質的法式及び記號とを同一視するの學術家は夫の由て以て數理上の問題を解説すべきXYなる記號と實在者とを混視せる迂濶の數學家と同等の地位に自己を置くものゝ如し且つ此數學家の誤解は數學家一己の誤解に止まりて社會に害惡を流すとあらずと雖とも組織的唯物説の誤解に至りては實に等閑視すべからざるものあり何となれば是れ氣力を萎靡せしめ生命の美を害する者なればなりと

唯物説の尙は一の非議すべき點は人類の知識と五官よりして得たる者の外にもあるとなしと云へる無憑據の自定を以て其基礎となせるに在り是れ即ち唯物説に於ける主觀的側面にして之に對する他の客觀的側面として即ち曰く物質と

物力との外には何物も存在せずと抑も此の如き説は積極の議論を以て證明する能はず然るに意識と理性の提出する證據は悉く之に反せざるはなしされば唯物説にして此理論を根據とする以上は唯物説を辯護する證據も詮し來れば畢竟只だラプラスの唱へし小兒らしき議論と成り果てんのみ彼は云へり吾望遠鏡を以て限なく天上を窺ひたりと雖とも曾て神の如き者存在するを見ずと此言たる語を易へて曰へば則ち五官の感する能はざる者は存在せずと云ふに外ならず然れども若し望遠鏡を以て探究せし中に天の一方に方りて自ら神なりと思惟する者を目撃したりとするも望遠鏡を透して之を見たりと云ふ事實は以て眞の神にあらざりしとを證するものなりと云はざるべからず彼の穀俵の四隅を能く々々探究したりけれども何の處にも磨穀者の影たに看出す能はざりけりと謂ひたりし農夫は旨くも上の議論を通俗的に言ひ易へたりしものなりとすフィルヒョウ曰く一獨斷論中に在りて唯物説程危険なるはあらず何となれば此説は自己の獨斷説たるを拒否して科學の衣服を裝ひ且つ純平たる思辨論の境域に彷徨しつゝも揚言して實事の上に立てりと言へ未だ征服し盡さるに早や己に其領地を舉

けて萬有學に合併せんと企つればなり」と

唯物説は有心性を拒否すれども之が事實を説明する能はず而して之を拒否するや全く學術家の當に使用すべき推理の正道より離れて邪徑に入れりクルークス從來目撃せし所の者とは本質上全く相異なる尖鋭燦爛たる緑線によりて「ザリニーム」てふ新金屬を發見したり此時に當り氏は若し唯物説家の所爲に従ふて推論したらんには必ずや言ひしならん曰く夫れ原素は六十四以上あるべからざるが故に此金屬も亦其中の一ならざるべからず」と然るに氏は幸にして學術的に推論したり曰く是れ「スペクトラム」に在て從來未だ曾て見へざる所の新線なるが故に未だ曾て世に知られざるの新元素を表現する者ならざる可からず」と若し夫れ之と同様なる學術的論式を應用して人類に在て觀察し得べき有心性の事實を論ずるとせば則ち物理的機械系に超絶し物質と物力との中に含まれざる物ありとの推論に歸着せざるを得ざるべし

且つや唯物説は以て宇宙の物質的現象をも説明する能はざるなり夫れ化學的親和力、熱、光、及び電氣、引力、物力、永存など云ふ事は或限域内に在ては能く物質的作用

の進路を明示するを得べしと雖ども然れども何れも其區域内に在て終極的説明をなすと能はずして是等の物の背面に存在する一の秘奥なる勢力に歸着するに至る此事たる常に學術家の胸間を往來して思辨の材料となり居れりランキンは熱の散失するが爲に宇宙の力は次第に減耗すべしとの臆説を研究せんとて言をなして曰く列宿の間に在る精氣は萬方虚空に限齎せらるゝならん而して彼の發射熱は是等の限界に至て反對を起し反對せる熱は宇宙の四邊に層集し遂に凝集して幾多の燒點となるべし而して若し一の死世界にして空間を回轉し偶然是等の燒點の一と衝突するときは忽地溶解して其元素に還歸し是に於て從來の沈滯せる物力即時に變して復ひ宇宙の活動力となるならん云々と而してクラウヂウス氏は此臆説を引用して證明すらく是れ決して數理上出來可からざるとなりと又彼の細微にして萬躰に通徹せざるなく遊星の運行を阻礙する兆候もなく左りとて又彈力性に富み堅緻なると金剛石も管ならざる精氣に關する思辨の如きも亦た上と同一の傾向を有するものなり蓋し是れ取も直さず古昔の水晶界の思想の新奇なる形狀を取て顯はれたる者のみ夫れ斯の如く何の世何の代を問はず學

術的思辨の歴史に於て人の心意が必ず發せざるを得ざる疑問あれども物質學は物質と物力とを以て決して之を答解する能はざるなり然り而して物質と勢力とに關する學術的知識にして益々大を加へ彌々明瞭を増すときは則ち物質と物力の背面なる不可思議力の益々吾人に接近するを覺ゆ可し。實に唯物説は矛盾の結合躰なり恐くは多少世に行はれたるの説にして此説の如く此特質を有する者はあらざるべし人は只だ五官に因て知覺せらる可き者のみを知ると云へる主觀的唯物説中には現象説と純粹の不可思議説とを含み物質は永遠なる者なりと説く客觀的唯物説には則ち五官を超絶するの智識は其元始に於て實體的にして永遠不滅絕對なる實在に關する智識なりとの意を含めり而して此説に所謂永遠の實在なる者は即ち其本質に於て有限なる物質に外ならず其説く所に曰く動力は變形して思想となるなり曰く心意は物質より生し物質の表現せる者なりと而して之と同時に又曰く物質は只是れ心意の知覺若くは觀念たるに過ぎすと斯く論ずるかと思へは又説きて曰く物質は之を知覺する心意の存在せざりし幾代の前より存在したりしなりと夫れ斯く物質に心意的現象を附し又

之を以て絕對實在となすは即ち物質の根本的意義を變するなり然るに尙ほ平氣にして此兩質の間に區別を立つることなく以て此語を使用し居れり又た説て曰く物質と物力は宇宙の究竟基礎にして萬物の究竟的解説點なり宇宙の歴史は物質と物力との進化の歴史なりと而して之と同時に又進化には終結あらざるべからず元始あらざる可からずと云へる學術説を抱持するなり若し此説に従はんか則ち絕對の元始即ち原因なき原始あらざるへからず絕對の終末即ち承繼的變化若くは結果を生出す可き一切の原因力なき結果あるへきなり以上論ずる所を總括するときは則ち唯物説は皆に宇宙を解説して其意味を明示するに足らざるのみならず又其矛盾する所の甚だ許多なるが爲めに物質と云へる語の意義を充分變更するに非らずんは到底人間の思想に於て思考する能はざるものなりと云ふに在て存す

第十章

絶對者と有神説

多神説及び一神説なる二名稱の存在する所を以て見るときは有神説なる者は此等の二種を包含するの類なるが如しと雖ども實は有神説(シイズム)てう語は一神説(モノシイズム)てう語と同意義に通例使用せられ隨て兩者を總稱するの名稱を欠く

神に關する諸種の信仰は大要之を四種に分類し得可し即ち

第一多神説(ポリシイズム)多數の神あるとを信ずる者なり此中に包容せらる可きものは上古人類の信仰にして天然物は皆な人類と同一なる心意若くは靈魂を有して活動するものなりと信ずる靈魂教(アニシイズム)其一にして之に胎胎し來れる拜物教即ち如何なる物躰と雖ども皆禮拜さる可き神の靈祠なりと信ずる説も亦其一なり、

第二は兩神教(ディシイズム)各自自存永遠の性を有せる善惡二柱の神の存在する

を信ずる者なり是れ波斯上古の宗教と、マニキイズム説との中に顯はれたるものなり、

第三は一神説(モノシイズム)活動理性、永遠の靈、有心的の神たる獨一の神を信ずる者なり、

第四基督教一神説は、キリスト教の聖經に記録せる如く基督耶穌に於て顯はれたる救世主なる獨一有心的の神を信ずる者なり、

以上の四者を總稱して宗教的信仰若くは其最廣の意味にて云ふときは有神の信仰と云ふ、何となれば是等は皆な神を以て禮拜奉事の目的物と信ずれば也、夫の前に述べたる四種の無神説の如きは神の存在するとを信認せざるが故に此中に列する能はざる也、蓋し人類を萬有の無覺必至なる勢力に服屬する如き卑下の地位より抽脱して自己を指導し保佑するの大能ある有心的の神と相交渉するに至らしむること實に宗教の本相たればなり、

反對論者あり言をなして曰く、右宗教的信仰四様の形態中に於ける神は其名稱こそ同一なれ其觀念に於ては毫も共通の點あるとなし多神説中の下等種類に在て

基督信者が崇拜する絶対靈の痕跡を覓めんと欲するも能はざる也と然り此種の言は有神説に就てのみ言ふ可きに非らず彼の時代の異なるに隨ふて之が概念を異にせる形而下學上の物躰の同一性に就ても亦た若か云ふとを得べきなり譬へば太陽に就ての人の觀念は古來幾多の變更をなせしや知る可からず然れども是れ只だ數千年來人類の眼前に照耀せし同一の太陽たりしものにして而して其の特點に關する人の概念に至ては今古に通じて常に同一たりしなりされば上下幾千年間人の心意に照耀せし所の者は矢張り同一の絶対靈にして人の之に對する概念縱し年代の異なると共に異なりしにもせよ其の特別なる點に對する人の思想は千古に通じて常に同一なりしなり而して此等の中に吾人は明白に絶対靈の痕跡を認む即ち神は常に多少明了に人の如き智能あり自由ある靈にして隨て超物的なるものと思惟せられ又人を超へ人の上に位し及び人の知るが如く世界の上に在る者と信認せられ隨て絕對者の影は人の靈の上に映ず、之に對して又一の反對説あり曰く右に述べたる説明は彼の神は自己を人に啓示し人は其啓示を経験して以て神を知るとの教義と撞着す可しと其言に曰く若し

果して神は宇宙に自己を啓示して人は經驗によりて之を知るとを得るとせば則ち無神論者ある可き道理なし然るに實際に之あるは何の故なるか何故に見聞感得し得べき者を信ぜしむるよりも敬神の念を起さしむるには一層多く啓發誘導するの必要あるか何故に人々神に就ての觀念を異にするか試に思へ誰か太陽を黒色方形なる者と信ぜんやと然れども記憶せよ在昔アナキサゴラス曾て説をなして曰く太陽の大きさはペロポネシウス州と相若くものなりと然るに此大胆なる定言は當時の宗教説と背戾せるものなりしが爲めに氏は忽地逮捕の厄に遭ひたり何となれば當時の宗教説に據るときは則ちアポロは神にして太陽は其乗車たりし也苟もアポロの乗車を以てペロポネシウス大の火焰塊と見做す可けんやとは當時の反對者がアナキサゴラスを攻撃したるの言なりき夫れ此場合在て太陽に就ての科學的總念の不完全なりしは實に神に就ての總念の不完全なりしが如くありしなり然るにアナキサゴラスの理會せし所は學術上太陽に就ての眞實なる總念の方に進歩せると大なる者にして其功勞の偉なるとは歴史の永く記憶して忘れざる所なり且つや氏は又神を以て宇宙に活動して之を統理

整理するの理性となし神の總念に於て顯著なる進歩をなしたりしが後ちプラト
 ーアリストトルの出づるに及んで此理益々明瞭に赴けり夫れ人は常に太陽の圓
 軌にして光輝ある者たる事及び其他の實事を信し而して此信認は天文學が如何
 程まで進歩するも決して變ずるとあらず此の如く神を禮拜する者は神を以て自
 己と自己が觸接統治するを得るものと自己が其中に活動し得可き世界を組成せ
 る一切のものに超絶せる睿智力なりと信じ而して神に關する其他の信仰にして
 亦永遠に存在して如何程人心の進歩するあるも決して變更するとなきものあり
 されば此點に於ける神の啓示は宇宙の啓示と毫も異なる所あらず是も彼も兩者
 ともに人間の能力を離れ若くは人間の攻究と思想を要せざる如き有様にて自己
 を啓示せざるなり若し夫れ宇宙にして此の如き有様にて自己を啓示せんか則ち
 人間は教育練習發達を得るの機會なく常に成長せる小兒となりて此世界に存在
 せんのみ若し又神にして上の如き有様にて顯現したらんには則ち人間は靈性の
 練習と發育とをなすの期會なきに至るべしさればカント氏曰く若夫れ吾人が熱
 望し或人は又既に之を發見したりと思考する如く神と永遠性が其畏怖すべき威

嚴を具備して絶へず明白に人間の眼前に顯はるゝと云ふが如き非常の悟性吾人
 に存すとせば則ち人類の天性現今の儘にて繼續する間は人の徳行は只た單純な
 る機械と變す可く其様宛も人形芝居に於ける人形の如く能く縱横無盡に動くと
 はあるべしと雖も遂に些の活氣あらざるなりと

吾人は既に絶對者の存在するを知り及び之を知るとは不完全なりと雖ども其
 實に之を知り得べしとを知り得れば則ち是よりして絶對者は宇宙間に
 活動せる絶對理性にして永遠の靈獨一の有心的なる神たることを明かにせざる
 べからず

論者動もすれば自定して謂らく哲學に所謂絶對者が人類の崇拜する有心的の神
 たるを顯さんとするは啻に困難の業なるのみならず實に出來可からざるの事
 なりとヤコビ曰く人は其常智に在ては異教者其哲理的思辨に在ては無神論者其
 感情に於ては基督信者たることを得しとフリュエーゲルは一例としてシユライエ
 ルマヘルを擧げて曰く彼は宗教を殺す可き理論を抱懐しながら尙ほ且つ正直熱
 心なる基督教の信者にして辨護者なりきと基督教の思想家の間にも何の攻究を

もなさずして容易に此哲學に所謂絶對と有神論に所謂神とは決して兩立す可からざる者なりと云ふ妄説を輕信するものあり而して定言すらく哲學的思想及び理論的知識上よりすれば神の存在若くは其性質に就ての知識に對して基本となるべき者おらずと雖も宗教的信仰は獨り倫理的及び靈性的感情と聖靈の證明を受けたる聖書中なる神の言葉とに根據せざる可からずと、教授チャールズ、ホーチ曰く、若夫れ絶對に關する哲學的總念にして、神性に關する各問題を決定す可きものたれば則ち吾人は知識の目的物たる神の觀念を信するの心を放擲せざる可からずと而して氏は又ストラウスの語を引用して曰く、絶對の觀念と聖の觀念とは兩立す可からず、前者を信するの徒は后者を棄擲せざる可からず、何となれば聖なる觀念には相對の意あれば也、故に神は聖なる者なりと確信するの徒は神は絶對なりとの觀念を棄捨せざる可からずと、教授ダブリユ、デイ、ウヰルソンは物質の永遠自存説に抗辨するは有神論の防禦上に緊要なると思考せず説をなして云へるやう、假令物の現時の組織には其元始なかりしとするも進化力は今日の前既に久しく無上實在を生出し居りたるものならざるべからずと

吾人は是よりして將さに絶對者は有心的なる靈若くは理性にして活ける獨一の眞神なりとの證據に就て攷究する所あらんとす、而して余は此に神の有心性の證據を研究するに先たち注意し置かざる可からざる二三の要點に讀者の注意を惹く可し、

一、哲學に謂ふ所の絶對者と有神論に謂ふ所の有心的の神とを同一に視做の困難の幾分は有神論と相比較さるる、哲學の虚偽なるとより生出する也、即ち此哲學は絶對に就て虚偽の觀念を説述し、絶對の性質を確定するに就ても亦た虚偽の方式を用ふるなり、此の如き誤謬は余の既に明示せし所なり、彼の博士ロイスが若し絶對者にして果して物を創造す可き者たらば則ち宇宙は一舉手にして完全の宇宙ならざる可からずと云ひ、此の如くして一度創造せられたる以上は復た進歩的に發達す可きの道理なしと云ひ、有限なる宇宙の進化中に絶對の漸次に啓示せらるる概念は絶對の觀念と兩立す可からざるものなりと云ふが如きも亦た上の如き虚偽の哲學に基因せるもの也、此の如き議論は實に左の二箇の妄論の何れかを包含するもの也、即ち絶對者は他の絶對にして獨立なるの實在を創造せざる可か

らずと云ふか又は絕對者は何物をも創造する能はざるものにして隨て限局無能力なる者なりと云ふか何れか其一に居らざるべからず、博士の議論は又吾人は絕對者の創造をなす方法を明知するに非ざる以上は則ち絕對者の創造するを知らずと云ふの意義を含むものにして、吾人は心意が心意の中に有らず又心意の觀念と同様ならざる物躰を知るの方法を明示する能はざるが故に此物躰を知ると能はずと云ふものなり、又博士の論は若し吾人知識の眞實なることを證明する能はざるときは則ち何物をも知る能はずと云ふの意味をも含めるものなり、夫れ眞正の有神説が此の如き虚偽の哲學と相調和する能はざるは又怪異するに足らざるなり、獨國凡神説の因て立つところの妄斷なる心理學的觀念と原理とは皆に絕對は有心的の神なりと云ふ知識と相調和する能はざるのみならず亦た前にも既に論ぜし如く、同く何物の知識とも調和する能はざる也、若し新韓圖學派にして神に關する知識は道義感情に基づける者にして心理學とは全く關係なき者ならざる可からずと論ずるとの果して道理に合するとなさば則ち常智的にせよ學術的にせよ一切の知識は同しく新韓圖派の唱道する虚偽にして凡神的なるの心理學

と全く關係なきものならざる可からずと云ふとも亦た眞ならざるを得ず、夫れ右の如き及び之に類する誤認の爲めに毀壞せられたる心理學と哲學を以てするときは此の如く誤り思念せられたる絕對が有心的の神なりとの知識を得んとは、到底出來可からざるとなり、何となれば此説に依るときは絕對は唯だ一の妄想にして而して一切の實躰と一切の知識とは皆な此中に吸入せられたる者となればなり、されば此かる場合及之に齊しき場合に於ては吾人決して有神論に謂ふところの神と哲學に謂ふところの絕對者とを同一視する能はず何となれば是れ眞實の有神論と虚偽の哲學とを比較するものなれば也、然りと雖ども吾人若し之を始むるに眞正なる哲學の觀念と原理とを以てするときは絕對は即ち有心的の靈若くは活動理性なりとの説を立つるに於て決して先天的の困難あらずして、且之が證據を無効ならしむべき妨碍あざざる也、二哲學に謂ふ所の絕對と有神論に云ふ所の神とを同一視するに就て妨碍となる可き幾分の困難は又有神説に所謂神なるもの、性質に關する虚偽の總念より生出する也、非有神論的思考家は通常皆な自定して謂へらく有神的總念に據るとき

は則ち神の宇宙を創造するや一たび手を下して以て之を大成し而して後宇宙に於ける神の作用と啓示とは只だ輕浮なる奇蹟的の妨碍を宇宙の理法に試むるのみと云ふに在りとカールライルは此臆想を雄麗の筆に顯はして曰く致仕せる神は第一の安息日以後何の爲すともなくして宇宙の外に坐を占め其移り行く有様を傍觀してあるなりと然るに有神説の實際神を概念する所は全く之に反して絶對者は宇宙と別物にして又宇宙に超絶すると同時に宇宙に遍滿する者なりとなし、絶對者を以て宇宙間に活動するものとなし而して神の心裡に儀型的に存するところの眞義完全及び善なるもの理想を有限者の中に現實するものと爲し以て絶對の宇宙に超絶することゝ遍滿することゝに關する大問題を解説するなり、此説に據るときは絶對の靈は常恒に亘りて有限の被造物に其永遠なる智慧と愛との思想を顯して以て自己を啓示しつゝある也、されば神の啓示は常に進歩的なる者にして何の時期に至るも曾て完全終結せらるゝが如き者にあらざる可き筈なり、蓋し無限者は決して充分明白に有限者中に表示され能はざる也、然れども上に述べたる困難は徹頭徹尾悉く反對者の有神説に對する總念の誤れるより起るも

のに非ずして又其幾分は有神論者の謬解より來るなり、神學者は往々宇宙を以て其創造の時に於て完成終結せし者なりとなしたり、實に此の如き思想は一時基督教神學に於ける普通の總念となり、然るに教會歷史上に在て凡神説風の思想の相繼で表現し來りたるは吾人の注目すべき事なり、此かる思想の中に就て博士ハント等の諸氏が稱して凡神説なりとなす者の如きは只是れ宇宙の外に神を斥けて宇宙を以て全く大成せられたる機械となすの概念を離れて神を以て宇宙に遍滿し物靈兩界に於て永遠一般なる理性の儀型的觀念を現實し、殊に靈界に於ては神の靈の臨在及び基督の贖によりて漸次に義の國の成長によりて漸次に自己を啓示するものとなすの總念に還歸せんと欲するものたるに過ぎざりし也、今日に至るも神は超絶的たると同時に亦た遍滿的なる者なりとの總念に還歸せんとするの風一般に行はるるに神學者中には往々此思想潮流の眞義を誤りて正路を踏迷ふて凡神的邪徑に彷徨する者あり、されば此の如き誤謬に陥落するの防禦をなすとは是れ今日の急務なり、而して之を防ぐと同時に神は宇宙に超絶し又宇宙に遍滿すてう教理は有神説の特別なる教義たるを解するとも亦た極めて緊

要なりとす、之を稱して基督教的凡神説と云ふが如きは是れ至大の誤解にして、獨り凡神説に非ざるのみならず却て凡神説とは兩立す可からざるの説たるなり、何となれば凡神説に在ては絶對と宇宙とを同一視して以て超絶性と遍満性とを無視し絶對と宇宙とをして自由若くは有心性なく自覺的智能若くは合理的目的なくして必至的に展開する盲突不可知に近き者となせばなり、有神論は絶對者と絶對者の性質とに關して積極的知識を有すと確信すると同時に此知識の十分ならざるを定言するものなり、夫れ絶對が有限者中に活動するところには常に玄妙不思議の存すべき筈なり而して其中に於ける絶對の啓示は何れの時に在ても恒に不完全ならざる可からず故に有神論者は決して神は如何にして宇宙を創造し如何にして宇宙に活動するや之を解説するとせず此事に關しては各自の心意皆な各異の方法を以て其作用を心裡に拙寫象想す可し夫れ有神論此の如くなすとあればとて之を以て凡神説と混視す可からず人の合理、自由、有心的の實在たるを認め又絶對者の宇宙と別物にして却て之に超絶したる者たること及び不完全なからも尙ほ人は積極的

に之を知り得可き意識を具へたる有心的の靈性たること人間の理性には超絶しなからも尙且つ之と種類を同ふすると及び合理的理想と目的を漸次に宇宙に於て現實するものたるを認知する以上は則ち其思想たる依然たる有神的にして凡神的には非ざるなり、

尙ほ此に附言す可きとあり不可思議説凡神説及び唯物説の起る所以のものを考ふるに幾分か人の知識をば妄斷にも思念す可き者にのみ限定し自ら想像中に描寫し出す能はざるの故を以て宇宙創造の實事と神の超絶性と遍満性とを拒否するに出づる事是なり

三、有神論の唱ふる神と哲學の唱ふる絶對とを同一視するに就ての困難の第三原由は有心性に關する虚偽の觀念に在り

反對者の説に曰く若し果して絶對者にして有心性を有すとせば則ち是れ絶對者を限定する也と然れども此の如き反對論は絶對に關する虚偽の觀念に基因せること及び若し此説を確實なりとするときは則ち又吾人が此く虚偽的に認定せられたる絶對に勢力若くは他の屬性を附し及び之を以て實在なりとなすと否なき

吾人が絕對を以て絕對獨立のものとなし隨て之を以て有限者と全く別物なりと爲すときだも尙ほ絕對の限定されたる事を認めざる可からずと云ふことは前既に詳論せし所なり、蓋し此反對説の云ふ所に依れば限定性デターミナトキスなる者は其本質取も直さず制限リミテーションなりと云ふものなれども吾人既に悟り得たりし所は大に之に異にして限定性は即ち實在の本質なり不限定的なる者は實在に非ざる也、不限定的なるものは實在と區別せる虛無にも非ざる也、又は虛無と區別せるの實在にも非ざる也、且つ吾人は既に實在の限定性其度を進むるに隨ふて即ち之に附帶せる能力と屬性の多々益々加はるに隨ふて其實在は彌々大なるものとなることを見たり若し神をして果して不限定的なる者ならしめば則ち因て以て神を思考す可き一切の屬性を悉皆神よりして剝奪し去るもの也、然らば則ち此反對論の歸する所は神を以て全然不可知なる者となすにあり即ち絕對を以て同時に無限たり有限たり附屬的たり獨立的たり完全たり不完全たり善たり惡たり心意たり物質たり有心的たり非有心的たり實在たり虛無たる者たらざる可からずとなすものなり、是に於てか絕對は只だの虛無即ち思想停止の表號たるに過ぎざる者となりて最早や萬物

の因て立つ可き根據に非ず却て日耳曼人の云ふが如く一切の思想智能及び實體を呑滅すべき深淵たるなり、神は絕對なりと云ふ事實の中には神は一切完全性の充足せるものなりとの意義を含めり、神は無制限的なるが故に一切を限制する者ならざる可からず隨て神の中には宇宙を説明す可き一切の潛勢力あらざる可からず

且つや絕對は有心者たる能はずとの反對説も亦た有心性に關する虛偽の觀念より來るなり

其妄斷せる説に曰く意識中に知らるゝ本我なる者は只だ感覺若くは印象の連鎖に過ぎずと或は曰く本我に就ての意識は只た是れ否定の意識なりと或は又全く有心性の本質を拒否するが如き定義を下す、夫れ斯く虚偽に解説せられたる有心性は到底用ゐて以て絕對者の資性となす可からざるなり然れども有心者とは合理的にして自由なる實在にして自己が一切變化の中に立ちて依然獨一同一に永存するを自覺する者を云ふなり右の如くに有心性を釋定するときは則ち決して眞正の絕對と撞着する如きとあらず抑も一切の變化中に立ちて常に唯一同一に

永存すとの事は是れ絶對者に關する觀念の中心點なり故に有限の有心者は只に絶對と矛盾せざるのみならずして却て絶對に對して至要至切なる要素と同一なる者を具ふるものと謂はざるべからず今夫れ圓の中心は假令圓の周邊の如何程大を加ふるも其圓の存する限りは變ずるとなくして存在するものなりされば此有心性の中心も亦た如何程其限定を除却するとあるも變更するとなくして存在せざる可からず若し然らずして此中心點容易に變更せらる可き者なりしならんには、則ち一切實在の實質は茲に消滅して絶對も亦た全く非在となつて消散す可し、

次に論ず可きは有心者の屬性たる、其本質よりして絶對者の積極的屬性たるを得可き者たる是れなり、今夫れ理性の原理と理法は普通無制限なる者にして以て萬般の事物を制限するをなせども決して何の事物の爲めに自ら制限せらるゝものにあらず、時間と空間の制限を受けず數量を以て計算する能はず一切の時と場處とを通じて同一に如何なる勢力も之を創造する能はず又毀壞する能はず意志は理性の光明に由て自ら決定し以て自導自行の能力たりとの意味より云へ

は則ち自由なる者なり、蓋し自由とは其本質上諸種の制限より離脱せる者にして人は其合理的なる自由の意志に於ては物界の上に超へて超物的實在たり、而して此程度までは人は諸種の必至的制限より超脱するものにして自由なるものなりと謂はざるべからずされば總て必然の制限より離脱せる絶對者は絶對普遍の理性にして其光明を以て自ら照らし以て自導自行して自由なる者たらざるべからざる也、且つや有心者が自己に關する意識は決して以て制限となす可からざるものにして意識あるは適ま以て其優等の實在たるを徴證す可く此意識のあらざるところを實に却て制限の證となり不完全の表徴となる可けれ、前にも言ひし如く絶對者にして若し人に至りて始めて意識を有するに至りしものとせば是れ絶對は時の経過と共に漸次に劣小なるものより優大なるものに發達し行きたるものとなるべく隨て人は嘗て無覺にして發達せずしてありし所の絶對に優るものたるに至る可し今夫れ赤子は其靈能を有するとを自覺せずと雖ども次第に發達して終には自己及び外界の知識を得るに至る、然り而して今や茲に哲學の名を以て提出せられたる一大説あり其説に曰く絶對者は有限の赤子と等しく時の経過と共に

に次第に發達し遂に人類に至て最高點に達し夫れより年代の進むと共に自己と世界に關する知識を増進し行きて止まざるなりと妄も亦太甚しと謂はざるべけんや

此の如く論究し來れば則ち有心性なる者は其眞の意義よりして云ふときは則ち眞の絶對なる者と對立するを得可くして有心性に至要の屬性は即ち絶對者の屬性たらざる可からざるとは明白の道理なり

是故に人の靈能を有して之を運用するあるは即ち人が神に肖たるものなることを暗示するものと謂はざるべからず人は其自覺性に於て同時に自己の知識の主觀となり又客觀となり其自由意に於ては其行爲と品性を決定し以て同時に自己の自由力の主觀となり又客觀となる也されば人は智力上の作用と實行上の作用との兩者に於て主客兩觀を自己の内に兼備するものなり故に人は其有心性上よりして云ふときは則ち自足者セルフ・コンティンゲントなりとす、

此に又一の妄斷あり曰く人間の有心性の有限なることは即ち有心性の本質なりと

ハルトマン、フライデーレル、及び其他の輩は論じて曰く神は靈なり理なり然れども有心者に非ずと蓋し此論に於ては有心性と云ふ語の本意を變更したり、彼等は絶對者を以て靈なりとなし之に賦するに有心性の至要屬性たる合理と自由とを以てしたり、然るに彼等は其自覺的有心性を拒否したり其故を問へば曰く是れ一個の制限たればなりと、此の如き説なるものは是れ其中に有心性は必ず時間空間及び數量の爲めに制限せられて以て他に從屬せざるを得ざるものなりとの意を含蓄す、然れども是れ有心性と其制限との間に區別を立てざるの致すところなり、元來此制限の如きは決して本質上有心性に附着せる者にあらずして只だ偶然之に附帶せる者たるに過ぎず、蓋し此反對論たる資性若くは勢力と數量とを混同したるものなり、絶對は有心性の屬性を具ふるものなりといへばとて之れ只有心者が有する積極的の固有性を絶對に附するまでの事にして其偶有の制限を之に附する譯にあらざるなり即ち其自覺的理性、自決的能力、其唯一性及同一性のみを移して絶對に賦與する也、且つ此に尙ほ一言すべき事あり、即ち智能と自由には必ず意識の附隨せざる可からざると是なり、若し夫れ意識なきときは則ち知識なく知

議なきときは則ち有智的且つ自由的に活動するの能力なし、果して此の如くなるときは則ち絕對者は智能なく自由なく智慧なく愛なく盲突的且つ必然的に宇宙に動作する者となる可し然り而して此に再び絕對者は發達せず又完全せざる者と承認せらるゝものと謂はざるべからず、蓋し神に關する此總念は凡神論と分別するに由しなき者なりとす、

カント及びヨット、ゲー、フ、ヒテの反對論に曰く吾人は絕對に有心性を附するを得ず何となれば吾人の有心性を知るは只だ制限を有する有限者によればなりと、然れども此反對説は只た有心性に就て適用すべきのみならず亦絕對者に能力、存在及び何等の實体を附する事に就ても同じく應用するを得可き也、何となれば上と同様の意義を以て云ふときは吾人の是等を知るは又只だ制限を有する有限者によるものなれば也、實際に於ては人は有限者に關する觀念の中早く已に無限者の觀念を具へ、從屬なる觀念の中既に獨立と絕對に就ての觀念を有てり、而して是等の諸觀念中に在りて人の思想は既に彼の超絶境に活動翱翔す、之と同様に自己に關する吾人の意識中には既に自己が無上普通なる理性の原理を享有せる理

性を有することの意識と及び無上普通の義務の理法の下に活動する自由意志を有することの意識との存するあり

スペンセル及び氏に従ふ不可思議論者は右の反對説に數歩を進めて論ずらく絕對者は獨一の外ある能はざるが故に他の者と彙類せらるゝ能はず他の者と彙類さるゝ能はざるが故に知らる可からず知らる可からざるが故に有心者たる能はずと、然れども此推理法は只是れ眞の具體的實在に代ゆるに普通總念と抽象とを以てする通常なる誤謬の一例たるに過ぎず、蓋し此の如き推論は一般より進んで特別に至り以て普通總念を分解する事を是れ勉むる思想の種類に屬して中古の空理論の餘喘に外ならず而してスペンセル氏の著書時に之が類例を見る、夫れ此種の反對論が其勢力を振ふ事を得るは只だ右の如き思想の種類に在て能くするのみ然れども學術的知識は個體に始りて部類に至るされば勿論學術に在ては全部類を知り得る前に必ず個體を知らざる可からず彙類の作用を施すときには個體は益々限定的の有様に赴き一部類の中に含蓋せらるゝの數は益々減少するに至る、而して吾人次第に進んで神に造るときは則ち神は絕對者として獨立するな

り然れども有有限的若くは制限的實體より移りて無限的なる者に至るも吾人は實
 體を棄捐して單に空しく制限を否定するに止るが如きことを爲すものにあらす、
 無限なる能力とて毫も能力たるを妨げず矢張り是れ無限的なる能力たるなり之
 と同じく無限制の有心性も亦有心性たるを妨ぐるものにあらざればせい、エス、
 ミル曰く推論し詰めて無限性に迄で造るも其者は其有限たりしときに具有せし
 一切の屬性を具へざるべからず但し有限性に屬從する資性は之を除くと、因て氏
 は例證を擧げて論じて曰く無限の空間空間たるを妨げず無限の善善たるを失は
 ずと

四、絶對者は有心的なる神なりとの人の知識は眞實なり、積極的なり、然れども不完
 全なり、

有神説は神に就て完全の知識を有すと妄言せず然れども又主張す神に關する知
 識は不完全なりと雖も眞實なり、積極的なり、神の一部に關するの知識に非ざる也
 何となれば神は部分を有せざれば也即ち獨一なる活ける有心的の神に關する知
 識なりと、是れ實に正當の説なりとす、

故に神に關する知識の或點に於ては只だ否定としてのみ顯はされ得るとの一事
 に至りては有神論も亦た不可議論者に左袒する也、蓋し此事たる吾人が既に書せ
 る如く實在の積極的勢力と其勢力の制限との間には分割線あるを見るときは則
 ち明白に解知するを得なん、今例を以て之を説かんに、此に四十馬力の蒸氣機關あ
 りとせよ、此蒸氣の力は即ち一物なり、而して其力量の制限は即ち是れ上の力とは
 全く別物なり、力は是れ此機關の由て以て自己を啓示する所の積極的資性なれど
 も此制限は此れ只だ其量數の記號たるに過ぎずされば一度其力よりして離るゝ
 ときは則ち何の意味もなく思想の虛形となり畢るべきもののみ之と同様の理に
 て吾人は常に理性と調和して活動する合理的自決的能力を備ふる有心的實在
 として神を知り、又他の者に屬せずして獨立し其能力は時間空間數量の爲めに限
 定せらるゝとなき絶對實在として神を知る、而して前に述ぶる所者は神の實在に
 關する積極的屬性なり後に述ぶる所は只是れ屬從と制限との否定たるに過ぎず
 して其積極的能力に關係を保つといふことの外は只だ一の虛形思想たるのみ、前
 者に關する吾人の知識は積極的なり、何となれば吾人は内省して吾人の内に理性

と自由意志と有心性との存するあるを知れば也、然るに後者に關する吾人の知識は消極的と稱すべきもの也、何となれば是れ只だ否定に由てのみ顯はされ得可ければ也、絶對者及び其能力に關する知識は積極的なれどもその形態上よりしてのみ云ふときは則ち消極的たるなり故に神の屬性は正當の分類法を施すときには積極的即ち靈性中に含蓄せる屬性となるべく又消極的即ち屬從と時間空間及び數量上の制限とを否定して以て釋定せられたる屬性となる可しされば絶對者なる神に關する吾人の知識は假令ひ不完全のものに相違なしと雖ども眞實にして積極的なる者なりとす、

然るにサー、ウヰリアム、ハミルトンは意見を異にして曰く無限性に關する吾人の知識は只だ否定に由てのみ説明され得るが故に總て神に關する吾人の知識は皆な否定的なり即ち語を易へて之を云へば則ち知識に非ざる也と、マレンブランシも亦た神の靈性に就て右と同様の斷案に歸着せり曰く「吾人は積極的に神の何ものたるやを説明するものとして之を靈と稱ふ可からず只神は物質に非ずとの意を以て之を靈と稱すべきのみ……神の眞の名稱は即ち在る者といふ事なり

他語を以て之を言へば則ち抑制なき實在、一切實在、無限にして普遍なるの實在なりと畢竟此の如き誤見の生ずるは實在の具備せる積極的能力と其制限との間の區別を看過するに原因するなり、よし屬從と制限とを全く拒否し去る事あるも毫も獨立無限なる其實在と實在の能力とを毀損する者に非ず、フニテロンは論じて曰く否定を含蓄するものは有限者なり肯定を含蓄するものは無限者なりと、トレンデレンブルグも亦た同様の論をなして曰く「絶對は否定的總念にあらず之に達するには否定的方法に由る而して吾人は之を限定する一切の物を取去るなり、然れども此總念其物は即ち積極的なり而して若し之を正當に思考するときは則ち一切總念中の最積極なる者なり、何となれば何者の之を制限するあらざれば也」と氏の言眞に然り人若し制限の存在を肯定するときは則ち此制限外に能力の存在するを否定する譯なり之に反して若し無制限を肯定するときは則ち隨つて制限を否定す可し而して此否定は是れ否定の否定にして取も直さず一切制限外に能力の存在するを肯定する者なり、されば靈魂不滅と云ふ事は其形態を以てするときは則ち否定的なりと雖ども事實の上に於ては決して終了するとなき生命

の肯定たるなり、獨立と云ふ事も亦其形態に於ては否定的なりと雖ども事實上に在ては則ち自存力の肯定なりとす、

絶對に關する知識は積極的なれども不完全なりとの説に對する異説中に往々含蓄さるゝ所の他の誤見は有限及び無限有制限及び無制限等の語を有心者としその制限若くは無制限を顯はす語たらしむるに在て存す不可議論者は絶對と云へる語を以て一切の定限と制限とを否定する單純の形容詞となさずして是れ即ち神其物なりと思惟する也抑も實在より抽象したる絶對に就ては吾人素より積極的概念を有せず只だ否定に由て之を解説するを得るのみ、されば若し此絶對性の抽象にして絶對實在に代用せらるゝが如きとあらば則ち絶對者の觀念中には只だ否定と矛盾の混淆あるのみ

上の反駁論たる又絶對は一切の矛盾なる屬性の主格たる者なりと云へる虚偽の觀念に對しても確實なる者なりさればヘーゲルは疑問を設けて曰はく一切の實在せる者否な禍惡すらも自己中に之を含有せざる所の絶對は是れ果して何の絶對ぞやと而してマンセル氏は此斷案を稱揚讚美して犯す可からざる推理より出

でたる者となせり然りと雖ども此推理たる是れ絶對は只だ萬物の總數なりと云へる虚妄の觀念に基けるものなり、されば此斷案を信受しながら尙ほ絶對の存在するを信ずる者は二箇の反對せる原理は二つながら同一物に就て眞なる能はずと云へる法則は獨り絶對には適用する能はずと斷定せざるを得ず、之に關してゼー、エス、ミル氏の推論實に當を得たり曰く此人々は背理なる續釋法に由りて絶對に關する總ての推理を撲滅するなりと、夫れ如の此き絶對は單に不可知的なるのみならず、亦た是れ矛盾の結成物のみ、故に吾人は斷定して云ふ、絶對者は人間にても將來天使にても此の世に於ても將來來世に於て幾千万歳を閱するも苟も有限の心意を有する者決して全く之を知る能はずと、然れども之と同時に又吾人は上と同じく確言す有限なる心意は神に關しては積極的にして眞實なる知識を有するを得べしと然り而して有限の靈は永へに、ますくよく神を識ることを得べきものなりとす、然るに基督教の記者にして往々不知不識の際純粹の不可識説を肯定するが如き言論を吐く者あり、リチャード、フーカーの言に曰く、假令ひ神を知るは是れ生命たり其名を稱するは是れ喜悅たりと雖ども然れども、吾人の至完

なる知識は吾人に知らしむるに吾人は實に有の儘に神を知らずといふこと若くは吾人は到底神を知る能はずといふとを以てす、されば吾人の至安なる能辨は緘黙に在り之に由て吾人は殊更らに告白するとを須めずして自然に神の榮光の説盡す可からざる事其大能の理會す可からざる事を告白するなりと此語や文理雅健語法雄麗にして誦す可く聽く可しと雖ども然れども是れ人間の神を有の儘に知る事を否定せし者たるに外ならず、基督教の詩歌と熱信とはタムソンの言ふ所に顯はれたり曰く

But I lose Myself in him, in light ineffable; Come then, expressive silence, muse his praise.

「余は説き盡す可からざる神の明光に逢ふて忽地喪心し口言はんと欲すれども云ふ能はず讚美の聲を揚げんと欲すれども亦た能はず」

然れども此言たる論理及び哲學上より云はるゝところに非ず又意識の中に神に關する知識なきを感ずるより發する語にも非ずして夙に得られたる神に關する知識の極點に至て發せしなり、既に啓示せられたる神の完全性を視るより出づる

の語なり、將た又已に啓示せられたる圓滿性を超へて説き盡す可からざる程の榮光及び赫奕の明光人目を眩する程の榮光を觀るところの最高至上なる熱信よりして流出せるの語なり、

五、有神説は絶對者の無制限なると同時に一切を制限することを論ずるもの也、若し絶對果して實在にして否定より成れる單純の抽象にあらざれば則ち其無制限たるの事實は即ち取も直さず其一切を制限する者たる所以なり、夫れ宇宙の根基として宇宙及び其中の一切の物を説明するを得可き絶對實在は宇宙内に包含せらるゝこと能はずして却て宇宙及び其中の一切の物を制限せざるを得ず而して有神説は此無制限にして一切を制限する實在が絶對的、有心的にして活動する理性たらざる可からざることを論定する也、何となれば此を他にしては復た宇宙一切の物を制限且つ之を説明すべきの絶對といふ積極的觀念を満足し得可きものあらざれば也、されば吾人の有する絶對者の觀念は即ち左の如し曰く宇宙に存在せしめたりし所の本源永遠の能力なり曰く宇宙の運行を維持し活動せしめ指導する所の遍滿なる能力なり曰く總ての局部なる勢力を全軀の目的を達するの

一事に屬從せしむる所の生命の源泉なり曰く宇宙が其原理、理法、理想及び目的を具へて永遠に又儀形的に其中に存在する所の永遠普遍の理性なり、曰く理性と相調和して常に進歩的に其永遠儀型的なる觀念を現實し又有限物中に其完全なる智慧と愛を現はす所の絶對意志なり、然れども是れ複位あるに非ずして只だ理性と意志とを兼ね智慧と愛とを以て生活し活動する唯た一の分つべからざる靈たる也、此の如くなるを以て有心説は思想を以て宇宙を曉知するを得可き所以を説明するものと謂はざるべからず何となれば宇宙なる者は元來儀型的思想の表現せる者なるを以て復た思想を以て之を理會するを得可く其中の事物をば智力上の反映を以て曉知するを得べきものとすれば也、是を以て宇宙は秩序的世界として存在し以て學術の組織に由りて知らるゝとを得べし、是を以て宇宙は漸次に高尚の目的を現實し而して吾人は宇宙が過去に於て經過し來れる進歩の級層を發見す、吾人は宇宙に勢力の世界あるを知る、而して強大の勢力は常に弱小の勢力を制せざる可からざるが故に此境實には適者生存優勝劣敗の法則行はるゝを見る、吾人は宇宙に又有機世界ありて動植物之に屬するを知る而して此中には

總ての部分は全軀の思想を現實する爲めに活動せざる可からずと云へる高等の法則ありて愛の法則と其性質を同くせる者あるを見る且つ又吾人は宇宙の中に有心的實在なる者ありて愛の法則の下に合理系を成して生棲するを見る、今夫れ吾人此等の機械、生命及び靈の奇絶なる數世界が一の合理的學術的及び調和的系統を成して以て相統一するを解釋せんと欲せば只此等のものが彼の絶對理性にして宇宙の根基となり維持力となりて以て萬物の中に活動し萬物を指揮す、神に對して共同の關係を有するてふことを以て之を爲し得べきのみ、且つや神によりて始めて彼の知識と實在、思想と事物、靈と物質、無限と有限の如き反對なる者は物靈兩系を成して一大總系を作り之によりて其總合統一を得以て漸次に有限實在中に眞理、法則、理想及び完全なる智慧と愛の目的を現實するを得るなり夫の人類に關する問題の説明をなすが如きも亦た只だ此に之れよる、蓋し人性の撞着反對なるとは古來哲學者と詩人との好問題たりしが夫のパスカルが之を描き出して淋漓たるは有名にして世人の普く知る所なり、ポープも亦た此事に關して歌ふて曰く、

Chaos of thought and passion all confused, Skill by himself abused or disabused;
 In doubt his mind or body to prefer, Born but to die and reasoning but to err;
 Created half to rise and half to fall, Great Lord of all things, yet a prey to all;
 Sole judge of truth, in endless error hurled, The glory, jest and riddle of the world.

而して此問題の解釋せらるゝ只だ吾人が下の如き事實を知るの時にあり即ち人類は物靈兩系に跨る者にして神は克く之を守衛し罪惡と肉慾の沈溺とより之を救出して神を信じ神と交通するの靈生を得せしめ又神の愛の生活と罪惡より人類を救出する神の鴻業とを分有するの地に達せしむといふことを信するとき在りとす、

不可議論に於ては絶對と有限との間に絶過す可からざる溝渠を作れり而して此溝渠は吾人得て之を見且つ其對岸に或物あるとを知る然れども思想は之を横絶し行きて其或物の性質の一斑をも窺ふに由なしと論ず凡神論に在ては獨一唯一の實體若くは一切若くは普遍者若くは或他の實體を用て此溝渠上に架するの橋梁となさんと欲すれども未だ曾て成就せしとあらず其故は有限没して絶對中に

入るか若くは絶對没して有限中に沈むか若くは折角構造せし橋梁も只是れ言語の橋梁に過ぎずして落成早々之を通過せんと試みたる第一先登の實體の爲めに忽地壊破し盡したるなどの事故の爲めに兩者間の溝渠は到底遂に通過す可からざる者と成り了れば也是に於てか神の靈は人の靈と相接する能はず人の靈は神の靈と相交はる能はず若し此兩者を統一して以て吾人の思想の中なる一切の需用を満足せしむるものは只だ絶對者を以て其一切の行爲と人間の意識とを透して自己と同種類なる人間の靈に自己を啓示し而して其啓示するや活動的理性永遠の靈として之を示す者なることを知るに在りとす、

六、無神説は其説自家撞着して毫も和合するとなく却て諸派共に或點に在ては有神説と相契合するところありとす亦た奇怪ならずや

抑も無神説は決して自家齊一の統一躰に非ず其四派は以て堅固なる方陣となりて有神説に抗敵するに足らず却て自家相互に墻に閱きて紛亂停止するときなし、甲派の金城と頼む斷言をば乙派之を拒絶し兩派の鐵壁と頼む論據は丁派之を嘲笑す故に其有神説と論鋒を交ゆるに當りてや其敵とする所の者は同一なるにも

拘はらず四派迭ひに遠慮なく武器を共通する能はざるの不便あり而して四派共に皆な宇宙に關して合理的説明をなす能はず又理性の必至終極なる疑問に關して満足の答解をなす能はずされば吾人は此四派に加ふるにハックスレイ氏が其著「生命之物理基礎」と稱する書中に於て自説に關してなしたる警戒の語を以てするを得なん曰く余は世人に警告せんと欲する所のものあり即ち余が此に述べし此數多の結論を確認するの人は是れ梯子の第一階に其足を置きつゝある者にして而して此梯子は通常人の思惟する所を以てすればヤコブの梯子とは全く相反せるものにて吾人を導きて天と反對の方角に至らしむるものなること是なりと然れども其眞理を誤り智性をも感性をも兩ながら満足する能はざるの一事に至ては四派の共に符を合せて相背かざる所なり嗚呼此四派や常に迭に他の謬妄を罵る然れども曾て孰れも眞理の正路を發見せるとなし

然るに奇怪なる事には無神説の數派は皆な或點に在て有神説と符合する所ある也
夫れコントの極端實驗説の如きは有神論と最も遠く隔離せる者なるが故に其中

に有神論と符合せるの旨趣を尋ねんと欲するが如きは是れ實に緣木求魚も皆ならざるならんとは萬人の預想する所ならん試に思へ此説に在ては人を以て宇宙を理論的若くは哲學的に組織するを得るものと許さず而して彼の原因と稱する所の者を研究する如きは第一原因にせよ結局原因にせよ到底人力の企及す可からざる者にして又人に取りては何の意味もなき者なりと思惟せしに非ずや然るに人世に宗教の必要なるを認めて之が爲めに禮拜の目的物を提出せし一事は實驗説全く能く有神説と相契合するなりコントの大著「實驗理學」中には成程上の如き認識の痕跡を見ずと雖ども此書を世に公にせし後氏がシロテルド、ドゾオー夫人を愛戀し後ち同夫人の死せしが爲め心中大に悲哀の情に堪へざるに及びて氏が天性中なる宗教的要素は勃然として醒覺し來り以て氏が意識中に固く其根を下したるが如し氏自ら語て曰く此無雙なる天使の爲めに余が道徳性は蘇生したりと氏は其後の著書に於て宗教を確認し人間の崇拜す可き大永遠者は人類なりと斷定し宗教に關する詳細儀式までも指定する所ありにきハックスレイ氏は之を稱して羅馬教より宗教を除き去れるものと謂へりフレデリック、ハリソン氏

の説明せる所に據れば此宗教に在ては人類中の最強最賢至貴至善なる者の理想を以て崇拜の目的者となすものなりされば實驗説が宗教の人類に必要なを認め之が目的物として提出するに宇宙若くは物質的の物を以てせず人間の本性と歴史に顯はれて至高の形狀を有する眞義完全善及び合理的の者を以てするは全く克く有神説と符合せるものなり而して此説の至大缺點と云ふ可きは此偉大なる目的者の單に抽象觀念たるに過ぎずして實在にあらざると殊に其崇拜者を知り愛し及び助くるとを得隨て其信仰希望及び愛の目的物となるに足らざるとにありとす、

不可識論者と一元論者は通常宗教を以て人類の本性となし之が爲めに想像に於てなりとも或崇拜の目的物を備ふるの必要を認識する點に於て有神説と契合す不可識論者及び一元論者は右の外尙ほ絶對者は宇宙の終極的根據となりて存在すと確認する上に於ても亦た有神論と其見を同くする也抑も形而下學が學術の目的に不満足なる者なりとてコントの實驗説を撥斥せし以來絶對者存在すとの知識を拒否する者は甚だ稀なるに至りたれば有神論者にして苟も現象説を採ら

ずして知識眞實説を抱くの士は皆な絶對者の存在するを許すと假定するも不可なることなかるべし、

一元論者は其凡神論者なると唯物論者なるとを問はず共に尙ほ一の有神説と其見解を同くする者あり即ち絶對者の性質如何と云ふ事に就て人は眞實積極なる知識を有し得べしと断定するとは是なり夫れ既に此事を承認せし上は之に次ぎて起る可き疑問は則ち絶對者は理性若くは靈なるや否と云ふ事なりとす、

而して此疑問に對しても亦た唯心的凡神論者は或る意味より云ふときは則ち絶對者の右の如き者なることを論じて以て有神論者と其意見を同くす例せばハルトマン氏は最も明白に最も強く確乎たる證據を擧げて以て絶對者の靈たる事を論じたりされば此派の凡神説に對しては右の疑問は遂に變じて下の如くなるべし曰く絶對理性若くは靈は果して意識を有する有心的の靈なるや否是なり

唯物説に至りては今日世に果して至嚴の意味に於て尙ほ唯物論者と稱すべき者ありとせば則ち無碍なる者存在して吾人は其性質を知る事を得べしとの事を認識する外には有神論と符合するの點なしとす博士ヘーゲル及び學士ヒュヒチル

の兩氏は恐らく近世の教育ある社會に於て唯物論者の代表者なる可しヘーゲル氏は氏が自ら稱して「學術的唯物説」と云ふ者を釋定したる後説をなして曰く「道義的若くは倫理的唯物説は……全く別物なり……是れ即ち人は感覺を最も優美に満足せしむ可き者を得るを目的とすべしと教ふるものに外ならず元來此説は純粹の物質的快樂のみ獨り人間に満足を與ふとの隱見に基因せる者なり……人生の眞價は物質的快樂にあらざりて道義的行爲に在り眞正の福祉は外界の事物を享有する事に頼らずして只だ道義的生活に在りとの深遠なる道理は倫理的唯物論者の夢想だもなさざる所なり」とランヂも亦た上と同様の區別を立て、曰く「若し實行的唯物説といふことにして人は物質的利得と快樂とを得んとする至大至強の傾向を固有すとの意ならしめば理論的唯物説は之に反するものなり何となれば精神の總ての作用は悉く知識に向ふて傾注せらるなり」と夫れ唯物説に於ては物質と物質力の外は何者も存在する事あらずと斷言するが故に論理上よりするときには右の如く覺官上の快樂と物質的所得に超絶せる高遠なる人生の目的を認許するの資格なき善なり然るに是等の人が此く辨明して

以て教育ある人の意識を表白せるものを見るに恰も是れ不知不識の間に唯物説を拒絶し之を以て人生の高等なる性質を満足せしむるの力なき者と爲し又不知不識の間に覺官的快樂及び物質的利得よりも迥かに優れる者を渴望して止まざる高等なる靈能の存在せるとを顯はすものにして隨て人類に充分の解釋を與ふるには人を以て絶對の靈たる神に關係せる靈と見做してこそ始めて之を能くすべきことを確證する者なりとす、正當に唯物論者と稱す可き者と然らざる者とを問はず神に對するの信念を喪盡したるの人と雖とも其心に存して高尚なる生活を爲さしむる此大感動力の漸次に滅盡し去るを見ては悲憂の情禁し難く、其情や外に顯はれて以て右と同様の證據を供ふ、而して此等の論者が心身の最も健全なる時に際しては此大感動力自然と其勢力を回復し來ると言ふあるも亦た是れ右と同様の證據たらずんばあらず、テイソナル氏が言證するところの如きは即ち是なり、曰く「基督教徒の著書に就て判定を下さんに其精神の強健にして確信の盛なる時と荏弱にして疑念百出する時との二様の時期あるを明知すべし、而して余が如き人も亦た基督教徒と同一にて法と時とに於て同様の變化を有するを免れず

……余が數年に亘りて自ら觀察せし所に因て言ふときは此教義(唯物論的無神説)の余が心中に萌起し來るは心意の明白健全なる時に非ず而して一たび強健なる思想の前に出づるときは此教義は人類の四圍に充塞し且人類も亦た之が一部を形成せる彼の秘義の解説を爲し得ざるものとして毎に雲散霧消せざるはあらざる。

然り而して有神論は苟も無神説の諸派中若くは人間思想の内に含有せる宗教的真理をば悉皆之を採取し其缺けたる所をば之を補充し而して獨り能く宇宙に關する合理的にして満足なる説明を爲すもの也。

七、最後に尙ほ一の論す可きものあり凡神論の謬見にして或る有神論者等が該論の根據を擴張し且つ強固にする者なりと思惟して採用せんと欲する所の者ありと雖ども却て是れ有神説の思想をして紛亂薄弱ならしむるものなりと云ふ事是れなり蓋し是等の總念中に含有する一切の真理は有神説に在ては凡神論の謬見に落るの恐なくして而かも一層明白に一層正當に一層有力に之を説示することを得るなり

カント曰く、實體オブジェクトの法類カテゴリーに關して理性は逆歩的に有碍よりして推論し上る可きの根據を有せず其故は偶有性(資性)が一の實體に固着せる限りは是れ互に相對立する者にして連鎖を形成する者にあらざれば也而して是等資性は實體に附屬せしむべきものに非ずして實體其物の存在の法たる也故に吾人が一の結果に對する原因の連鎖あるを發見し之に由て有碍的結果より礙碍するところの原因に遡り以て理性の問題を答解するとを得るは只だ原因性の法類に頼るのみと夫れ有神説が解釋せざる可からざる理性の問題は實體に關するものにはあらずして只だ原因、理法、及び目的に關するもの也、有心的及び非有心的たる箇々有限なる作用者の相互の干渉と其動論的及び合理的系統を成して相統一することゝに關するものなり抑も凡神説の根本たる至要の總念は宇宙は只だ一個の實體あるのみと云ふに在り之に附するに諸種の名を以てすと雖ども歸する所は只だ右の如くなるに過ぎず此思想已に業に有神説の至要根本の總念と柄鑿相容れず隨て凡神説に存する此根元の妄斷よりして有神説と兩立せざる幾多の推論を生出する一も怪むに足らざるなり

ヘーゲル曰く人若し事物の眞實なることを考察するときは則ち其己の箇存質を棄て理性を以て一個特別の有心者たる自己固有の者と思惟するを止め而して自己を普遍的意識なりと考へざるべからず何となれば理性は是れ神の靈にして只だ右の方法に頼て人は能く宇宙に顯はるゝ所の反對と撞着とを逃るゝとを得べければ也と夫れ此の如き議論なるものは唯一個の實在ありて人は只だ此普遍的實躰の方法に過ぎずと爲し素より有心的の實在に非ずして再び絶對中に吸收せらる可き者と考ふる説より來る必然の推論なりとす然れども有神論は之に異なりて神を知り神の律法の臣屬となり神の愛の目的者となり以て神と交通して生活する箇存的の有心者たることを確認す故に有神論に隨ふときは則ち人類は益々神に近接するに隨ふて益々明白に神の高大なる完美の徳を見愈々其律法の廣く潔く破る可からざるを見其救拯の愛の偉大なるを見る可く且つ益々自己の有心性の偉大にして高貴なるを知るに隨ひて其有心性は彌々益々其崇高なる能力を啓示し彌々益々其有心者たるの責任と義務と可能性とを悟る可し

ヘーゲル又曰く神を以て無上實在となすは是れ取も直さず神を空乏にするもの

也と然り凡神論の推理は必ず此の如き點に歸着せざるを得ず何となれば凡神論に在ては神を以て唯一實在者となすが故に神は無上實在者となる能はず若し果して無上實在となすときは則ち是れ他の實在よりして神を區別する道理なれば也然れども有神論の説く所に從へば則ち神は一切有限者の存在の根據として總て有限實在より區別せらるゝもの也即ち神は絶對の理性として無上實在なり總ての眞理及び理法は永遠に神の中に存し神は一切の眞理理法權力義務に對する永遠の根據たる也

ヘーゲル又曰く今日の人は神を以て星晨の外に在りて吾人を距ると極めて遙遠なる無限の靈となしたり而して人間の知覺をば有限性なる虚靈若くは只だ形態と現象のみの映射する鏡面となしたりと然れども此論大に誤れり何となれば吾人は茲に獨一唯一の實在と星晨以外に隔離する神とを比較すべきものにあらずればなり有神の觀念に從ふて之を言へば神は決して吾人各自より遠きものにあらず吾人は神を知り神を信じ神と交り神に事ふ而して吾人が斯くなすは凡神論の云ふが如く吾人自ら絶對の中に寂滅し去るにあらずして神と相對して之に接

するものなり神の兒子として神に受けらるものなり神と交り神に事へて以て人の有心性を大にするものなり將たニールが言ふ如く吾儕の精神と神の精神と相接して之を知ることにてあるなり

ヘーゲル云ふ單に神に關する歴史的知識のみを有して自から經驗して神を知るに至らざる人は恰も大商家の簿記係の如し一切取引上の勘定をば能く之をなせども曾て自ら商業に關係せざるなりと蓋し此區別たる誠に重要にして此比喻の實に頗る適切なるを覺ゆ然れども凡神論者は自己を以て單に絕對者の方法となし結局自ら其出來りし所なる凡有の中に己の箇存的實在を没し去らざる可からざるが故にヘーゲルの嘲笑を甘受す可き種類の人物は即ち彼の絕對を知れども自己は之に對して何の利害をも有せざる凡神論者にてこそあれ凡ての幸福の惠與者として神を知り神の恩寵を享け敬ひて之に奉事し其充ち足れる徳を豊かに受け且爾は吾父なり我神また我救の盤なりと言ひ得べく神と交りて以て靈魂の不滅を望む有論神者の受くべきものにあらざるなり

ハルトマン難して曰く神は聖なる者と稱せらるゝ能はず何となれば彼は道義法

を以て有限的有心者と自己との關係を整理することなければなり神は道義法の原因なれば素より其保持者に相違なし然れども神は決して此道義法の命ずる所に従ふて聖となる者に非ず只夫れ神は法律の制定者として其私情私意を逞ふし以て律法の背後に立つとなく却て其私意を道義的世界秩序に顯はすとを明知し又道義的世界秩序なるものは其人に關係ある限り神と同一視せらるゝを得可しとの事明白となるに至らば茲に始めて道義的世界秩序の聖性を移して以て之と同一なる神に歸する事を得可しと然れども此の論たる誤れり何となれば是れ事物の無覺的本性たる神と私情私意を挿みて以て律法の背面に立ち隨て律法を變轉常なき意志より出たる擅制の命令たらしむるに至るの神とを比較するものなればなり然るに有神説に於ては之に異なりて神を以て一切の眞理と理法が表樣的に及び永遠的に存する所の絕對理性となす而して是等の永遠の原理と理法とは則ち宇宙の本性なりされば物質力にもあれ靈能にもあれ人間の意志力にもあれ神の能力にもあれ何かなる能力たりとも決して是等を壊毀變更する能はず而して神の意志は自然に且自由に是等の眞理と理法と合理的理想と目的と永

遠に相調和する也而して是等の原理と進歩的に且つ息むことなくして現實する所の宇宙は取も直さず永遠完全なる理性の進歩的現實たる也
 此に又異論者あり其言に曰く有神論者は理性意志及び其他の屬性を神に歸して以て神を二様若くは數様に分派せる者と考と然れども有神論の言ふ所は全く之に異なりて只だ是れ獨一絶對の實在者が諸種の形狀にて啓示せられたるに附したる數様の名稱たるのみ吾人總ての眞理理想目的及び之と相契合する總て物の備型等が絶對者の中に永遠に存するものたることを考ふるときは則ち神を稱して理性と云ふ又總ての完全と善とを成就せんが爲めに右の理法と眞理に循ふて活動する神に就て考る時は則ち之を意志若くは能力と稱す而して此理性と意志とが永遠に相調和して以て啓示するところの神の品性に關して云ふときは則ち之を稱して愛若くは智慧と云ふ也又自己の單一性と同一性とを自覺する神に就て考ふるときは則ち之を有心者と稱す又若し獨立にして時間空間及び數量の爲めに制限せらるゝ事なき點に就て考ふるときは則ち之を絶對若くは無限と稱する也若し又宇宙の創造者保持者なりとの點に關して云ふときは則ち之を

凡碍者若くは第一原因と稱する也然れども右諸種の形狀にて存在する獨一の實在者として考ふるときは則ち吾人之を稱して永遠の靈なる神と云ふ
 有神論の説く如く神は是れ一切有限なる實在者能力及び合理的智能の根元なり夫れ理性は一般普遍ならざる可からず眞と善と完全及び善の標準とは何れの處何れの時に於ても常に同一ならざる可からず宇宙を整理するの能力は獨一絶對理性の制定せる一般の原理と理法と理想と目的とに遵ふて之を整理するものならざる可からず然らざれば則ち合理的結論を爲すと能はざる可く學術的觀察も信用を措くに足らざる可く學術的系統も確定せらるゝに由なく學術は瓦壞して一切の知識は悉く解體虚妄の印象となりて碎粉し畢る可きなり以是觀之神の存在を承認するとは總ての實在の眞實なるものに對して至要なるのみならず一切の知識の眞實なることに對しても亦た極めて必要のものたらざればあらずされば吾人は思想の中より神を拒絶し去る能はず若し吾人の思念中に顯然若くは陰然に神の存在に關する信仰を抱持せざるときは則ち一切の推理的思想は忽地空虚なる者となり事理を結論して知識を得ること能はざるに至る可し若し思想にし

て果して虚無たるに過ぎざれば則ち總て其創作する所結論する處も亦た皆な虚無たらざるを得ざるべし、

若し神は非限定的にして虚無なりと自定し而して神は人に至りて始めて意識を有するに至る者なりと自定せば則ち是れ神を以て人間を創造するものとなさずして却て人間を以て神を創造する者となすなり、傳へ云ふゼー、ヂーン、フヒテは諸生に向て、吾儕明日神を創造す可しと語れりと云ふ若し外界なる者を以て神を離れ若くは大物質を離れ若くは純一なる星霧的物質を離れ若くは無形無動の浮動躰を離れ若くは其他尙ほ一層細微なる物質即ち宇宙の本質たる原理と法則とを離れて存在する者なりと自定し來るときは則ち神は自己を離れて存在せる此實躰の爲めに限局せらるべく而して是等の外部獨立なる阻礙の下に在りて其爲し得可き丈けの手段を盡し以て諸の世界を形成する一個の小造物者工人と成畢るべきのみ是に於てか宇宙の終局基本は又非有心的にして無覺なる者と化し去らざるを得ず

上に記したる諸種の自定により神に就ての人は觀念を玩弄し自ら矛盾を感せず

して以て娛樂を買ふとを得べし彼れは自ら其心に問ふて言ふとを得ん曰く若し神にして現在にすものと異なれるか若しくは神にして存在せずとせば果して如何と而して彼は自ら疑問に明答し得べしと考ふることもあるべし、彼れは神を以て非存在なりと考へ然も尙ほ宇宙は今の儘の本質と理法とを具へて存在し而して自己も亦た存在して今の儘なる理性の統制、原理の支配を受けて思考し居ることを想像し得べし、彼は謂ふ可し神の非存在なるとは我が合理性に對して果して何の差異を生ず可き我が合理的本性も宇宙の本性も皆な神に屬するとなきにあらずやと彼は却て自ら神の上に位して其思想に於て神を宇宙より驅逐し得可し、彼の知識と合理性とに對して神は何の必要もあらざる可し或は彼れは其心意の一隅に神を宿し小胆にも言をなして曰ふべし神に關して幾分の知識を有するは出來得可き事なり將た若し知識を有するとは能はずとするも尠なくも模糊たる信仰をば有し得べしと夫れ斯の如く神に關する知識は餘程疑はしく之を是認しつゝ而かも一方に於ては縦ひ神なきも宇宙に關する知識は眞實疑ふ可きなり且つ此知識は疑ふ可からざる者として永存す可しとも考へ得べし是に於て乎此の

如き人物に在ては宗教は其生命の一隅若くは其禮拜を行ふ密室中に屏居して喘々たる微息を保て僅かに生存し而かも又生命の大部分と利益とは能く全く宗教の外に在ることを得べし然り而して其神に關する思想と宗教とは兩つなから虚無非實の姿に陥るに至る

然るに神に關して常に此の如き思想を懐抱するの人にして一朝忽ち神の絶對理性なると人の理性を破壊せざる以上は神を絶對理性にあらざと考ふる能はざると若し又神を以て非存在となすときは則ち宇宙は其本性、合理的原理及び理法理想及び善とを携へて神と共に消滅し而して理性も睿智的思想も皆な悉く雲散霧消す可しとの道理をば悟るとを得たらんには則ち其人の神に關する知識は其人が從來夢想だもなす能はざりし眞實の境雄大の地に達すべく勢力を得るなる可し是に於てか小心翼翼として其知識の一隅に神に關する信仰を宿在せしめんと辨疏するが如き醜態を去り斷乎として自己の合理性及び合理的智能が最上理性たる神の存在を基礎として立てるを知るべし神を以て現存の有様より異なりと思ひ若くは非存在物など思考して以て自ら樂むの惡習を去り却て總て合理

的智能は悉く神の存在なる信仰を基礎として立つことを知る可く又若し神にして存在せず若くは今吾人の考ふるより別の有様にて存在する者とせば則ち總て合理的思想及び知識は悉く消盡して合理と非合理との差別なきに至り而して宇宙と總て其原理、理法、完全及び價値は悉く霧消して跡なきに至るを見ん是に於てか神に關する知識は知識の一隅に屏居して僅に其餘喘を保つが如きとなく疑駭の中に定言せらるが如きとなく總て合理的考察の基礎となり總て合理的知能の大元氣維持力となる也而して宗教も亦た従前の如く人心の一隅に割據するが如きとなく人の全生を支配し其一切の活力を感起し高尚にし以て人生の人生たる價値を顯はさしむ人一たび此境に到るときは乃ち初めて神の人を去る遠からずして吾人は之に由て生き動き又存在することを悟に至るべし抑も人間が自己の限界を意識するは是れ取も直さず絶對を意識する所以なり人間が常に其籠の戸を打つて止まざるは其羽翼を備へて籠外なる天空に冲ることを得るが故也今夫れ禽獸は其限界の下に在りて毫も不快の念を發せず悠々として其本能に依從し自ら其限界を有するをを意識せず何となれば禽獸の限界は完

全にして以て他の世界を窺知すべき能力あらざればなり蓋し完全なる限界は總て制限に關する意識を排斥するもの也若し夫れ人の限界に至ては然らず人の限界に關する意識は是れ一の保存的能力に關する意識にして此能力は其限界を取るときは則ち直ちに自己所屬の限界を現出する者なりとす夫れ人間は獨り有るのみならず安んずる能はずして絶對者を知り之と交通し且つ一切の實態をして之と相關係せしめ之を統一して以て其實態を知らんと熱望するものなり夫れ人間の實在の高大なるを顯はし且一個人の行爲と人類の歴史とに於て偉績芳烈の源泉たりしものは絶對に對するこの希望なり感覺と物質との制限を超越せんとする此奮勵なり永遠の靈と交通せんとする此羨慕の念なり、

吾人は既に人の本性中に自然に發現し而して其の境遇の感化を受けたる神性に於ける信仰に就て考察し以て神の觀念の起原を斷定したりき吾人は此の自發的信仰は思想によりて確定せられざる可からざる所以をも覺れり而して此の確定によりて實に神の存在する所以の證明を得たり即ち吾人は此信仰の確定をば直接に直覺的理性に就て求め而して絶對者の存在すると云ふとは是れ理性の原理

思想の必然法なることを明知したりき是によりて吾人は人の本性に根し人の心裡に自然に生じ且つ人の直覺力に發するものにして神に於ける信仰の二脚とも謂ふべきものを得たり一は即ち經驗より起るところの神に於ける本原信仰にして一は合理的直覺性より生ずるところのものにして絶對者存在すとの信仰是なり吾人は尙ほ一層進んで此絶對者は如何なる者ならざる可からざるか又は吾人の崇拜す可きものは神たらざるべからざるか將た又吾人が崇拜する神は是れ果して理性が啓示する所の絶對者なるかを考究せんと欲す

第三編

神は物界の本性と進路及び人間の本性と歴史とにより、有心的の靈として宇宙に啓示せらる、

苟くも汝物の全豹を知らんと欲せば、其局部を究めよ、何となれば夫の大なる者を形成するものは、皆小なるものの中に映じてあればなり、——ゴエテ
現象の本質的原因は到底吾人の解釋し得べからざる秘義なり、然れども吾人若し強て之を解釋せんと欲せば、現象なるものを以て、其内に宿在するか若くは其外に宿在するところの意志より發生せるものと爲すの臆説より満足なるものなしと謂はざるを得ず、苟くも形而上學及び形而下學より胚胎し來れる夫の自得の氣風なかりせば、古來何れの無神論者と雖も、此かる主題に對する右の直截なる解釋法を捨て、其抱持せる空漠の臆説を眞確のものなりと信すべしとは、吾人如何にしても思惟する能はざるなり、且つ此れ實に世人が絶對の眞理に對する一切の探究の全く無稽、無益の業たることを了解するに至るまで、人の理性を満足せしめたる唯

一の方法にてありしなり、如何にも物界の秩序は頗る不完全なるに相違なし、然れども吾人情々其生果を察するに、物界を以て不明なる機械と見做すの臆説よりも、之を以て睿智なる意志と爲すの臆説と正に一層好く符合するを見ずんばならず、吾人を以て之を觀るに、無神説を固持して動かさるの士は、尤も非論理的の神學者なりと謂はざるを得ず、何となれば彼等は此疑問を解釋せんと務めつゝも、之を解釋すべき唯一至當の方法を棄却すればなり、——ユムト、

何物を問はず、何れの處を論せず、物界のものとは超物的のものに基し且つ究極すといふことを信するは、餘り思想を費さずとも、何人も能く爲し得るところなく、物界に於ける各元子は今日に至るも尙其超物的の起原及び實在を説教す、——ハルトマン

物界は恰も彩色を施せる靈の目錄表の如し、——ノヴァリ
人は人のいろ、はなり、人もし先づ人を綴るにあらざれば、決して正しく神を讀むこと能はず、——ショーレス

靈界などか人を妨ぐるの關屋を有せん、汝が思の閉ちられたればなり、汝が情の死

たればなり、起きよ、聖者、疲れず、倦まずして、汝が俗胸を曙の赤き光輝に浴はしめよ、

第十一章

神は宇宙が因て發生し、依て樹立するの勢力として宇宙に啓示せらる、

有神説は絶対者は有心的の神、永遠の靈として宇宙即ち物形系及び道義系即ち靈系の兩系統中に啓示せらると説く、蓋し此啓示に三種あり、神は宇宙が因て發生し、依て樹立するところの勢力として、又其勢力は絶へず宇宙各處に表顯せらるゝところの第一原因として、宇宙に行動する原因力の中に啓示せらる、

神は物界の本性及び進路によりて有心的の靈として宇宙に啓示せらる、且つ神は人間の本性及び歴史によりて有心的の靈として宇宙に啓示せらる、蓋し神が自己に關して宇宙の中に爲せる此等三様の啓示は、吾人が本編三章に於て論述せんと欲する主題にてあるなり、世人は通常右三様の證據を稱して議論と謂ふ、然れども實際は寧ろ宇宙に於ける

絶對者の啓示を描寫通譯するものに外ならず、若し此等の證據にして多少の議論を含蓄するとせば、是れ右の啓示よりして絶對者は實際如何なるものとして啓示せられたるやを推測せるものに外ならずとす、

世の論者此等の議論に反對するに方りて、動もすれば之を以て絶對者の存在に對する證據の如くに見做して喋々すれども、是れ實に本證の眞趣を誤解せるものにして、折角骨折りて論破せるところは、本證に於て毫も證明せんと欲するの點にあらざるなり、吾人は既に已に絶對者の存在することを知る、是れ一切の證明、一切の思考を支配する理性必然の原理、若くは思想の理法なり、

吾人は既に右の點を自定するものなるが故に、今より考察せんと欲する三種の證據に於ては、絶對者の存在を證明せんと欲するものにあらずして、吾人の觀察し能ふ限り宇宙を研究し、以て到るところ其中に表現せられたる絶對者に就て、如何なることを知り得べきやを確定せんと欲するものなり、然り而して有神説は絶對者が其永遠の本質に於ては不變に、萬物を創生して、永恒に行動する第一原因、及び普遍、無上の理性たるの表顯を宇宙に發見することを主張す、即ち之を以て實在勢力、

理性の三者を合一せる無碍、不變の至上實在者、永遠の靈、有心的の神なりと主張するものなり、吾人請ふ是より宇宙を研究して、以て此有神説の當否を究めん、此三種の證據の第一を宇宙論と稱す、

蓋し此證據に於ては、單に宇宙を以て存在するものと見做し、且つ勢力即ち原因力を表現するものと見做すまでにして、毫も宇宙に合理者の存在することに關係せず、若くは合理的の指導及び意匠あることに頓着せざるものなりとす、而して有神論者が之によりて確定せんと欲するところは、絶對者が第一原因として宇宙に啓示せられ、絶へず宇宙に行動する諸原因力の絶對、無碍なる源泉として啓示せられ、宇宙が因て發生し、依て以て樹立するの超越力として啓示せらるると云ふとに在り、故に本論は絶對者の性質に關する全軀の證據にあらずして、僅に其知識に到達する一階梯なりと知るべし、本論の證明是に過ぎずとて、本論を難するものゝ如きは、全く本論の性質を誤解するものなりとす、

さて本證を探究するに方りて、其主眼たる點は、果して絶對者が宇宙に超越せる第一原因なるや、將た單に宇宙と同一物なるやを確定するに在りとす、

一元説は、其凡神のなるを、唯物的なるを問はず、共に絶対者の宇宙と同一物なるを説き、隨て毫も超越原因の探究を爲すべき謂はれなしと主張するものなるが、一切の一元説中に思想及び方法の過誤、困難及び撞着の含蓄せらるゝことは、吾人の既に論示せしところなり、有神説は正に之に反して、吾人の知り得る限り、宇宙は諸種の一元説と相契合せざるものなるを説き、宇宙の本質は有限、有碍、附屬的なるが故に、宇宙其物は絶対者にあらずと主張し、既に然るが故に、宇宙は自己以外に存在し、自己に超越せる原因力に附屬せるものならざるべからずと論ずるものなりとす、然り而して宇宙論は吾人の知り得る限り、宇宙を探究して、以て此論據を確定するものに外ならず、故に夫のライブニツが本論を稱して世界の有碍性に基ける議論と謂ひしは、眞に其當を得たるものなり、吾人は本論によりて宇宙の常に有碍にして附屬的なることを論示し、隨て宇宙は一の結果なることを證明せざるべからず、果して之を證明し得ば、吾人は勢ひ宇宙其者の永遠、自存、無碍なる存在者にあらずして、宇宙は宇宙に超越し、宇宙が依りて樹立する絶対者の勢力を啓示するものなることを信せざるを得ざるべきなり、

論者難して曰く、宇宙の結果たることを證明せんと欲せば、其元始を有せしことを證明せざるべからずと、而して揚々論して曰く、是れ豈に爲し得べきとならんやと、固より宇宙の元始を有せしとを歴史的證據によりて證明するは、爲し得べからざるとなり、然れども試に思へ、吾人一個の物象、一個の配置、一個の勢力平均を見るときは、縦ひ其原因作用を觀察し得ざりしとて、之が一個の結果たることを知り得べきにあらずや、學術上未知原因の發見は多く、物の原因は此方法によりて發見し得べしとの自定に基けるものにあらざるはなし、此と同一の方法によりて吾人は宇宙の一個の結果たることを知り得るなり、吾人は宇宙が其本質上、争ふべからざる有限、附屬の徴を具ふるを見るが故に、其一個の結果たることを知る、此事實たる、學術の探究愈其精を加ふるほど、愈明白に赴きて止まざるなり、
扱今より本論に移らん、第一、吾人單に宇宙に散在離存せる無數の有限力を認むるのみにては、到底宇宙を學術的に曉得すること能はざるなり、凡の潛勢力及び活動力の全計は常に同一なりとの理を基礎として、茲に初めて學術の成立するをみん、宇宙の諸勢力は永久に亘りて増減することを得ず、而して吾人の觀察し得べき一

切の特殊にして可測すべき諸勢力となりて宇宙に啓示せらる、形而下學は理性の自明原理若くは思想の理法として此理を自定し、宇宙に關する學術的知識に欠くべからざるものとして之を承認す、見るべし、學術は宇宙を探究して、一切の無數なる實在者及び勢力を包有せる宇宙は、統一せる一個の動勢系を成すこと、宇宙は一個の結果なること、及び宇宙は唯一原因の結果なることを發見せるを、是を以て見れば、宇宙論に於て要求する第一點は、既に學術上確定せられたるものと謂はざるべからず、

且つ此勢力が單に宇宙に行動する一切の有限勢力の全計にあらざるも、亦明けし、何となれば此かる思想は、此合計力が一切の有限勢力より發生し、又之に賴て立つとの意を含むものなればなり、果して此勢力にして右の思想の必然理法の下に、學術の要求に應すべきものなりとせば、此勢力は有限勢力の先行にして又其原因たらざるべからず、故に其勢力たる、宇宙の絶對、超越なる原因にして、宇宙の因て發生し來れる勢力たらざるべからざるなり、然り而して此勢力若くは原因たる、有限なると能はず、苟くも有限にして可測すべ

き勢力は、必ず増減するとなかるべからず、然れども宇宙の因て發生し、宇宙一切の有限勢力中に表現せられ、而して増減すると能はざる唯一の勢力なる此勢力は、必ず絶對、超越の勢力ならざるべからず、

且つ夫れ既に勢力あれば必ず實在者なかるべからず、吾人は實在者より出づるものとしての外、勢力なるものを思念すること能はず、吾人にして果して右の勢力を實在として思念せんか、是れ唯た該勢力に實体的實在者の要性を移して、以て自ら誤るに過ぎざるなり、

此の如く思考し來るときは、形而下學は吾人を導て、哲學及び神學に於て承認せらるると同一なる思想必然の理法に到達せしむるものと謂ふべし、即ち宇宙の因て發生し來る勢力は、宇宙に超越し、又其中に啓示せらるゝ絶對力なりとの理を吾人に示すものなりとす、

加之學術は宇宙の單に統一せる動勢系なることを發見するのみならずして、其統一せる合理系なることを發見す、蓋し宇宙は徹頭徹尾道理に合せる宇宙にして、合理者の合理力發達し、合理者にして宇宙を觀察するの機會を有する限り、學術的に

知るを得べきものなりとの自定は、一切學術の基礎、根底にして、此自定たる、學術的探究の全程を通して證定せらるゝところなりとす、然り而して此自定たる、何れの處にも同一にして、何れの處にも活動、指導するところの絶対普遍なる理性存在すとの意を含蓄するものなり、此點に於ても亦た學術は統一せる宇宙を以て、宇宙其物に超越せる原因に附屬する一個の結果と爲すことを見るべし、吾人の此點に於ける議論は茲に其歩を止めざるを得ず、何となれば是れ本論の範圍外に出づればなり、

然れども吾人は尙ほ道義系に關して茲に一言すべきとあり、人は自ら其理性、自由を具ふるを知ると同時に、又其自覺によりて自己の有限、有碍にして、他に依頼して立つことを知ると、即ち是れなり、人は宇宙の究竟基礎が人の中に存せざるを知る、蓋し人が道義的義務の意義を有するは、即ち人間の上に位し、絶対、無上なる理性の中に永遠に存する一個の理法ありとの意識を含蓄するものと謂はざるべからず、故に宇宙にして果して自己に關する幾何の意識を有するものとせば、其意識たる必ず有限、附屬の意識にして、又宇宙に超越し、且つ絶対理性の中に永遠に存在して

初めて意味を有すべき一個の理法の意識ならざるべからざるなり、

第二、物形的宇宙は其本質に於て既に有限、有碍なり、吾人の之を知るには、必しも吾人の觀察を其終極點に及ぼし、吾人の眼を以て其究竟の境界を探るを要せず、有限性と有碍性とは物質の本質なり、何となれば物質とは本質上空間に包含せられ、空間を占有するもの、謂にして、其他の點に於ても其本質上附屬、有限なればなり、物質は其物體たるを分子たるを問はず、將た時間、空間の中に存在する如何なる形狀の物質たるを論せず、其本質上悉く有限、有碍なるか故に、決して之を以て絶対、無碍なる實在者と爲すを得ざるなり、

唯物論者は宇宙の物質及び勢力を以て一定の容量を有するものと爲し、吾人の思想を以て之を測量し得べしと説く、蓋し是れ本質上有限なる物質に關して、止む可からざるの思想なり、若し吾人にして宇宙が因て以て發生し、依て以て樹立するの勢力にして、宇宙其の物と同一なりとのことを自定するとせんか、此の勢力は一個の有限なる勢力と爲り、了らざるを得ず、果して然らば宇宙は自己を構造し、自己の勢力を産生し、永遠的作工業の爲めに其の勢力を消費し、而して絶へず其の消費せ

し、勢力を補ふ一個の機械と爲るべし、是れ頑冥不靈なる一個の機械が永恒に亘りて自ら自己の運動を起し得ると云ふものにして、妄も亦甚しと謂はざるべからず、規模の大小異なりと雖も、苟くも機械たる以上は、到底此かることあるべきの理なし、

故に又見るべし、宇宙を生起し、宇宙を維持するの原因力は、宇宙其物と同一なるべからずして、之に超越せるものならざるべからずとは、是れ學術の發見するところなるを、吾人にして若し物質なるもの、本質の意味を變し、之を以て絶對者の資性を稟有するものと自定するに非るよりは、宇宙の原因力と宇宙とを同一視するが如き、到底吾人の思考し能はさるところなりとす、

第三、吾人宇宙一切の部分を見るも、其一切の状態を見るも、實に一個の結果なることを發見す、

宇宙は大成せられ且つ靜息せるものなり、物質は惰性を具へて動かさることありなど考へたる舊思想より見るときは、右の理甚だ明白ならず、頑然不變の物體は吾人の心意を逆歩せしめて以て原因に違せしむるを得ず、然れども今日學術は宇

宙間一物と雖ども不動、靜止の状態に在るものなきを發見せり、何れの處、何れの時を問はず、最大なる物體より至微なる分子に至るまで、何物を論せず、皆激烈に運動し、勢力を發射し、又勢力を收受して止むことなく、宇宙何れの處を見るも將た宇宙の何物を究むるも、其物たる一として先在勢力の結果、新状態の原因たるを發見せざるとなし、吾人は既に此かる原因作用の連鎖を發見す、然るに之を生起するものもなく、之が中に永存し、之が中に表現せらるるもの一もなしとは、吾人の到底思考し得べからざることなり、

故を以て吾人形而下宇宙を説明せんと欲せば、其如何なる状態に在るを問はず、必ず、一個の先行状態に溯らざるを得ず、形而下宇宙は限定の状態に在るが故に、常に一個の結果として存す、故にカントは曰く、物質をして實に物質たらしむる一切の限定は結果なり、而して結果は原因を有し、且つ隨て常に他より由來せしものたさるべからざるが故に、物質なる總念は、一切由來系の原理たる其性質上よりして、到底必然實在の概念と契合することを得ずと、

且つ、學術は形而下の原因を探究するに方り、物質の總念を去りて、絶へず物質の本

質觀念を棄却するに近き原因を承認するが如し、故に物體を説明するが爲めには分子なるものを認め、分子を説明するに元子を認め、精氣イキを説明するに第二種の元子を認め、元子を説明するに方りて、元子其自身を以て一個の複雑なる系統と假定し、之を組織する諸種の部分ありて、運動し、且つ互に相交渉するものなるべしと想像す、此を以て見れば、學術は物質に於ける各種の限定状態の形而下原因を發見せんとするに方り、形而下の結果は究竟形而下の原因によりて説明すると能はざるを證明するものゝ如く、漸々物形宇宙に超越する原因を探究せんが爲め、物形宇宙の外に驅逐せらるゝものゝ如し、

吾人若し分子及び究竟元子迄溯りて、以て吾人の探究を物質の内部の本質に迄て及ぼすときは、此等の分子及び元子が物界一切の變化を経て毫も變化することなく、以て存在することを假定せざるべからざるに相違なし、然れどもクラーク、マクスウェル氏は實に此事實を以て此等の分子、元子が物界の産生物にあらざることとを證明するものと思考せり、氏曰く、分子の形成は吾人が現に生活する物界の理法に屬せず、此事たる吾人の知り得る限り、今日若くは地球、太陽星辰の形成せられし

以來、此等の世界に生起せざる一種の作用なり、此事たる地球若くは大陽系の形成せられたる時期に歸すべきものにあらずして、物界現存の秩序の確定せられたる時期に屬すべきものなり、而して皆に此等の世界及び系統のみならず、物界現存の秩序にして瓦解するにあらざるよりは、吾人は毫も右と同種なる作用の物界に生起すべきを思考すると能はざるなりと、

蓋し元子は空間によりて制限せられ、且つ其數無量なるが故に、之を以て永遠に存在するものと思考するを以て矛盾の思想と見做すもの、世其人に乏からざるが如し、教授マクスウェルは以上の説に附言して、元子の互に相齊しきことを論じて曰く、同一種類の元子ありて其數計り知り難し、而して此等の元子が各一定の分量を有して變せざるは、到底現今行動するところの運用によりて整理せられたるものにはあらず、此等の元子たる、物形上よりは各互に獨立して相關係することなし、今無數の實在者が永遠の昔より存在せしとの思想を以て矛盾の概念と爲すにもせよ、將た否らざるにもせよ、吾人にして一たび此等一切の實在者が均一の分量を有することを發見するときは、此かる思想の妄なること實に明々白々火を睹るが如

くならざるを得ず、吾人は是に於て、何故に不平等、不均一なる無数の元子存在せずして、特に此かる一種奇妙なる均一の元子存在するやを説明せんが爲め、元子其物を超脱して、或る共通の原因若くは起原を尋ねざるを得ざるなり、學術は無よりして世界の創造せられたることを論ずるを得ず、物質は永遠、自存なると能はざるが故に必ず創造せられたるものならざるべからざることを許容してこそ、始めて吾人の思考力の最高點に達せるものと謂ふべきのみと、

是を以て觀るときは、小は究竟元子より、大は物躰、天躰に至るまで、物界は自己の有限にして附屬的なるを啓示せずと謂ふことなく、如何に物界を搜索するも、吾人は到底宇宙其物を説明し、若くは宇宙の部分に究竟の説明を與ふべき原因を發見すること能はざるなり、預言者ヨブ曰く、淵はいふわが中にあらず、海はいふわがうちにあらずと、近世の學術は此意を切言するものと謂ふべし、宇宙及び宇宙の萬物は宇宙外に存する一の原因を指示するなり、

第四右の結論たる進化説の確定するところなりとす、蓋し進化説なるものは動に元始ありたることを假定するものなり、何となれば動なるものは始まりてこそ星霧

躰は其均一性を失ひたるものなるべければなり、該説によるに均一物の偶有せる一の勢力ありて動を起せりとの提示の外、動の元始を説明するものなし、若し此かる説明にして多少の意義を有するものとせば、是れ即ち宇宙其物の外に動の原因ありとの意を示すものと謂はざるべからざる、故に吾人にして或る學術家の臆想する如く、物質を以て、動の始まりし迄、覺官によりて知覺し得ざる無形、無動の流動躰として元始を有せざりしものと見做すも、又はスペンサーの假定する如く、均一なる星霧躰として元始なかりしものと思考するも、物質を以て物質自己の動の原因と爲すことを得ずして、動の原因は物質の外に存在せりと考へざるを得ず、然らば則ち吾人が知るところの宇宙は宇宙に超越する原因の結果たらざるべからざるなり、且つ進化説は動に必ず静止の時來るべしとの意を含むものなり、若し一切の進化の勢力にして、其不斷、必至交渉により、終に勢力平衡の状態に到達し、其一切の動の静止するに至らざるべからざるものとせんか、是れ豈に進化中に啓示せられたる動と勢力とは其元始を有せしものたらざるべからざるを證明するものにあらずして何ぞや、故に近世熱學の探究は吾人に與ふるに、宇宙は元始を有し且つ結

果にして、隨て有碍、附屬的なりとの學術的知識を以てするものと謂はざるべからず、
最後に臨みて言ふべきは、物形系に於ける物體の交渉に於ても、其進化に於ても、共に勢力保存及び勢力對立の理法を以て説明し得べからざる豁谷あると是れなり、學術の教ふるどころによるに、物體は其物體的なると、分子的なるとを問はず、決して眞實互に相密着するものにあらず、粘着力にもせよ、化學的親和力にもせよ、將た引力にもせよ、常に多少の距離を隔て、働くものにして、吾人にして宇宙に行動する勢力を物體若くは分子の固有するものと假定するも、又は他より注入せるものと假定するも、兎に角吾人は到るところ、距離を隔てたる此一種奇妙の作用、及び其他學術の未だ解釋し得ざる困難に逢着せずと謂ふことなし、且つ宇宙の進化中には、吾人は學術上にて得たる何等の原因若くは勢力を以ても説明し得べからざる高妙なる勢力の發現ありて、段落を爲すことを發見す、有機生命、感覺力、及び合理的有心性の始原の如きは即ち是れなり、
以上掲げたる明白の證據よりして、吾人は勢ひ結論せざるを得ず、曰く、宇宙は本質

上附屬的にして有碍なり、曰く、絕對者は宇宙其物たるべからずして、宇宙に超越せざるべからずと、

吾人は先きに人間が絕對者の存在することを知らぬものなるを發見せるとき、極端の實驗論者と袂を分ちたり、吾人は今や又た凡神のたると唯物的のたるとを問はず、一元論者に別を告げざるを得ず、何となれば吾人は絕對者は宇宙と同一なりとの彼等の説を論破したればなり、吾人は既に宇宙が自己の中に其究竟の基礎及び原因を有せることを知れり、是れ豈に絕對者は宇宙と別物にして、之に超越するものなりとの意を含み、絕對者は宇宙の因で以て發生し來れる永遠者なりとの意を含み、宇宙の常に依て以て存在し、宇宙が絶へず其勢力を啓示するところの永久活動の第一原因なりとの意を含むものにあらずして何そや、

夫のスペンサー氏は正に有神論者と此點迄同行するの人なり、氏は有神論者と等しく熱心に吾人が絕對者の存在を知るとを主張し、之を以て思想の必然法、諸種の中に於て最も確實なるものと稱し、又宇宙に自己を表現する全能力として積極的に絕對を知り得べしと論じ、宗教上の實驗を除ける此宇宙論の結論に於て有神論者

が到達するところの神の知識は、本質上又スベンサー氏の説く所なりとす、氏が絶対者は不可知者なりと主張して止まざるは、矛盾の譏を犯して顧みざるものと謂はざるべからず、氏若し宇宙に、絶対は勢力なりとの證據を發見せりとせば、之と全一にして又之と同じく堅確なる證據により、絶対の理性なることを發見せざるべからず、抑も宇宙を以て活動理性即ち神に基し、神によりて指導せらるゝものと思惟するは、宇宙を以て無感覺の純一物、若くは勢力、若くは唯一本體、若くは原始純一物、若くは諸種の物質に基けるものと思惟すると同じく、充分學術的なる宇宙説にして、有神説が物系を靈系に附屬せしむるは正に兩系の統一を成遂する所以なり、蓋し此兩系の分離たる到底如何なる無神説も排除すると能はざる所にして、依然非有神説の安過し能はざる深淵として存す、然るにスベンサー氏及び其他の有神説反對者が右の事實を覺らざるは、實に驚くべきことと謂はざるを得ず、論者難して曰く、有神説は宇宙に元始ありしとの意を含むものなり、而して宇宙の元始なるものを思考するには常に困難なきを得ずと、然れども此困難たる有神説の難題たると同じく、凡神説、唯物説、不可知説及び進化説の難題なり、有神説は實に

此困難の生ずる所以を説明するものなりとす、有神説によるときは、絶対は智慧と愛とによりて活動する理性として自己を啓示するものなり、然れども絶対は常に絶対として自己を啓示せざるべからざるが故に、何れの點に於てするも絶対が有限の中に自己を表示即ち啓示するところには、必ず秘義の存せざるを得ず、宇宙は常に其存在に對して神に依頼すとの意味に於て、吾人は創造と云ふことを思考し得べき耳、神は常に宇宙に先ちて存在する、宇宙存在の基礎なり、他の反對論に曰く、此論たる唯た宇宙の原因は實際生起せられたる結果に對して適當なりとのことを證明するに過ぎずして、其勢力に於て無碍、無限なることを證明するものにあらずと、故にヘーゲルは無限の原因の有限の原因より推測し得べからざるを論し、ヒュームの如きも之と全一の難問を起せり、曰く、原因は結果に比例せざるべからず、……吾人よし神が宇宙の存在及び秩序の創作者たることを許容するとせば、此等の神は其創造物中に表はるゝ丈の勢力、智慧及び慈愛を有するものなりとの結論に歸着するも此より以上は決して證明すると能はざるなりと、

吾人は將に答へて曰はんとす、若し吾人の説にして宇宙を生起するに適當なる勢力を有する實在者の存在を證明するものとせば、此實在者の勢力は實際存在する他の一切の勢力に超越するものならざるべからず、蓋し此等一切の勢力は右の第一原因に由來し、又之に依りて以て立つものなるが故に、勢ひ之に劣るものたらざるを得さればなり、果して然らば此第一原因は實際上無上、全能の實在者たりと謂ふべし、

然れども此反對論に於ける根本の誤謬は、結果より原因を推定して、絶對の存在を證明し得たりと自定するに在り、因果の理法カウゼン、キルクセ、コイネンによれば吾人一個の結果よりして唯た之を生起するに適當なる原因を推測し得るのみ、而して一の結果たる宇宙よりして吾人は唯だ之を生起するに適當なる原因を推測し得るに過ぎざると、反對論者の説の如し、是れ決してその眞の意味に於て絶對者を現はすものにあらず、事理正に之に反し絶對者の存在すと云ふとは理性の必然直覺、思想の根本理法にして、人間が何事を思考するにも、必ず其必然、究竟の公準として現はるゝものなりとす、此かる反對論及び之と同一種の反對論は、毫も此議論に對して効力なきのみならず、

ず、苟も吾人人間が實在者を知り得ることを許容する限り、吾人の説は半面として、扱くべからざるものと謂はざるを得ず、此理たる吾人の既に見たるが如く、今日唯物論者も、凡神論者も、將たスペンサー派の不可知論者も共に思想の究竟公則及び必然理法として承認するところなり、且つ此理たる、物質及び活動力と潜勢力とは其料額永久同一なりとの形而下學に於ける根本的公則中にも存するものと謂ふべし、此を以て觀れば、吾人にして學術の最後の語は神學の最初の語なりと謂ふも、決して其不可なきを見るなり、

右の反對論と極めて密切の關係を有する他の反對論にして、勢力永存の理に基ひして其議論を立つるものあり、其説に曰く、原因と結果とは正に均一なり、結果とは原因が新規の形狀に於て再現するものに外ならず、故に吾人にして結果より原因を推定するは、單に吾人が既に已に結果の中に發見せしものを原因の中に發見するに過ぎずと、吾人の之に對する答辨は前と同一なり、即ち吾人は單に因果の理によりて結果より原因を推定し、以て神の存在を證明せんとするものにあらず、加之論者の説たる尙誤れるものあり、何となれば論者は原因を以て唯だ此より彼

に轉移せられ而して新規なる形狀に於て再現するの勢力と爲すのみなればなり、然るに原因とは決して此の如きものにあらざ、原因とは凡の勢力の本原たる實在者なりとの意にして、結果とは此勢力を接受する實在者に於ける或る變化たるに外ならず、砲丸家を打て之を寸碎す、家を寸碎せる勢力は飛丸の中に存せし勢力と同一なるに相違なし、然れども此勢力を送致し、此結果を生起せし砲丸は此結果と全く別物にして、毫も該結果と化して散失するが如きとなし、蓋し、原因は勢力にして、新規の形狀を取りて結果の中に依然として同じく存すとの説は、一切の實在者を否認し、一切の實体を融排し去りて茫漠たる勢力と爲すの理論を採るにあらずんば、到底維持し得べきものにあらざ、然れども今假りに砲丸を以て一個の勢力に外ならずとするも、砲丸を組成し、而して砲丸を組成するの勢力として、其中に宿在する勢力と、該砲丸が輸送する勢力とは全く別物にして、彼此互に相異なること、猶ほ砲丸を以て一個の實在者と見做すとき、該砲丸と其輸送する勢力との全く相異なるが如し、故に吾人は到底吾人の思想中に此勢力を一個の實在者と思惟せざるを得ず、此の如きの理あるが故に、人は實在に就て如何様に思考するとも、原因は到

底其結果と全一物にあらざ、又結果と化し去るものにもあらざ、將た結果の中に消失し去るものにもあらざして、依然として尙ほ原因力を有する實在者として存在するものなり、故に因果の理によりて結果より推測を下すとき、吾人は常に發動的勢力あるを信すべきのみならず、之と共に此勢力の本原たるべき實在者あるを信せざるを得ず、吾人若し因果の理によりて層々溯りて之を考ふるときは、思想の必然法によりて終に、實際宇宙に發見せらるゝ一切の勢力の潜在する第一原因たる實在者の存在を信せざるを得ざるなり、然り而して宇宙の原因たる實在者は宇宙と同一物たるべからず、吾人若し自動の能力を有する合理的にして自主なる活動者に適用するに論者の説を以てするとき、此かる説の採るに足らざること愈々益々明瞭なるに至るべし、蓋し論者の説の勢力の基くところを觀るに宇宙を以て單に物界の定規に従ひて行動する物質力のみより成立つものとして、超物者なるもの存在することなく、且つ何等の實在者も存在せずとの自定に在り、此かる自定の非理なる固より言ふ迄もなし、

ヘーゲル難ざらく、吾人若し結果よりして原因に論し上らば、是れ結果によりて原

因を制限するものなりと然れども此れ唯だ夫の絶對を以て一切實體の合計と爲し、又は之を以て不限定の實在と爲し、又は一切の關係を脱せるものと爲すが如き、絶對に關する過誤の觀念より發生し、且つ論理的運用の順序と歴史上及び具體的實體の順序とを混淆する過誤の方法より發生する一の凡神的反對論なるに過ぎず、夫れ潜在原因潛在原因が其勢力を發揮して行動を爲し得るは、決して該原因を制限するものにあらず、若し該原因にして之を爲し得ずんば、却て其制限と爲るべきのみ、且つ夫れ論者の説の如く、絶對原因が其勢力を發揮して許多の結果を生起し、若くは絶對理性が其智慧と愛との思想を有限の形狀となして表示するを以て、此等の原因及び理性を制限するものとせば、夫の凡神論者の所謂絶對本體が許多の方法に展開するも亦該本體を制限するものと謂はざるを得ず、世豈に此理あらんや、然れども此答辨たる強て主張するの要あらず、何となれば此反對論たる前數者の如く、神の存在を以て専ら結果より原因を推定するものと自定するの誤謬に陥れるものなればなり、

右の外尙ほ原因に關する誤謬の思想よりして此宇宙論に反對する種々の駁論あり、

り、
其一は原因と結果とを以て單に前項と後項とを示すものと爲すの誤謬に坐するの是れなり、ゴール氏は其例を擧げて曰へり、嘗て一小兒あり、其兄に問ふて曰く、我夜に入りて睡れば翌朝忽ち明かなるは何故そやと、其兄にして若し此小兒より長するると一、二歳なりせば、縦ひ小兒にして夜間睡眠せずとも朝に至りて明かなるべきとを答へ得るなるべしと、夫れ人は常に勢力若くは能力を有する原因と單純なる前項とを區別するものなり、今ゴール氏が擧げたる話中の小兒すら能く此區別を爲したり、何となれば彼は己の睡眠は能く太陽をして東天に昇らしむと思考したればなり、彼の誤は原因の性質に關するものにあらずして、或る特別なる結果に對する特別なる原因は如何といふ事實の疑問に關する者にてありしなり、學術は決して單純なる前項後項を承認することなくして、實際發動せられたる勢力を認む、夫の勢力共存及び永存の理法なるものは因果の理に於て學術上之を承認せるものに外ならず、論者の説たる唯だ夫の想像力の虛想なりとて、勢力の實在を拒む全體現象説即ちコムト派實驗説と符合するのみ、然れども此等の實驗論者すら尙

は勢力なる語を用ひざるを得ずして、其言辭を察するに、實際の出來事を記述するに方りては彼等も亦一般の人と同じく、彼等論者が自ら否拒する期成力ライエンツ、グワの實在に關する意識を有せることを窺知し得べし、故にスベンサー氏は曰く、原因の意識は意識其物を廢止して始めて廢止せられ得べしと、醫學博士カーペンターも亦曰く、「吾人が空間又は連續サクセンロンなる總念を去ると能はざるが如く、勢力なる總念は吾人が須臾も離るゝと能はざる根元思想の一にてあるなり」と、論者又曰く、因果の信仰は人心の不能力なる結果なりと、然りと雖も因果の思想が人心の不能力に基ひするものにあらずして、反て理性に存する積極、自明の直覺たることは、吾人の既に論示せしところなり、蓋し思想、行爲の理法たる理性一切の原理に於けるも、皆此の如し、此等の原理は決して心意の不能力より發生するものにあらずして、心意の能力より發生し來るものなり、理性の理性たる所以は實に此等の原理あるによる、之れあるが爲めに人は禽獸と別あるなり、之れあるが爲めに人は合理的知識を有し得るなり、之が爲めに吾人は宇宙を學術的に曉得するを得、之によりて以て神と親和し、之あるが爲めに神の像を有するなり、神學も、哲學も、將た

實驗學に於ける一切の推理も皆此等の原理を基礎とせざるべからず、論者又曰く、因果の思想は單だ實驗より生し來る觀念の聯合の結果に外ならずと、教授クリフォードは因果論を嘲笑して管に之れを不當と思惟するのみならず、馬鹿氣たる議論なりと謂へり、該教授は希臘語の原因なる語は、プラトに於て六十四の意味を有し、アリストートルに於て四十八の意味を有すと論せり、蓋しア氏は原因なる語を使用するに方り、明かに四個の意義を之に附したり、然れども今假りに教授クリフォードの言をして眞ならしめば、該教授の論たる、尋常普通の談話に用うるの語は、精確の意味を附して學術若くは哲學に於て使用するを得ずと云ふが如き小兒らしき思想の上に基ひするものと謂はざるべからず、此かることを言ひ得べしとせば、勢力に關する學術家の議論も嘲笑せざるべからず、何となれば、勢力なる語は時として烙鶏の腹を填むる材料を呼ぶに用ひ、而して帝國字典は之に附するに二十八種の意義を以てし、而かも其二十八義とも大抵各幾多の同義語を有すればなり、斯かる言たる決して議論と稱し得べきものにあらずして、寧ろ無識者を相手にしたるの言なりとす、吾人は又此かる氣の毒なる説は只管無識者の口より出

てたらんことを願ふ、然るに千八百八十五年ケンブリッジ大學生に向て、リード演
舌を爲すとき、本大學より世界に派遣せる大秀才の一なりとまで稱道せられたる
クリフォード氏其人にして、右の如き言を吐きたりとは、如何にも信じ難き語ならず
や、氏は自説に従ひて因果の思想の意義を説明し、之を哲學、神學に使用するを嘲笑
す、其説に曰く、吾人一物の性質を熟知し、而して此性質と此物の有する他の性質と
が吾人の心意中に相聯合するとき、吾人は對比によりて偶然此物に類似する他
物に此性質を移し及ぼすなり、例へば人案山子を見て其原因の何物たるを問ひ、其
鳥を威す爲めなるを知るときは、其人直に萬物皆案山子に等しきものにして、一個
の目的を有するものなりと結論す、人又理髮師の排垢機を見て其運轉の原因を問
ひ、人ありて其廻柄を動かすことを知れば、其人直に萬物皆其廻柄を動かすの人を
有すと結論す、斯くする中、其人の對比到底適用し難き場合起り來る、此に於て其人
之を稱して秘義と謂ふと、氏は之を説明せんが爲め一例を引きて曰く、人あり自己
の神経系よりして其人の有する傘も亦神経系を有すと推測せり、然るに其人到底
此理を了解し能はさりしが故に、彼は其傘の神経系は秘義なりと謂へりと、扱氏は

此申戯何となれば是れ議論と稱すべきものにあらざればなりの中期成原因、意匠
及び物界に於ける不變不斷の原理を混淆して、明かに此三者の間に存する相異に
心附かざるものゝ如し、且つ氏は因果の理を以て觀念の偶然の聯合及び非學術的
に觀察せられたる或る不確なる類似の結果と爲せり、若し果して之をして因果の
思想の真正なる概念たらしめば、結果によりて原因を釋ぬる一切の推測は不當な
るべく、又は物界の不變不斷の理よりして生し來れる一切の推論も無効たるに至
るべし、然れども一切の形而下學は此等の推論が依據せる原理によるにあらざれ
ば、片時も成立すると能はざるが故に、若し此嘲笑にして哲學、神學の受くべきもの
なりとせば、學術も亦共に之を受くるを辭する能はざるなり、

フィッカスと稱する人其著書有神論に於て主張すらく、勢力の永存、物質の無盡性、及
び進化の事實は宇宙の究竟基礎として神、若くは如何なる第一原因、若くは絶對者
の存在も一切學術上の證據を認容せざること亦た争ふべからざる事實なりと、且
つ彼れは論して曰く、吾人は尙此の問題に關して形而上の推論を爲し得ざるにあ
らずと雖も、此事たる不可知的にして且つ學術上不正當なる思想の目的物に關す

るものなるが故に、縦ひ吾人にして多少の知識を得るとするも、唯た此か一種の實在者存在することもあるべしと云ふ不確なる知識に過ぎざるなりと、然るに彼が自己の結論を極めて精確なる論理上の運用の結果なりと稱道するにも關らず、一たび之を檢査するとき、其結論たる唯一の學術的知識は實驗學なりとの自定に基し、且つ一切の知識を無効ならしむる知識相對説を根據とせるものなるを見るべし、夫の或る絕對者存在すとの知識が思想の自明、必然の理法たることを明知するスベンサー氏に反して、フイサカスは絕對の存在を以て論理上因果の理によりて證明し、以て始めて知られ得べきものたることを自定す、此かる證明の爲し得べからざることは、苟くも思慮ある有神論者の明言するところなり、フイサカスは又スベンサーと同しく心意を以て意識の連續的狀態と爲す、故に彼は推論すらく、有神論者は神性的心意若くは理性を以て宇宙の第一原因、究竟基礎と爲すも、是れ到底無限の連鎖を脱すると能はざるものにして、其絕對者に達すると能はざるは、唯物説と異なるなし、蓋し神其者は單に意識の連續的狀態たるに過ぎざるべければなりと若し吾人種々の理論あるにも係らず、實際上萬人の信ずる事實即ち人は諸種

の意識の狀態に於て、自己は始終唯一にして同一なる實在者なりとの知識を有するとを許容せんか、彼が折角骨折りて組成せる議論も忽ち瓦壤土崩すべし、若し吾人一たびスベンサー氏の心意に關する思想、即ち連鎖の中に在る個々別々の事件が一々統一せる連鎖の中に自己の存するとを意識し、而かも同時に又始終自己を唯一、同一の有心者と誤認せざるを得ずとの概念の非理なるを悟らんか、若し吾人にして夫の常識も哲理も共に吾人に命令する單純の理、即ち何れの動、何れの思想、何れの行爲も實在者の動、實在者の思想、實在者の行爲なりとの命題を許容するとせんか、吾人は必ず一切の元始、變化、一切の有限勢力、有限知識及び有限實在の永遠原理及び基礎として絕對者の存在を許容せざるべからざるなり、之を反面より考察せんに、若し萬物の究竟基礎として絕對者の存在することなしとせば、實在者もなく、知識なるものもなく、一切の知識は漠々たる空無の幻影と消へ去るべきのみ、フイサカスの議論を一見するとき、如何にも、精確に觀ゆれども、少しく之を檢査するとき、直に其知識相對説なる虚偽の理論の爲めに破碎せざるを得ず、フイサカスの結論は夫のコメントの全躰實驗説を基礎とするにあらずんば成立すると能

はさるものなり、然るにコムトは一たび勢力若くは原因なる觀念を許容するとき
は、之と共に第一原因として必ず神を承認せざるべからざることを明知し、且つ之
を明言したり、見るべし、吾人にして絶對者たる神の知識を否拒するは、取も直さず
一切の知識を否拒するに外ならざることを、

加之、フイツカスの自定する如く、若し物質及び勢力の存在及び永存は、殊更吾人を
して之が元始若くは原因を求めしむるとなく、反て物質、勢力の永遠なることを信
せしむるものなりとせば、之と同一に確實なる事實、即ち理性の存在及び永存は必
しも吾人をして之が原因を探究せしむるを要せず、反て理性の永遠なることを信せ
しむべき筈にあらざや、然り而して永遠の理性とは即ち神の謂に外ならず、

要之以上諸種の反對論者は、絶對者の存在は證明の後にあらざれば知り得べから
ざると、其證明は存在の元始及び變化は皆原因を有すといふ原理に基かざるべか
らざるとを自定するものなるが、神の存在の議論に於て此自定は大に勢力を有せ
しものなり、而して有神論者にして此等反對論者の基礎たる自定の根本の誤謬を
了解摘發すると能はざる限りは、到底之を論破すると能はざるなり、夫れ有神論者

が有する神の存在の信仰たる、決して其議論の確否を根據とする者にあらずして、
一切議論の基礎たる思想の必然理法に基くものなるが故に、有神論者は毫も其信
仰を動かさるゝとなきなり、苟くも絶對者の存在を信する信仰の眞基礎にして一
たび承認せられんか、此等の反對論は一々破碎せらるべく、而して其眞相茲に暴露
し來り、其一切の實知識を顛覆する恐るべきの説たるを見るべし、茲に於て乎、實在
者の眞實に實在たらんが爲めにも、吾人が實在者の知識を得るが爲めにも、絶對者
の存在は至要欠くべからざるものたるを明知すべく、吾人にして苟も道理に合す
る學術的の知識を得んが爲めには、又絶對者の存在の至要欠くべからざるを悟る
べし、是を以て觀れば此等の反對論は適ま絶對、無碍 (unconditioned) 已を得ずして他に
關係せざる事を云ふなり、にして且つ凡碍 (all conditioning) 自ら自由に萬物に關係し
て之を支配する事を云ふなる實在者の存在に對する理性の切なる需要を一層明
白ならしむるものと謂ふべきのみ、

吾人は今本題を去るに臨み、原因力として神の啓示は果して其中に神の有心性を
暗示すべきものを有するや否やの疑問に就て多少の考察を費やすべし、

或る學者は説て曰ふ、勢力及び原因の觀念は其初め吾人の意志を發用するに起るが故に、意志と云ふ觀念は期成原因の觀念の固有、至要の元素なりと、若し此説にして真正に、且つ吾人にして宇宙は原因を有すとの證據を有すとせば、吾人にして第一原因は合理的の自由意志即ち自動の勢力なりと結論するも不可なかるべし、然れども此の説の前提に於ける原因の觀念の起原は少しく誤謬あるが如し、夫れ人は同一の心理的狀態によりて物を知るところの自己と、知らるゝところの客觀者とを知るが如く、其の有意的に勢力を發用するに方りても、同一の作用によりて、自己が勢力を發用することゝ、外部より自己に向つて作用する勢力あることを意識するものなり、例へば重き石を轉するときの如き、人は直に自己の力と石の抵抗力とを意識す、故に吾人が原因力の觀念を得る起原に於て、其勢力の吾人の中にあるを知ると共に又外部より吾人に向て作用するを知るものなり、故に吾人が知識の起原よりして、知識の唯一の目的物は主觀的の觀念にして、一切の實體は人の本我意識の範圍内に限局せらるゝと推定し得ざるが如く、原因力に關する吾人の觀念の起原よりして、吾人は意志の外に原因なしと推定することを得ざるなり、

然りと雖も吾人は原因力の觀念の起原よりして左の事實を確定し得べし、曰く、吾人が勢力なる知識を得る起原によりて吾人は自由勢力なるものを知る、曰く、此故に學術的思想と常識的思想とを問はず、自動の有心的作用者と、豫め外部より輸送せられたる勢力を齎す無意識の器械とを區別するの根據は全く右の起原に在りと、物質力と別物なる自由原因即ち有心原因は宇宙に於て知られたる勢力の外に舍くべきものにあらざ、

此の如く論し來るときとは、夫の自由意志を否拒し、且つ宇宙一切の勢力は單に物質力に過ぎずと論するのみならず、終には宇宙を以て一個の盲動的機械と爲し、其中に存する勢力は單に機械的の起動力のみなりと主張する獨斷的唯物説は、決して其身を容るゝの地なしと謂はざる可らず、吾人は勢力の意識によりて自由勢力の意識を有す、若し吾人にして兩者孰れか一を否拒せざる可らずとせば、吾人の本性に固有し、吾人が自己に就て有する意識によりて知る所の自由勢力を否拒せずして、寧ろ吾人の外に存し、吾人に對して行動する所の物質力を否拒すべき筈なり、此理や又夫の宇宙の究竟原因若くは基礎として合理的の自由意志存在せずと言

ふ専斷無證の獨斷的唯物説を論破するものなり、原因力は決して第一原因より合理的の自由意志を除去する者にあらずして、反て之を含有せしむる者なりとす、吾人は尙一步を進めて論せざるべからず、夫れ結果を生起する物質物は單に他より授與せられたる勢力を傳達、送致するの器械に過ぎず、嚴密に之を言へば、物質物は決して其傳達する勢力を發用、指定するものにはあらず、さて吾人物質物を觀察するに方り、其以前接受せし勢力を傳達するに過ぎざることを發見する以上は、其勢力が眞實、究竟の原因として右の物質物の中に安居する能はざるは明かにして、其勢力を自ら發用、指定する原因ありて始めて其安居の地を得へきのみ、故に究竟原因は自動ならざるべからず、詳言すれば、合理的にして有心的なる靈たらざるべからず、故に一切の物質的因果の理を究むるときは、吾人は必ず第一原因として靈の存在を信せざるを得ざるなり、思想此に至て人心始めて安靜す矣、有神論者にして或は物界に於ける物質力の一切の作用を以て、直接に神の意志より出づる行爲なりと爲すの傾向を有するものあり、然れども若し物質力の作用にして意志の作用なりとせば、意志と物質力とは同一物となるべく、人間が物界に對

する行爲に於て彼の如く瞭々たる二者の區別は消失すべく、神と宇宙の別も無きに至るべく、而して吾人は終に神は宇宙と同一物なる無意識の靈なりとの凡神的概念に陥らざるを得ざるべし、眞の有神的なる概念は、一切の物質力を以て直接に神の意志の作用と爲すにあらずして、吾人が物界の進路に於ける物質力の作用を觀察するに方り、其第一原因として究竟之を永遠の靈の合理的意志に歸せざるを得ずと思惟するに在りとす、

吾人は絶對が宇宙の第一原因、宇宙一切の勢力の起源として自己を宇宙に啓示することを發見す、スベンサー氏の語を借りて言はんか、有神論者は、自己が萬物の由て發生する無限、永遠の勢力の面前にありとの一個の純全なる實識を得たるものなり、然り而して宇宙に行動する勢力は此實在者を啓示し、以て吾人を助けて永へに測度すべからざる無限力に就て或る觀念を形らしむ、

然り而して吾人物界中に活動する物質力を觀るときは、必ず物界に於ける一切の勢力及び發動の第一起原として心意若くは靈、即ち自動の合理的勢力に思ひ到らざるを得ず、故に醫學博士カーペンターは曰へり、學術によれば一切の勢力の起

原は心意なりと爲さるべからず、此れ決して新規の説にあらず、……古昔ソクラテースは業に已に之を言へり、然れども予の考ふるところによれば、物質を以て單に勢力を齎すの器械と爲し、諸種の勢力を以て彼れ此れ互に相轉化するを得へしと爲す重學近時の發達によりて、此の説は一層至緊のものとなりたり、人間至奥の本能も、哲學至深の探究も、ともに心意を以て勢力の一個、唯一の源泉と爲さるはなしと、グロウツ氏曰く、物を發生するは意志なり、物を創造するは神の勢力なりと、サイ、ジョン、ハーシエル曰く、引力を以て何れの處かに存在する意識及び意志の直接若くは間接の結果と爲すは、眞に道理に合することなりと、以上は皆な學術家の言なり、若し夫れシエレーは自ら思辨的の無神説を抱くにも關らず、到底人生の脱し得ざる人間の意識をば、詩學的に吐露して曰く、

眼もて視がたき勢力の嚴なる影は、
眼にこそ視をぬわれらの中にさまよふ、

有神論者或は云ふ、不可知説の攻撃は人間の理性が超物者に關して有すべき知識の範圍を狭めたりと、如何にも神學者は神と世界との關係及び神と神の世界に於

ける作用との關係に就て委曲には知らざる所多きも、神が有限の中に自己を啓示する方法を曉る能はさるも、將た分外の臆測、解釋を逞ふると、能はさるも、之に安んじて自ら慎むところあるに相違なし、是れ實に合理的の行爲にして又基督教の教理に合するところなり、且つ是れ人間の大きな智慧なりとす、然れども近世懷疑説の検討よりして、吾人は人間理性の勢力を一層明白に會得し、一層高尚に尊重するに至れり、但し予が此に人間の理性と云ふは其深遠なる意義に於て爾か謂ふ者と知るべし、吾人は之が爲めに愈々、宇宙の究竟基礎は宇宙に絶へず活動する絶対理性なる事を明知し、絶対理性なくんば宇宙は實在にあらずして學術的の知識成立せざる事を曉り、人間理性は一切の合理性の至要素たる究竟、自明の原理を承認する事を了解し、一切の學術は此等の原理の眞正にして普遍なることを假定する事を知り、學術は絶へず宇宙が此等の原理に隨ひて構造せられ、又此等の原理に基き、事實を觀察して得たる推測と相符合して構造せらるゝ事を發見して、以て右の假定を證明確定することを見、人間の理性と相符合せる理性の宇宙を貫徹、指導して、以て人間の學術を成立せしむる事を發見し、人間理性は神的理性の像を有する

者なるが故に、神の啓示を收接、解釋するを得ることを悟得するに至れり、吾人は本章に於て唯た物形界の存在及び物界に行動するものとして物形界の勢力に就て考察したり、吾人は此等の世界及び勢力を研究するとき、此等のものより以前に存せし原因に溯らざるを得ざるを見たり、而して吾人斯く溯りて探究するや、終に第一原因に達し、此第一原因は此等世界及び勢力の共通の起原にして、彼等は此原因の勢力を啓示するものなるを發見したり、嘗に之のみならず、其共通の源泉として心意若くは靈の觀念に達し、暗黒の中を辿り上りて神の許に至るを知れり、然れども以上は唯た物界が絶對者の性質に關して與ふる證據の端緒たるに過ぎず、吾人今より進んで絶對の活動理性、永遠の靈、有心的の神たることに對して、物界が與ふる一層許多、明白の證據を研究すべし、

第十一章

物界の本性と行動 (Constitution and course of nature) とに
於て有心的の靈として啓示せられたる神、

教授テ、エチ、グリーンは哲學を以て、世界を合理的のとしてその充分明了なる概念に向つて進まんとする所の行動の結果なりと爲せり、善い哉言や、然り而して此概念たる、只だ宇宙が理性に根基し、而して宇宙に顯はるゝ絶對者が絶對理性永遠の靈、有心的の神たりてこそ、始めて眞實なるものなり、蓋し有神論は斯の如き哲學の成立し得べき唯一の基礎にてあるなり、吾人は既に絶對者は存在して、宇宙の因て出で、因て立つ第一原因若くは絶對力として宇宙に顯はるゝとを推知したり、吾人は今茲に宇宙に於て理性の存在指導的行動の存在に關する證據を考究し、以て絶對力か有心的の神として其中に啓示せらるゝことを發見せんと欲す、人間の本性と歴史とによりて吾人に知られたる、靈系に存する此事に就ての證據

は、吾人后に至て吟味するとある可し、本章に於ては、唯だ物質系よりの證據のみを
 攷究せんと欲す、

カントは此種の證據論を物理神學上の議論 (Physico-theological argument) と稱した
 り、此名稱たる、有心的神の存在の、物質系に於ける有らゆる證據に適用して尤も其
 當を得たるものなり、蓋し此の證據たる物界が合理的及び學術的の系統を成し相
 統一して存在し、物界の本性と行動に在て合理的觀念、理法、及び目的の顯はされ、又
 理性の現存と指導の啓示せられ、斯くて宇宙に其能力を顯はす絶對實在者は、絶對
 理性、有心的の神として啓示せらるゝことの證據證明たるなり、

蓋し是れ吾人絶對實在者の性質に關する知識を得る爲めに、更に一個の方法を採
 用するものなり、然れ共是れ只だ一個の方法たるのみ、全躰の啓示には非ざる也、非
 有心的實在者は道義法に對して責を負ふ可き者に非ざるが故に、吾人は神の義と
 恵とに關する主要の證據を看出す爲めに、非有心的なる者の範圍内に注目せず、予
 が茲に此事を言ふは蓋し緊要なり、何となれば此證據論に關する許多の異説は、本
 證の範圍を誤解し、本證が有神論の爲めに百事百物證明せざるが故に、何事をも證

明せざるものと思考するより生出すれば也、夫れ各源泉よりする神の啓示は、其他
 の啓示と相説明、確定、擴張するもの也、是れ諸種の媒介物を通じて來る神の啓示に
 して、一の繼續したる啓示なり、然り而して此啓示は人間歴史の完結するに至りて、
 初めて人間に對して、完結せらる可きものなりとす、

トレンデレンブルヒ曰く、所謂神の存在の證據なる者は、絶對なくては曉會するこ
 と能はざる觀察點としてこそ、初めて價値ある也、是等の證據は無碍者てふ根題 (no-
 undthema) を提起する間接の證據なり、………是等の證據たる、若し吾人神の
 存在を臆定せざるときは、如何に錯亂の起らざるべからざるものあるを指示する
 ものなり、是等の證據が其勢力を有するは、一に此に是れ由らざんばあらずと、

然れども氏は自から吾人が絶對者に就ての積極的知識を有することを言へり、故
 に此所謂證據なる者は、宇宙間に於て絶對が啓示したりし所の性質を確知する爲
 めに、宇宙を探究する者たらざるべからず、且吾人は意識に於ても神の啓示を有す、
 即ち此意識を經由して、神は經驗に由りて知らる、而して是れ間接の證據に非ざる
 也、其他宇宙的證據に於て、吾人は絶對者が能力として宇宙に啓示せられたるを發

見し、又物理神學上の證據に於ては、理性として宇宙に顯はるゝを見る、蓋し是等は結果の性質よりして原因の性質に至る單純の推論なりとす、さて此二箇の證據中の後者は、實にニュートンの歸納法にして、即ち推定と、繙譯と、驗證とを以て、結果より原因を證明するもの也、是等のものたる間接の證據に非ずして、直接の證據なり、學術に在て使用さるゝ所と同様なる者なり、此に附言せざる可からざる事あり、間接の證據其物の妥當なる事即ち是なり、世或は之を拒否する者あり、教授シヂウィツクの如きは其一人なりとす、氏の言に曰く、吾人は或命題を自定するとなくんば合理的に行動すると能はず、左れど此單純の事實は、余に對して、或人の心意に對するか如く、其命題の眞實なるを信すべき充分の理由とは見へざるなりと、然れども夫の理性が、自己の合理性と物を知るの能力とを有するに、必ず眞正ならざるべからざる一切の原理を眞正なるものとして認容すべきことは、蓋し何人も之を争はざるの理なるが如し、若し一個の命題ありて、之を拒絶するは即ち理性其物を錯亂せしむるものなりとせば、是れ取りも直さず、吾人が此命題を眞正なるものとして認容すべき確實の根據なりとす、然り而して此間接の證據其物は、直接、積極の知識

に基ひするものにてあるなり、吾人が一の命題を拒絶するを以て是れ理性を錯亂せしむるものなりと稱し得るは、唯た之を拒絶せば、理性の普遍原理及思想の必然法と相矛盾するの場合に在りとす、

抑吾人は本論の發端に於て、此研究法を以て非學術的にして且つ不正當と爲すの反對説に逢着す、

異論者の言に曰く、合理力若くは有心者としての神の觀念は、學術的觀念に非ず、故に臆説に於て許容す可き者に非ざる也と、然れども臆説に在て必要とする眞の原因は、單に既知なる種類中の一なるか、若くは尠なくとも、其組成的要素は既知なる種類のものならざる可からず、而して神の觀念は實に此の如きものなり、吾人は能力を知る、吾人は能力を知る如くに又理性を知る、吾人は我と我が同類人間の有心者たるを知る、又吾人は理性の必然なる直覺力によつて絶對を知る、故に宇宙は理性の明光の中及び其指導の下に活動する所の絶對者を啓示すと云へる臆説は、學術的に正當なる者なりと、而して若し萬有の事實と法則にして此臆説に由るときは則ち解説され、且つ統一せる系統を成して知らるゝとを得、他の臆説に由るとき

は則ち右の如く能く解説され、且つ組織されずとの事實發見せられんには、則ち此有神の臆説は確定せられたるものと謂はざる可らず、彼の神が覺官によりて觀察せらるゝに至る迄は驗證せられずと云ふ異論の如きこそ、實に學術的に非るものと謂ふべし、學術的の確定に在ては、決して此の如き無理なる要求をなさない也、彼の學術が光熱、電氣、各種の分子の運動、引力、化石の本原、石器の製作者等を説明する所の諸臆説は、總て其觀察せられたる結果の原因と想考せらる可き作用者を目撃するとなきも、確定せられ、驗證せられたるものとして納れらるゝ也、吾人が今爲さんとする物界に於ける指導的理性の證據に關する研究は、是れ有神の臆説の驗證たるに外ならず、此に又肥臆せざる可からざる事あり、不可知論者、凡神論者、及び唯物論者は、絕對者の存在を承認し、其れに基て以て宇宙の本性に關する種々の理論を設定す、故に此反對論は彼の絕對者の存在に關する一切の知識を否定し、又論理上の必至に由りて、一切實在物の知識を否定する純粹の實驗論者若くは現象論者にして初めて能く前後矛盾なくして主張するを得べき耳、然り而して彼等の説は是學術者が非學術的として拒否する所のものなりとす、

又反對論者は、曰く、合理、自由の有心性に關する觀念、其物は、非科學的にして不正當なり、何となれば是れ超物的なる意義を有するが故に、物界の不變法と不斷法とを超ゆれば也と、

之に對する答案は下の如し、曰く、合理性及び自由撰擇は、勢力及び物體の認知さるゝと同一なる方法にて知らるゝ争ふ可からざるの事實なり、即ち吾人の意識に由て知らるゝもの也と、夫れ學術は是等を事實として承認し、以て揚言して曰く、是等は動と同一視すべからざるの現象なり、曰く、腦及び神經に關する一切の發明も、思想、決意、及び一切心意上の現象は、依然として全く説明されずして止むと、是に於てか知る可し、是等の事實を學術外に拒斥すること、實に非學術的なることを、抑も凡百既知の事實を採取して、以て之を其理法の下に統括するは、是れ學術存亡の機を伏すところなり、故に勢力と物質のみを以て唯一の實體となすところの所謂學術にして、若し觀察の下に來集する一切の事實を、物質と勢力とにて説明する能はざることあるときは、其學術は滅亡せざるを得ず、されば唯一なる學術的行動、合理性及び自由意志なる事實を承認し、而して明かに是等が物質と勢力とに由りて充

分に説明され能はざるときは、則ち物質と勢力に超絶する或他の行動者が是等の中に啓示されることを許容するに在り、夫れ物質と勢力の外には宇宙間何物もあることなしとの教説は、是れ純粹の自定にして、合理的自由有心性を顯はす所の合理性及び自由意志の前に立つ能はざる者なり、而して斯かる自定によりて宇宙に關する理論を建説せんとせし計圖の結果は、常に物質及び勢力と云ふ語の至要なる意味を暗々裏に變化することにあらざるはなし、

夫れ物質的及び靈性的なる者の間に區別あることを承認しながら、尙ほ此兩者の共に物界(being)中に含有されざる可からざることを主張するは、理學者に在て珍しからぬ事なり、而して彼等は法則の領域と云ふ事と同意義に物界的なる語を使用し、法則なき領域と云ふ事と同意義に超物(the super-natural)なる語を用ゆ、事茲に至ては言語の使用法に關する問題となるなり、一方に於て學術家が物質系及び靈的若くは有心的系統に兩つなから物界なる名稱を附與しつゝ、忽ち心意と物質とに關する舊來の區別に遭逢し、又有らゆる舊時の疑問と困難は悉く己れの上に集積し來り、彼れは自己の眼界より事實を陰蔽するの外、何物をも得る所あらざりき、之に

反して有神論者は靈的系統と物質的系統の兩者を承認しつゝ、理學者と同様に強く、此兩者は法則の支配の下に在るとを主張す、實際に於て、理學者は物界の秩序、不變性及び不斷性は、單に必然なる、併しなから解説す可からざる事實として法則の下に在ると承認すれども、有神説は宇宙が理性の上に確立して、其永遠不變なる原理律法、理想、及び目的の表現若くは啓示なることを證表し、以て只だに法則の普遍的統治あることを確認するのみならず、又其何故に普遍的ならざる可からざるやの理由をも證明するなり、有神説は又物系を以て、靈系の原則と觀念の表象と爲し、且つ其法則に支配せられ、行動的に其合理的理想及び目的を實現する者と爲し、物系の靈系に屬從するを認め、此の事實に據りて、一の總括的系統の中に靈物兩系統の統一するとを證明する也、有神説は靈物兩系を合せる宇宙に對して一個の原因、一個の能力、一個の普遍的理性、一切の智慧と愛の合理的模型の實現に於ける一個の目的を表示す、此に於てか、即ち動力的及び合理的兩者の統一成り、普遍的理性の領域として濶大に、且つ其永遠原理及理法の如く一定、不變なる不變性と不斷性と存することを得たり、是れ即ち合理的としての世界に關する充分明白の概念なり、此概

念こそ最も克く彼のミル氏の法則と契合するものなりとす、ミル曰く、學術は常に左の如くして攻究せざる可らず、即ち最も僅少にして最も單純なる自定を爲し、之を承認して、以て萬有現存の秩序を了解すべきものは何そやと、是れなり、物理神學上の議論が由て立つ所の原則は、單に各結果には必ず相當なる原因なる可からずといふまでのとなり、夫れ吾人は自己に關する知識中に勢力の存在するを知り、而して勢力が行爲に顯はれたるときには之を承認するとを得るが如く、自己に關する知識により有心的なる者を知り、隨て超物的なる者を知り、而して其れが行爲に顯はれたるときは則ち吾人之を承認することを得るなり、物界中に顯はるゝ心意に關する此證據即ち明證は、時に或は結局學的議論若くは結局原因 (Teleological) より生出するの議論と稱せらる是れ此證據全體を以て、物界に於ける許多の組織は善良なる目的の爲めに存すると、更に其意を狭めて言へば此等の組織は人類に有用なりとのことを論示するまでのものと爲すものなり、されど是れ物理神學的證據論中の一小部分たるに過ぎず、蓋し此證據論に反對するものは、大概皆な該證據論中なる此小部分に基因するものなるが故に、此證據論全體

に對して、何の痛痒をも與へざるものなりとす、夫れ物質系統は其中に理性の存在と指導との存するを表章す、此表章中に於て、既に宇宙に活動する能力として顯はれたる絶對者は、尙ほ又合理的能力即ち有心的なる神として啓示せらるゝ也、

物質的系統に於ける此啓示の證據は、五ヶ條に別ちて之を陳述するを得へし、此中初めの四條は、理性の四原觀念即ち理法に適應する也、曰く眞、曰く正、曰く全、曰く善是なり、

- (一)物界は表號的なり、即ち思想を表章す、
 - (二)物界は秩序的なり、即ち理法の下に在て不變不斷なる者なり、
 - (三)物界は理想を實現する方に進歩しつゝある者なり、
 - (四)物界は結局的なり、即ち靈的若くは有心的系統に従ひて、其目的に服屬す、
 - (五)物界は眞の不斷法の下に在て、靈的系統と調和統一する者なり、
- 右の各條に在て、心意の證據は、眼の如き特別なる物體の本性と作用、及他の物體に對する其適應とによりて發見さるべく、又統一せる系統の中、即ち萬有の本性と進

歩の中に發見され、且つ物界全體の進歩的進化によりて發見され得べし、
物界に於ける心意の啓示に關する例證は枚擧に遑あらず、何となれば此啓示が由
て以て成さるゝ所の者は物質的宇宙全體にして、物質學の各科には其證例充實す
れば也、彼のデ、デロ氏が揚言して何人にも蝴蝶の翼若くは蚊蚋の眼を以て無神
論者を殺し得可く、而かも尙ほ全宇宙程の重量を餘有し、其力以て無神論者を壓殺
するに足ると謂ひしは強ち誇浮の言にあらざる也、故に此に例證を擧げて喋々す
るは要なき事にして、只だ此證據法の各線路を指示するを以て足れりとすべし、
第一、物界は表號的なり——物界は表號的にして思想を表章し、觀念を掲白す、
(一)蓋し此道理は、外部の物體は其智力的反映たる觀念となりて心意に理會され得
るといふ事實によりて現はる、
哲學的思想の萌生せし以來、思想家は心意が物質物を認知するとは如何にして出
來得可きやと云へる問題の爲めに非常に精神を苦めたり、純然たる智能が如何に
して固形の物體を認知することを得るか、心意の特性を有せざる木、石及び其の他
の物質物が、如何にして此等の物體に類同を有せざる、然かも尙ほ心意の由て以て

彼等を知る可き彼等の智力的反映たる觀念によりて認知され得るか、此困難なる
疑問を排除せん爲めに、種々無益の推測をなすに至れり、例せば物體の精氣的影像
(Ethereal image)が或方法に由りて心意中に入ると云へる説の如し、蓋し心意の常に
要求するところを察するに、觀念を以て外物を認知するには、其中に觀念に對して
其物體が或固有の關係を有し、彼等の間に或る類同存し、其物體が或る固有の理想
的意義を有することを預想されざる可からずと爲すものゝ如し、物體は即ち觀念
若くは思想を表號する者ならざる可からず、
若し一物體が覺官上に働き、感覺となりて自己を啓示する時は、心意は其智能力に
て反應し、以て此物體を知覺し、理性的に形成して之を知り、而して思想の中に觀念
として之を認知す、故に此物體は單に空間を充塞する外部物體として心意に啓示
さるゝのみならず、又可知性を備ふる者として啓示さるゝ也、即ち是れ觀念にて認
知せらるゝとを得る者にして、此觀念を通過して、其智力的反映として知らるゝと
を得る者なりとす、此物體は一物體として心意中に啓示さるゝと同時に、又可知的
物體として心意に啓示さる、而して此理や、彼の知識なる者は知る所の主觀と知ら

る、所の客觀と、兩者の間の關係なる知識とを包含する者なりと云へる思想の根本法に含蓄せらるゝ者なりとす、

然れども物體は人が之を知覺、認知する前に智能にて領會せられ得可かりし也、人が其意識に於て之に關する觀念を有するに先ち觀念性即ち觀念にて領會され得可き資性を有せしなり、故に物界の萬物の本質は可知なる者なり、扱物體の觀念性及其智力的反映にて理會され得るの性質は此物體に關する人の意識的領會と全く別に該物體に存在する者也とす、故に吾人は云ふとを得可し、曰く、吾人の意識中に主觀的に存在する物體の觀念は、曾て吾意識と全く分立して該物體中に客觀的に存在せし也、即ち其啓示を收接し得べき心意の表現を待ちつゝ、潛勢的に存在せし也と、されば既に物體と謂へば、必ず先づ之が觀念なからざる可らず、故に吾人物體は表號的なり、思想を表現する者なりと云ふも、決して其の當を失はざるなり、物體にして意識的心意に表現さるゝときは、思想は其意義を有する者なることを認め、該物體の智力的反映たる觀念なるもの意識的心意中に喚起せらる、吾人が物體を知覺するとき、智力は之に反應して、以て觀念と爲し之を領會するにあらずんば、

感覺なるものは決して知識を生ぜざるが如く、其反面として、物體も亦自から其中に觀念性を有せざりしならんには、智能にて理會せらるゝと能はざるべし、故に感覺に由りて心意は自己の知能的なることを知り、且つ物體の可知性即ち觀念性を認むるなり、吾人の眼もて視るべき光輝は、之を生起する不可視的エーテルを表示し、其音響は音聲を起す所の視へざる顫動を表示する如く、感覺は領會する有心者並に領會せらるゝ物體中には超感覺界あることを表示す、

無神的哲學統には心意が觀念として物體を領會すると云ふ事實に就て道理的説明をなすこと能はず、之れに就て道理的説明をなすものは獨り有神説あるのみ、有神説に在ては物體を實在者と承認す、而かも是等のものたる獨立なるものに非らずして、意識を有する靈性的絶對理性なる神の創造に係り、神は是等を創造するに方り、空間と時間の制限の下に於て其の中に己れの「素型」(Archetypal)思想を現示したりと思考す、されば是等の物體は其本質よりして己に標號たる也、詳言すれば、是等は其創造者の思想を表示するものなるべし、例令へば尙ほ蒸氣機關が其製造者の思想を表示し、若くは書籍が其著者の思想を表章するが如く然り、此説こそ實に、之

に類似するものに由て知らると云へる確言の眞意と能く契合する也、夫れ思想の創造、表示たる物躰は、思想を以て領會するを得べく、物躰は其物自身に於ても、其相互の關係に於ても、觀念即ち神の素型思想の表示なるが故に、觀念と爲して之を領會するとを得るなり、是等の物たる、既に思想の表示なれば、自ら思想の表示となりて顯はれ、而して一たび其人の心意に對して自己を啓示するや、思想若くは觀念となりて其原形に復歸する也、されば此觀念は觀察者の意識外に、全く客觀的に實在する者なり、但し其實在たるの基礎は觀念其物の中に存するにも非ず、物躰の中に在るにも非ず、只だ物躰中に顯はれたる永遠理性の素型思想たるが爲めなりとす、右の如き意味よりして言ふときは、物躰は皆な神の素型思想の表章なり、而して物躰の觀念の客觀的實在といふことは、觀察者の意識とは全く別物にて、而かも合理、眞實の意味を有することなるべし、然るに無神の哲學統に至ては毫も此理に對する充分の意義を附することを得ず、

苟くも實在するものは合理的なりと云ふ確言の眞意は上の理論によりて理解し得べし、抑も此確言の眞意を解剖すれば、苟も實在するものは其本質に於て可知的

なる者なり、即ち可知性若くは觀念性を有すと謂ふに外ならず、此理たる、吾人が今日機會を有せずして未だ該實在者に就て知らざるあるも、尙ほ眞正なりとす、凡百の學術は皆な此自定を基礎として立つ者なり、何となれば學術は苟も實在する者は學術的講究の正當なる目的物にして、學術的に知るとを得べしと自定すればなり、若し世界をして不合理なる者、法則なき亂雜なる者、若くは合理的に整理せられざる者にして、合理的に理解し得られざる者たらしめんか、即ち學術も、萬人共有の普通知識も皆な成立せず、思考すべからざること、ならん、學術的の知識は只だ合理的の結合、配設及び指導ありとの預想ありてこそ初めて成立す可きのみ、さればヘーゲル曰く、物界は思想の貫盈する物界なりと、之を詳言すれば、吾人にして學術的に物界を曉得せんと欲せば、之を以て智能の貫盈、配設、整理する物界と思推するの一法あるのみと云ふに在り、

吾人は實に此に初めて彼の「ムンツス、インテリキビリヌ」(Mundus intelligibilis) 若くは「ユヌモス、ノエータヌ」(Kodanos Nohtros) 可知世界、即ち世界に關する觀念の客觀的實在を以て素型的にして且つ永遠なりとなす古語の眞意を了悟すべし、若し物界の

物界には皆な可知性ありて、随つて觀念の側面ありとせば、宇宙其物にも同様の性ありて、其觀念あるを預想せざるべからず、而して此觀念は即ち素型思想に存するの宇宙なる可くして、現に存立する宇宙は之が啓發的の表顯若くは啓示なるべし、吾人宇宙を探究して、其中に「ムンツス、インテリギピリス」即ち素型思想の世界あるを知る、學術は此宇宙に啓示せられたる素型思想の世界の何物たるやを告白するに外ならず、若し此觀念の世界にして、之を啓示する宇宙なくして存在するところありとせば、吾人は必然此世界が或心意の思想若くは觀念として存在せしとを信ぜざるべからず、何となれば心意なき思想といふことの思考す可からざるは、動く可き物界と動かす可き勢力となき運動の考ふ可からざるが如くなれば也、然り而して素型宇宙の表示たり、吾人が此宇宙を讀むの書籍たり、將た該宇宙を告白する神の語とも謂ふべき現存の宇宙によりて此素型宇宙が啓發的に啓示せらるればとて、之が爲め決して右の推論を無用視すべき理由なしとす、豈に唯た無用視すべからざるのみならんや、之に由りて愈々吾人は宇宙其物は彼の進歩的に宇宙に其素型思想を啓示する期成心意即ち活動理性の成果なることを推測せざるべからず、

是に於てか吾人は知る、物界は表號的なるを、即ち思想の表顯若くは啓示なることを、然り而して既に物界存在すと云へば、則ち思想なる者は其中に預想せられ居るものにて、此思想は實に萬有中に自己を啓示する永遠理性中に素型的に存せざるべからず、

已上の講究によりて吾人はプラトリーの觀念説の起點と意義とを了知し得可し、夫れプラトリーは萬物の客觀的可知性若くは觀念性が萬物に關する自己の意識的領會と全く分離して存在すると認め、此くて物界は人間が意識中に有する該物界の觀念とは全く別に存在する觀念を預想すとの事實を認めたり、彼は物界の中に示され、而して觀察者の意識に顯はるゝ觀念を以て、思想の性狀たり又物界性狀たる永遠觀念と認知したり、此點に至るまでは彼の説眞理に合へり、されば氏が哲學は此大眞理の功徳に由りて、幾世を経るも常に人間思想の間に屹立して其地位と勢力とを保持したり、有神論者は神の素型思想を以て此等觀念の實在、意義の基礎と爲すものなりとす、

ヘーゲルも亦た觀念の客觀的實在を認む、夫の宇宙を以て思想の現示なりとなす

氏の意見は、實に氏の哲學に價値を與ふるの眞理にして、吾人は種々之れを適用して有神的思想の補助となすことを得、然るに氏が根本の大誤謬は此の觀念若しくは思想を以て有心的理性、靈性に歸せざるの點に在て存す、氏の説によれば、法則の系統たる物界の本質は普遍的 (Das Allgemeine) なるものに外ならずと、故に宇宙の本質即ち遡原的根據は思想なり、即ち客觀的觀念なり此の觀念は創造的にして自己を宇宙に展開する者なり、然れども是れ只だ非有心に且つ無意識にして、最も廣き抽象なる論理的概念に外ならず、而して氏は此論理的概念即ち普遍的なる者を以て、宇宙に自己を展開し、終に人間に至りて意識を有するに至りたる創造的觀念と爲す、抑此觀念が由て以て宇宙に自己を展開せし世界的運用は、論理の運用と一樣なりとす、かくて吾人は夫の唯心的凡神説に陥るに至るなり、然り而して遂に此觀念は主觀的の意識、を有する思想と混同さるゝに至りて宇宙其物は主觀的觀念説中に埋没せらるゝに至るなり、或る滑稽なる記者之を以て、コラの厄と方さに相反する災難にして、地人を呑まざるも、人却て宇宙を呑むものなりと謂ひしは、眞に當れりとす、然り而して彼の宇宙を以て思想に基因すと斷定すると同時に、

此思想を以て空々虚々として浮動する思想者なき思想、理性的精神なき思想なり永遠に宇宙に活動する唯意的精神なき思想と斷定する總ての説は、其結果必ず右の大誤謬に陥らざるを得ず、

第二、物界の表號的なる事は、物界が學術系として領會せられ、隨て吾人は之が吾人の心意と相和合する心意の表示たることを發見すると是なり、吾人の心意は物界中に自己の合理的原理あるを見、自己の推論あるを見、且つ自己の心意的創造物あるを見る、されば萬有を觀察するは、是れ絶へず理性に存する原始的直覺の眞正なること、及び思想の運用の妥當なることを、實驗によりて確定するに外ならず、人萬有を見るときは其中に自己の理性の表示あることを見る、されば物質系の中に於て如何に遼遠なる星界を視るも、尙ほ且つ安易の心地するなり、何となれば至る所其中に自己の智能と一樣なる智能の表示を發見すれば也、

右に論ずる所の理は形而下學の世に存立する事實よりして頗る明白なり、抑も形而下學なる者は智能に存する性狀と、其原理と理法の順序とにて物界の實體を表出するの業に外ならず、吾人は外界を探究して、其の吾人が自己の心意の中に意識

する智能の表示たるを知り、其吾人の思想を支配する原理と理法とに合するを知る、吾人は物界と其運動とを觀察す、然るに皆な心意の理法と相契合し、其思想を表示せざるはなし、吾人が物界を學術的に知り得るは、只だ物界が表示する思想を知るによる、學術其物は是れ物界に關する至精至完の知識に外ならず、學術は其物界に發見する觀念、理法、調和を宣言するものなり、其物界中より讀取せりと自白する精密の知識なり、若し物界をして吾人の智能と同様なる智能の表示に非ざらしめんか、世決して學術なる者あらざる可し、若し物界にして既に觀念の表示に非ず、又理法に従ふて整頓されし者ならざらしめんか、則ち決して思想に反譯さるゝ能はざるべし、學術は物界を觀察して、其至る所に智能の發見するを發見す、恰もシヤンボリオンが埃及の象形文字を譯解せしが如く、學術は物界を譯解し、其表示する思想を了知するなり、若し此象形文字にして其初め思想の表號に非ざらんか、如何に精力を竭すも決して其中に何の意義をも發見する能はざる可し、然ども此等の文字たる客觀的の實在と觀念性とを具備するものにして、其客觀的實在の眞趣は實に其客觀的觀念性の中に在る也、醫學博士カーペンター云へるとあり、曰く、吾人は實

際物界に存在する現象を反譯して、智力的反映となすにあらずんば、一步も進むこと能はずと、是れなり

物界に啓示せらるゝ理性は吾人の理性と一樣なりとの事實は、學術的の先見によりて明白なり、而してコントは、現象を先見、預言するの力は元來學術の特有物なり、されば此力に到達せざる知識は學術の名を冠するの價値なしとまで主張せり、氏の此後半説は誤れり、然れども形而下學は既に評多の場合に在て此力に到達したり、何となれば學術は分秒時だも過つとなくして能く未來幾世の事變を預言するを得る程迄も精微に、萬有の勢力を整理する理法を知れば也、

且つ學術上の發見に就て之を見るも此理亦た明白なり、人一人たび斯くあらざる可からずとて臆定し、以て物界を探究すれば、其果して斯くの如くなることを發見す、發見者の天才一の預言的思想を書き出して云ふ、物界は斯く々々あらざる可からずと、是れに於て彼れ物界中出れば、果して己れが之を想定したりしより幾世前より業に已に其概念通りの事の、物界中に現實さるゝを見る、乃ち其方法を異にすと雖も均しく是れ純粹なる智力的概念に外ならず、蓋し發見の歴史概ね然らざるはな

し、發見とは即ち智力的創造、預言的概念の物界中に表顯實現せらるゝを發見するに外ならず、然り而して天才の士の預言的概念が、其實際に發見せられ、觀察に由りて證明せらるゝより數年若くは數百年前に唱道さるゝが如きとあるは、決して珍しきことにはあらず

發明の上に於ても亦た同様の例を見る可し、夫れ發明者は其の器械を實際構成するに先ち、思想の中之を創成す、而して思想の表示として創造されたる、鋼、鐵、木材、水、火、電氣等は容易に發明者の思想に服従し、其觀念を創成する際彼れを指導せし理法に従ひ、能く其指令する業をなすなり、而して彼れ物界を研究するに、其中同一理法に従ふて同一の事業をなす同様の構造あるとを知る、然り而して人をして發明を思附かしむるものは往々物界に存する工夫なり、蓋し物界に於ける神の技術は人間の技術の模型たればなり、

且夫れ學術に數學を應用するの一事は實に顯著なる例證なりとす、吾人は自己の思想より、而かも毫も實驗に關係なくして吾人の心意の内に幾何學線を描き出す、然るに吾人一度び物質的宇宙に出て、之を觀るに、宇宙は到る所吾人の心中に存

する純乎たる先天的の幾何學に隨ひて構造せらるゝを見る、夫れ地に於けるも、天に在るも、未だ曾て子午線若くは赤道線なるものなしと雖も、宇宙は數學の原理と證明とに従ふて構成せらるゝ也、吾人先天的、幾何學的に一の結晶體を組成し、而して後物界を吟味するに、同様の意匠にて形成されたる結晶體を發見す、各原子は多元方程式を解く、若し此解式を充分に説述するときは地球を一周せしむるに足るべし、とはシェポンの言なり、(Jevon's Principles of Science, p. 756.) ハーヅワード大學の教授ピアース氏數年前一の數學書を世に公にせり、而して氏の思想に伴隨して之を咀嚼するに堪ふ可き能力ある人々の云ふ所に由れば、氏は同書中に左の如きとを證明したりと云ふ、曰く、若し創造の大業を以て吾人に委任せらるゝならんには、吾人は形骸、數及び能力に關する自己の先天的概念に由りて、此世界と其意匠を同くせる一世界を創造せざるを得ざる可しと、之と同様に吾人は數學上の推理に由りて、空氣若くは水中を通由する運動に最も能く適合したる形骸を決定し、又魚鳥類に於ても吾人の純粹なる智能より出づる此等の先天的證明と相契合する形骸を見る、博士ヒル氏曰く、一千八百四十三年に出版せられしピアースの積分學書に、只だ

數學的符號を弄するの熱心より工夫解説されたる一問題あり、然るに千八百六十三年に至るに及んで、此問題は一の地平なる紐より垂るゝ二箇の搖錘の問題に關して、完全無欠なる預言的研究、解説たるに至れり、之と同様にガリレオが「サイクロイド」の議論も亦た久しき後に至りて搖錘、降下物躰及び側壓に對する抗抵力等に關する問題の關鍵たるに至りけり、基督降生前四百年の頃「アラト」及び其徒弟輩は純粹なる幾何學的思想の習練として楕圓を講究せり、然るに十七世紀に至りて「ケプラー」は、天躰の「建築者が星天に巧妙なる楕圓圖を描いて吾人に示せることを發明したり」(Natural Sources of Theology Thomas Hill. pp. 66, 67)

是を以て吾人は結論せざるを得ず、曰く、物界何れの物を觀るも、理性は其中に全く自家特有の元素を鑒別し、而して、若し學術にして其根を世界に置かざる時は、完全なる學術といふ思想は妄想に過ぎず、(W. A. Butler, History of Ancient Philosophy, vol. II, p. 116, 130)と、故に學術的に攻究するとき、物界は皆に思想を表示して心意を啓示するのみならず、吾人の心意、思想と符合する心意、思想を啓示する也、夫の學術が物界の各所に顯はれて物界的宇宙の本性を定むる者たることを發見し、且つ之を基

礎として以て其學術たるの自信を全ふする所の智能、原理、理法、觀念は即ち人間の心意に存する智能、原理、理法、觀念と全し、されば此に生す可き必至の斷案は即ち下の如くなる可し、曰く、人間の理性は宇宙を組織したりし所の理性、即ち普遍理性と一様なり、曰く、神の理性も、人の理性も、宇宙に存在する理性は一種、同類なりと、此斷案たる、實に有らゆる學術に對して欠くべからざる預想なりとす、蓋し學術は人智に外ならず、夫れ學術が宇宙の學術となるは、單に人智の運用と、其觀念、原理及び理法に従ふとに在り、若し理性と其原理、理法とにして一切の空間と時間に通じて同一ならずとせば、若し他の世界若くは他の時代に在りては、理性全く人間の理性と異にして、之が爲め吾人には全く理會す可からざる者たらば、若し又其原理及び理法にして人間の智能に存する原理、理法を廢滅し、又之に矛盾するものたらば、則ち學術なるものは成立す可からず、其觀察と歸納、其論理と數學によりて其の世界と年代の知識を得ると能はず、人間の認知、觀念及び推測には客觀的の實在なく、又人智は一箇人の意識内なる單純の感覺となり、了らんのみ、
上來研究したる所に由て之を觀るときは、形而下學は其根本の自定に在ても、又其

公式に在ても、有神説と能く調和して毫も反對するの點あらざると明白なり、夫れ學術が其研究、發明に於て、有意識に若くは無意識に其基礎とする所は、余が合理的實験説と名稱せし知識説にして、有神説の基礎とする所も亦實に之外ならず、(Pitt. Basis of Theism. pp. 142-151, 560-564) 如何にも或有神論者中に理論上、人間は只だ主觀的印象と現象とを知るのみなりとの意見を持つる者あるに相違なし、然れども此意見を懐く人々も、其實地の學術的研究と發見とをなすに當ては、知らず覺へず、自家の哲理的思辨と全く相背反する知識説、即ち右合理的實験説の眞正なるを承認せり、されば此流の有神論者は、所謂其知識不相應の建築をなしたりとも謂ふべきものなり、夫れ形而下學は其實際に於ては全く現象説及びコントの實驗説を棄却し、實在者の關係及び實在者に顯はれたる原理、理法、理想及び目的の客觀的に實在することを認めて以て其知識を建説するなり、故に形而下學は其根本の自定及び其方式に於て有神説と相親和して背くとなし、形而下學は其發見をなす毎に、常に有神説の哲理上の基礎たる合説的實験説を確證しつゝある也、

物界表號説の第三の證據は、人間の行爲と言語に於て共に靈性と物界との間に契

合あるとを認むるの事實なりとす、

右の契合は物質上の形骸器械上の發明、建築、繪畫、彫刻等に於て、人が自己の觀念を物形に顯はさんとするの傾向あるに由りて示さる、

又此契合は之を言語に徴しても知らるべく、靈の實験は其初め物質上の實験に的
用せられし言語を以て表明せらる、此事實たる實に有神的概念と契合して以て之
を鞏固にするもの也、夫れ永遠なる靈は物質的宇宙の中に其素型思想を表示す、此
宇宙こそ即ち啓示の原始の媒介にして神の第一語とも稱すべき者なり、物界と云
ふ書籍は是れ楷梯初步の書なり、神は其小兒等をして此れに就て初めて神の名を
綴らしめ、且つ神の性質の如何を讀取せしむ、是を以て何れの國語に於ても、靈物の
名稱は今日に至るまで、啓示の原始の媒介物を示さぬはなきなり、

此物界と靈の契合は古往今來有らゆる思想界の人の思想に確在して滅するとな
し、有神説の宣言する如く、若し永遠なる靈が物界に自己を啓示する者とせば、靈物
間に矛盾及び相互の反撥ある可からずして、必ず契合ある可き筈也、物界は啓示の
爲めに恰當の媒介ならざる可からず、永遠の靈が可視性を裝ふの衣服たらざる可

からず、歴史の示す所に由れば、人はたどひ不知不識の中にもせよ、常に此觀念によりて活動したりし也、有神説に曰く、靈は物界の中に自己を啓示すと、而して今古宗教を見るに、人は靈の發現を物界中に見たり、有神説に又曰く、神は物界に其思想を表示したりと、而して古往今來人間は、時に或は其言葉を誤用し、其眞意を誤解し、若くは意味なき語を綴る等の誤謬に陥りしにもせよ、兎に角物界に思想あるを認めたりき、且つ此契合と吾人の既に觀得したるが如く、實驗的若くは哲理的學術に於ても亦た認めらるゝ也、何となれば學術なる者は宇宙に顯はれたる思想を讀むを以て其本務とし、其一切の豫定の由て立つ所は、唯一同類なる理性ありて宇宙を貫き、以て其中に其思想を啓示すと云ふ預想に在れば也、加之物界と靈の契合は、人が無生物を生物視し、又詩歌を弄して喜ぶを以て、之を認め得べし、即ち人は物界の表號を通過して其裏面の意義を觀察し、以て無生物中に生命と靈とを描出する也、ハイツの淋しき樹と云へる詩の如きは即ち其一例なり、其詩に曰く、

友に離れし松の樹は

はるかかの際にそびゆなり

冬といふ蛆情をかみ、冷へこゝへては打かこち

つれなきあらしにゆられてはちぢふるひつゝ、行めり

斯くもはかなきこゝへ木も戀ひしたふなる東路に

枝葉もまげき椰子の樹のあたゝかき夢につゝまれて

玉の緒のいのちながらへり

もゆるばかりの沙原の岩にたゝずむ椰子の樹は

松と相見んかたらんどさぞやこがれん恨みなん

夫れ右の如く宗教も、實驗的及び哲理的學術も、詩歌も、皆な悉く物界と靈の契合を承認し、物界中に吾人の有すると同様なる智能の表現と、合理的靈の啓示とあるを發見し、各々物界を以て一種の鏡面となし、人間の靈之に臨むときは自己の映像を其中に見ると告ぐ、蓋し同一の鏡面を種々の鏡架に挿みたるまでのものなり、最後に、物界の思想を表示すと云ふ事は、總ての物質物及び其物質力は、コスモス即ち形而下宇宙なる一個の統一せる系統を成して存在すと云ふ事實より見るも明白なりとす、夫れ此概念は一切學術の成立上必ずなくては叶はぬ所の者なり、然り而

して系統なる者は其本質上智能を含蓄するもの也、系統とは複雑の物體が共通の理法と統制觀念とに従ひ、相調和して活動するといふ意なり、蓋し人類が宇宙に關して斯の如き觀念を形成するを得たりし前、人智は已に大なる進歩をなしたるに相違なきに此觀念たる頗る古き者にて、其起原は茫邈として知るに由なき程なり、今日に至りては、總ての物質物が宇宙と云へる一系統中に統一するといふとは、凡て文明人民の熟知する所にして、一切の學術に在ては疑ひなき事と斷定せらる、然り而して此事實其物は物界か智能を顯はし、思想を示すと云ふ事の争ふ可からざる證據にあらざして何ぞや、且つ此事たる單に右の事實を證明するのみならずして、此系統なる者は人間の心意と同一種にして、宇宙を貫通統治する一個の合理的心意の成果なる事を證明するものなりとす、

且つ夫れ宇宙とは無數の小系統を含有する一層巨大なる統一系にして隨て是等一切の小系統は悉く相和合して一個の總括系統に屬する成分となり、而して此總括系統は實に一個の總括觀念若くは意匠を表示する者なりとす、吾等の太陽及び諸遊星は此系統中に在りて太陽系を組織す、思ふに宇宙に無數の太陽ある如く、相

統一して宇宙と云ふ一系統をなす無數の太陽系あるべし、且つ吾人は地上に於ても亦た許多の系統あるを見る、有機物は種と類とを成して概括せられ、且つ此く彙別さるゝのみならずして、下等種族は高等種族に服屬し、此の如く下等より層々高等に上り、以て系統を組成する也、加之れ各有機物は各自無數の細胞系を有し、而して其の細胞は皆有機々關の同意匠に隨ふて整然として行動す、總ての原子及び分子も亦相互に調和して系統中に行動するなり、而して終に此一切を包括する所の上は宇宙より下は元素に至るも、學術は到底純一の固形體といふ往古に思想せられし單純なる原子なるものは今日棄て顧みられざるに至れり、原子なるものは假令ひ分解するに由しなしと雖ども、而かも數部分より成立し、ポネロトキエス、アトム潜勢力を稟有するものにして、隨て原子其物は自ら一個の系統を成すことを發見せり、旋渦原子説に由れば、原子は吾が太陽系の如く複雑にして、之と均しく一定の理法に従ふて回轉する一種の極微太陽系にして、之を説明するには吾が太陽系の星學と同じく數學的にして複雑なる極微系の星學を要すと、たとへ此説は成立せざる者とするも、少なくとも分子なる者は學術に在ては許多の潜勢力を有して、強猛なる勢力の本原た

る複雑躰と認めらるゝものなりとす、是等無数の小系統も亦た是れ心意の表現なり、而して此等の小系統が統一結合して成せる一個の總括的系統も亦た是れ心意の表現なり、然り而して此く統一せる系統なるものは永遠變化なき素型意匠を現實せしが爲め活動する一個の絶對理性の結果となすに非ずんば、到底概念、思考す可からず、

形而下學は駁々として、物界の統一に關する吾人の知識を擴張しつゝある也、されば引力法は大陽系外の諸星辰に迄及ぶ事も證明されたり、全空間を貫通する不思議の精氣チカラは一切の世界を連結すと謂ひ、炎々たる大陽に於ける沸動は同時に地上の各磁石針を動かすと説く、光線分析鏡を以て視るときは、大陽を初め諸天躰中には吾地球上に於けると同様なる原素の在るあり、故に學術は全空間を通じて宇宙の統一せるとを表示するものと謂ふべく、而して進化論を以ては、全時間に通ずる進歩發達に於て宇宙の統一を開示しつゝあるなり、

此の如く論し來れば、吾人は必ず左の如く論結せざるを得ず、曰く、物界全体は思想を表號するものにして、普遍理性を啓示する者なりと、無神學術は此表號を發見し、

而して茲に其歩を止む、有神説は即ち進んで此表號を通過し、其背后なる實躰に到達し、以て其意義を解説するものなり、

第二、物界は理法の(Phil.)下に在りて秩序を有す、

吾人は此に道義法に關して論するものにあらず、物形系は單に非有心的なる者を包有するの故に決して道義法の支配を受くるとなし、然れども最も廣き意味より云ふときは、理法とは行動を左右する真理なり(Phil. Basis of Theism, pp. 185, 186)されば器械の運動を支配する真理即ち原理は是れ器械學の理法なり、此理法に従ふて構造されたる蒸氣機關は、之を稱して正しく構造されたる者と云ふ、而して若し該機關にして完全の秩序を具ふるときは吾人は之が運動を善良なりと稱す、詳言すれば、自己の本質理法に従ふて運動すと謂ふなり、之れと同じ物形系及び其中なる一切の物は善良に即ち理法に適ひて構造せられ、又かくの如く運動すと謂ふを得べし、物界中に觀察さるゝ事實的繼果亦た理法と稱せらるゝとなれども、是れ單に第二の意味に在て、斯く稱せらるゝに過ぎず、實際を云へば、是等事實的繼果は只だ眞の理法、即ち理性の原理の事實的表顯に過ぎず、

吾人は行動の秩序若くは不變なるよりして行動を支配する理法あることを推知す、若し一片の石ありて偶々壁上の一點を打つとも、吾人は之を以て有意的の働に出づる者と思はざるべし、然れども引續き二十回も壁上の同點を打つときは、吾人は其必ず有意的に投射せられしとを推定せざるを得ず、若し又兩骰子を弄する者ありて、續いて十回も毎回兩骰子ともに六の面の出現するをみれば、吾人は其骰子中に何物か嵌入せられ居ることを疑はず、故に吾人極めて單純なる行動、簡單なる連續に於てさへも、若し其作用の不變なるを観るときは、此作用を支配する有意的計画あるとを推斷する也、

抑も右の推斷たる、吾人が極めて鮮なき數の出來得る丈けの結合を計算するとき、は直ちに其道理に適へる者たると分明とならん、教授セボンスの言に曰く、骨牌^{ホイス}に於ては四箇の組同時に之れを爲す、而して異種の組數は之れを表出する爲めに二十八の數字を要する程の巨額となる可し、若し全世界の人民——假に之れを十億とせば——が一億年間、日夜絶へず骨牌を配分するも、此の長年月の終に至つて、其の出來得可き丈けの組數の十萬分の一をも盡すこと能はざるべし、………

苟も故意にせられしに非ざる以上は、甲番骨牌と乙番の骨牌と同一なること幾んどあらざるべし、ラプラスの計算する所に頼れば、當時世に知られし太陽系中天體の四十三個の獨立せる運動は、實に四〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇の結合をなすべしと云ふ、(Principles of Science pp. 190, 191.) 故に幾回となく斷へず秩序を守りて數元素が同一軌の作用をなすは智能的指導ありと云ふ事の確實なる證據なり、而して此證據の間然す可からざる事は、單位の數の増加し、觀念益々複雑に赴き、組織愈々錯綜し、觀念と組織との一定不變の契合に由りて益々明白となる、

夫れ宇宙の物形系は上は遊星、太陽及び太陽系より、下は極微の原子に至る迄、悉く秩序の貫通する所となる、何れの處にても、物質の在る所には必ず秩序あり、夫の紛々として結合し、擾々として交錯する物界無數の行動者も、其中整々不變の秩序ありて、常に一定の理法に従ふて作用す、學術なる者は總て此物界の秩序を發見するの業に従事する者なり、一切の歸納皆な基礎を此に取れり、人事日常の計も亦た之に基づきて決せらる、天氣模様を見て、雨將さに降らんとするが如しと云ふは、是れ其人只だ物界不變の秩序に基づける已前の觀察よりして一の推測をなしたるの

み、若夫れ前に言ひし如く、一對の骰子を幾回も毎に同一の面を顯はす様に投じたりと云ふ事實が、果して人ありて骰子の下底を重くして同一面を向くべからしめたりとの事を證明すとせば、吾人は斯くも無數の實在者を有し、斯くも錯綜にして、斯くも無邊なるに係はらず、常に秩序と不變とを保持して變はらざる宇宙の有様よりして、此かる理法に従ふたる不變と秩序とは、睿知者の指導の成果なりと推斷するを得ざらんや、今日有神説反對家中尤も有爲の士も尙ほ且つ云へり、吾人は此無上原因の事に就て如何様に思考するも、茲に一の事實ありて依然として存するを奈何せん、曰く、此原因よりしては、神に關する吾人の最高觀念に適する丈けに精密、雄大なる不斷の契合を成遂する一の指導力溢れ出づといふと是れなりと、形而下學の基礎とする根本の公則は、物界の不變と不斷となり、されば神が物界の中に永存、行動するを承認するの必要なる事は、形而下學其物の自から開示する所なり、

第一、形而下學の根本の公則を合理的に解釋するに於て、是非共神の存在を承認するを要す、

形而下學の臆定に曰く、一切の活動力と潛勢力の總量は常に同一なり、如何なる作用も其量を増す能はず、又如何なる作用の停止も其量を減ずる能はずと、是なり、此自定を詳言すれば、宇宙は永遠に行動する物質と勢力の一定量より成ると云ふに在り、此自定たる宇宙は外部の勢力なくして永遠自から運動するの器械なりと云ふ意を含む、然らば則ち此學術の根本原理は不歇自動と云ふ背理の思想を含むものにして、此背理の思想を學術は決して除くこと能はざる也、形而下學其物は實に自から此背理の思想を表するものにして、その運動の不歇を非認して纔に此背理を脱するのみなり、何となれば形而下學は有ゆる勢力は早晚平均して、その運動停止せざるを得ずとの理を發見すればなり、さて斯く全宇宙の運動一度停止するときは、永久停止せざるべからず、何となれば右の推察よりするときは、此宇宙たる機關外に此運動を再起す可き力あらざれば也、

有神説は此學術の根本原理を認定し、而して斯く形而下學が表示すれども除去する能はざる困難を除去する也、一切の動勢力と潛勢力との總量は神の中に永遠に存在して不變、不盡増減する能はず、何となれば神は絶對者なれば也、且つ此勢力の

指導統制の勢力を有するは、神は絶対理性なれば也、加之此勢力は活動的なるともあり又は潜勢的なるともあるは神は己の意の欲する儘に有限界に其力を伸縮するを得れば也、

形而下學の他の根本の臆定は、物界が理法に従ひ秩序を具ふと云ふと是なり、然り而して物界の不斷不變と云ふとも、一系統を成して相統一すといふとも、一として神の存在及び神の物界に於ける遍在、行動に依らざるはなし、夫れ形而下學は物界の不斷不變を自定すと雖ども、之を證明又は説明すると能はず、世或は此信念を以て經驗と觀察とに基けるものと主張する人あり、如何にも學術的觀察と經驗とは常に此理の真正なることを確實にすと雖ども、未だ曾て之を證明すること能はず蓋し學術的觀察は一般普遍なると能はざるが故に、隨て一般普遍の眞理を證定する能はず、加之實際宇宙間には原因不明の結果あり、又不變、不斷の性を有する者ありて、覺官の觀察に觸れざる事件は甚だ鮮少ならず、故に形而下學は止を得ず、證明なくして此原理を自定し、此原理によりて其探究を爲すなり、故に見る可し、學術が物界の不變、不斷の原理を確定するに非ずして、物界の不變、不斷の原理こそ學術の依

て以て成立する所以なることを、

有神説は皆に此原理を認容するのみならず、一層進んで此原理に哲學上の基礎を與ふる也、夫れ道理に適ふて行動する全能意志の行動は、至上なる不變、不斷及び統一を生ぜざるを得ず、

第二に、學術は只だ超物力の遍在して宇宙に行動すると想定して初めて宇宙の不變、不斷及び統一と調和さる可き事實を物界に發見す、

斯かる事實は物界の空間上の關係に於て物界に存す、即ち形而下學は引力、凝集力、光及び熱をば、物質の裡に固着せる勢力と見做すにもせよ、又は他より輸入せられたる勢力と考ふるにもせよ、孰れにしても到底之を説明すると能はず、而して之を説明せんと試むるや、困難と矛盾とは四出して復た收拾すべからず、(Phil. Basis of Theism, pp. 420-426) 學術の自定するところによれば、物界若くは分子は永へに相觸接せずと、吾人若し現在の視力よりも、一層強銳なる視力を有して物界を視るとせば、如何なる物界と雖も、之を組成する分子の周邊に空間あるとを視ん、されば分子にもせよ、原子にもせよ、一物界が他の物界に對して起す作用は、皆な常に若干の距